
アメジスト

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメジスト

【Zマーク】

Z4310Z

【作者名】

じりせ

【あらすじ】

楽して生きることが夢のアメジは、族長の息子モンドとの結婚がダメになつたことでやけを起こして、水晶の聖乙女になる。が目覚めたら百年後の世界にきてしまった。アメジを目覚めさせたのはなんの因果かモンドの子孫のジストだった。そこは巨大破壊生物【黒水晶】との生死をかけた戦いの世界だった。楽して生きる道のため、アメジは救世主として戦う道を選ぶ。異世界少女アクション。チベット密教文化からインスピレーションを得た世界観。 サイト掲載作品を手直しつつのCPです。2006/02/18完結済。全

「おのれーおのれモンドめーー。大地の底から呪つてやるーーー
つ。」

冷たい石の棺の中、少女はうなり声を上げていた。
なぜ、自分はここにいるのか、考える余裕すらなかった。
怒りにまかせて、自分の最期を実際にぐだりない理由で決めてしまった。

「あたしと結婚するつて約束したじゃん。ガキの口ばかり、ずっと
前から交わした約束をつ」

少女が怒っているのは失恋？　いや、少し違う…。

「やぶるかー？その口こいつ、自分が族長になる、その口こいつ。族長
の妻の座つ、あたしの夢つ！」

夢、自分の夢を無にしてされた事に対する怒りと…

「あんな大勢の前でだつ、あたしゃ、ちょーはしゃいで、とんだ赤
つ恥だつての。よつによつて、同じ巫女のシルバと、あんな地味な
女と…」

プライド、プライドを傷つけられた事に対する怒り。

なぜ彼女はこんな棺の中にいるのか、だ。
それは、彼女の夢が破れた直後の事…。

「アメジよ、水晶の聖乙女、やつてみる気はないか?」

白い髪を肩まで伸ばした初老の男は少女に問いかけた。

アメジと呼ばれた少女は、大地に寝転がつたまま、答えた。

「トパーズ様。なに? それ。あたし面倒臭い修行ヤだからね」「ふてぶてしく答える少女、しかしこいつもの事なのだろうか、そのトパーズと呼ばれた男は態度を変えず、続けた。

「水晶の聖乙女は大地の底から、このリストラルの民と大地の為に、ただ祈り続ける。

これはアメジ、巫女としてろくに修行をしておらんお前でも、立派にこなせる役目だぞ。どうだ?」

「それって、確かに生き埋めになるつてやつじやない? ジョーダン! あたしには夢があるの、そんなくだらない事、やるわけないじやん。」

「そうだな…。ま、無理にとは言わん。だが私も大神官として、お前を巫女として育てねばならん。それにお前の父にお前を一人前に育てあげると約束したからな。」

「オヤジのことはいいじやん。勝手に遺跡の研究だとかで、山の遺跡で死んじゃった奴の事は。」

アメジの父はどうやら放任主義だつたようだ。自分の意思を縛られるのが嫌で、趣味であり、生きがいであつた古代の遺跡やら、このリストラル独自の特殊なチカラ、この地の民は「水晶」と呼ぶそれを研究していた。

それは生あるモノの中にある氣の流れ、人間をはじめ、この世の生

物はこの大地から、流れてくる気によつて、エネルギーを得てゐる、といつ。中国でいう氣孔のようなものだらうか、そのチカラを水晶と呼ぶのだと。

「お前はほんとにオルドに似てゐる。いいとこも、悪いとこも。「げつ、やめてよ、トパーズ様つ。あんなのと似てるなんてーつ、嘘でも言わんといつーつ。」

「ハハハ。」

「そろそろ広場まで行かないと。ほら、今日はモンドのつ。」

「ああ、そうか。あやつもついに族長に就くのか、お前以上に心配な奴だからな。」

「だから、トパーズ様がしつかりサポートしてやつてよ。あたしだつて樂できるしー。」

「ん、アメジ、どういう事だ?」

ここリスタルは、北は山脈、南は草木も無い砂漠に囲まれた、山岳地帯にある集落である。厳しい環境の為か、外からも内からも人や生物の移動は無く、陸の孤島と化していた。

唯一の集落、リスタルの民が住むこの街の中心にある広場に、アメジは走つていつた。

今日はあるイベントが開かれる。モンドの族長就任の式だ。

モンドは族長の息子であり、アメジとは従兄妹であつた。モンドはアメジに負けず劣らずの、ダメ人間だつた。

アメジと交わした結婚の約束も、族長になれば、周りが世話をやしてくれると思い込み、お互い樂したいがための約束だつた。

アメジは息を切らしながら、広場の人の波をかきわけながら、台の上で挨拶を始めるモンドへと近づいていった。

「モンドっ。」と、小さくアピールするが、彼の視線はまったく別のほうへ向けられていた。

「みんなー、あと今日は、オレの花嫁となる人も紹介するー。」台の上でだらしなく揺れながら、へらへらとテしながら、彼はその花嫁の名を呼んだ。

「そう、その花嫁は、あたしつつ！」

モンドが話す前にアメジが叫んだ。

「ええっ、アメジ？ おいモンド、マジかよ？」 「あのケツでか女だぞ。」

周りの若者たちが野次を飛ばす。

「うつさいんじゃいつ、カス共！ 前から決まってた事なの！ ね、モンド。」

「い、いやアメジ…、オレの花嫁は…。」アメジから目を逸らしながら、モンドは言った。

「シルバだつつ。」

「…はあつ？」

モンドは隣にシルバという少女を呼んだ。

頬を染め、目を伏せながら少女はモンドの傍へと駆け寄った。えへへと、照れながら寄り添う一人には祝福の声が上がる。

逆にアメジには「バツカジやねーの、こいつ。」「とんだ勘違い女だよ。」

馬鹿にされている。

激しく馬鹿に……。怒りがこみ上げ震えだすアメジ。

「「」、「」ぬるよー、アメジ。ぬれたりぬつてたんだけじゃ、タイミングがや。」

いいわけモンド、しかし、今こそ最悪のタイミングではなかろうか。キツとモンドを睨みつけるアメジ。殴られると感じたモンドは反射的に身構えてしまつた。しかし、アメジは鬼の形相のまま、広場から走り去つたのだ。

夢破れし、アメジの思考はぶち壊れていた。

アメジが向かつたのは、街の外の山道。その先には、古代の遺跡の一つ、「水晶神殿」、岩壁を削られ造られてある。

そこには、トパーズと巫女の少女がいた。

「じつしたアメジ、用なら後にしる。」これから【水晶の聖乙女】の儀式をせねば…」

「まつて、ソレ、あたし、やる。」

「ええつ？！」

何があつた、と聞くトパーズには答えず、石の棺へと勝手に入つていくアメジ。

「立派な聖乙女になります、とモンド」ぬれてください。」

夢叶わぬこの世に未練などなく、あの世から呪いを放つ道を選んだ。そして、いつのまにか、眠りについていたのだった、モンドめ、とつぶやきながら…。

あれから何時間眠っていたか、まぶたに光を感じアメジは起こされた。

トパーーズ様？いやちがう。若い男。反射的にアメジは飛び起きた。

「モン…」叫びかけたアメジより早く、その男は語りかけた。

「あなたが、水晶の聖乙女殿。」

「え。」

目の前にいる彼はアメジのまったく知らない男だった。

「だれよ？ あんた…。」

「私はリストルの族長を務める、ジストと申します。」

（なに言つてんの、こいつ、族長はモンドがなつたばっかじや…？）

この出来ごとアメジの樂して生きる夢を遠ざけることとなってしまった。

「ジストー、もう、止めるたるよー。」

「タル。この石棺で最後だ、もう少し待つてくれ。」

冷たく静かな水晶神殿に、一つの人影と一つの小さな影があつた。

この遺跡には、百年前まで行われていたというある儀式にその身を捧げた少女たちの亡骸が納められていた。

標高の高い、このリスタルの地の、ここはさらに天に近い場所である為、神殿内に時たま、冷たい風が流れこんでくる。

青年に付き添つてきた小さな生物は風によつて、毛を膨らませられ、寒さに震えていた。

青年は最後の石棺に手をかける。

「どうせまた骨たるよー。もう骸骨はイヤたるー。」

どうやら他の石棺は、すべてこの青年が開けたようだ。石棺の中にいた少女達は、皆骸と化していた。なぜ、彼はこんな事をしているのか…。

「フンッ」青年は石の蓋を持ち上げようと力を籠める。

しかし、いくら大の男であれ、一人で持ち上げられる重さではない。だが、蓋はゆっくりと動きだした。

彼は体内の水晶（このリスタル独自の気の使い方）を自在に操れる

「水晶使い」だった。

手のひらが、ポウと光りながら、さらに力が高まつていいく。その数秒後、蓋はみごと外れたのだ。

「ああっ、どーせまた骨骨たるつ。だいたい百年前の人間が生きてるわけないたる。」

「タル…見る…」

「生きてたらそいつバケモンたる。そいつこそ黒水晶たるよつ。」

「タル、生きてるぞ、彼女だ…。ラルド様の言つた通りだ」

「へ、ええつ？」

その石棺の中には、今にも目覚めそうな少女の姿があつた。興奮を抑えながら、青年は少女へと近づく。

「んんっ。」少女の目蓋がぎゅっと動いた。「あつ…」

少女が目を覚まし、彼と目が合つた。

「あなたが水晶の聖乙女殿」

彼はそう語りかけた。わけもわからぬ顔で彼を見返す少女とは対照的に、青年の顔は、輝きに満ちていた。

アメジ、フリーズ状態

大地の底から呪つてやる、と。「水晶の聖乙女」をやるといだした自分。

自分をフツたモンドに対して、石棺の中でどかどかと怒つていたのは何時間ほどか…？

気がつきや目の前に見ず知らずの男。しかも、言つてる事意味不明！

とりあえず、深呼吸、でもう一度、男に問いかける。

「で、あんた、誰？」

「ですから私は、現在族長を務める…。」

「へ？モンド、もう面倒臭くなつて、族長辞めたのか？」

「モンドとは？」

二人の問答をイライラと聞きながらもう一つの口が開いた。

「ジスト、こいつダメっぽいたるよ。きっと、百年も眠つてボケたに決まつてたる。使えないたるよ。」

生意氣に話す小さな生物を見て、アメジは驚いた。

「ブツ、ちょっと、こいつまさか聖獣？」と、なぜかふきだすアメジにジストが「そうだ」と答えた。

「タルは私の良きパートナーです。」

彼らが聖獣と呼ぶその哺乳類は、このリスタルの地に、リスタルの民が移住していくずっと昔から、ここに住んでいた。彼らは、人と共存する道を選び、言葉を理解し、話せるまでになつた。

彼らも、水晶のチカラをその身に秘めており、ジストのよつな「水晶使い」と組んで、共に過ぐしている。

「あたしが知つてゐる聖獣のプラチナは、もつとスラつとしてて、足も顔もスッキリしてて……」

「プラチナ知つてゐたるか？タルのご先祖様たるつ。」

「は？ご先祖？何言つてんの、まだ現役よつ。だいたいアンタみたいなブツサイクな聖獣見たことないわよ。」

「ぶつちーーつ。ブチキレたるーーつ！」

次の瞬間、アメジが激しくブツ飛んだ。タルの飛び蹴りが炸裂したのだ。

「ど」ああーーつ。

変な悲鳴を上げ、凄まじい格好で、アメジはすつ転んだ。

「コラつ、なんてことしてんだ、タルつ。」

ジストがひょいと、タルを抱き上げた。

「だつてー、ジストー、こいつがタルのことバカにしたたるからー。」

「だつてさ、ほんとにブツサイクなんだもん。こんなモチみたにペつたんこな顔でさー。」

アメジが、ムクリと起き上がつた。

「いいか、タル。私達は、聖乙女殿にお力を借りにきたんだぞ。」

「？」（あたしの力を借りに来た？ビーウーー！ちや？）

「ううう、でもでも、タルとジストでがんばれば、黒水晶なんて倒せるたるつ。」

「それができないからこーしているんだろ？水晶使いと聖獣だけでは、黒水晶とまともに戦えない。」

「黒水晶……」アメジはその名に聞き覚えがあつた。

（でも、それって確か、あたしが生まれる前に絶滅したって聞いたけど……）

「黒水晶と戦うには、私とタルだけではダメだ。巫女のサポートが必要だらう。」

「巫女ならサファアがいるたるー」

「サファアは、まだ前の戦闘での疲れが癒えてない。今では巫女も彼女一人になつてしまつたからな。」

黒水晶と戦う？

やつぱりアメジには、この一人の会話は理解不能だつた。

黒水晶は知つてゐる。この田で生きてゐるところは見たことは無いが。

以前アメジの父「オルド」が亡くなつた後、葬式で初めて知り合つたモンドと一緒に、父オルドがよく通つていた山脈にある遺跡をと巡つたりしていた。

その山道の途中、何度か目にした、巨大な生物の化石。

このリスターに、昔からいたといわれ「黒水晶」と呼ばれている。

見た目は鳥類のようで、はるか昔に滅んだ恐竜にも似てる。

その体は巨大で3Mから10Mはあるといわれた。さらに、凶暴で人を喰らう、その体内には毒を宿し吐く息だけでも、生物を死に追

いやつたといつ。

全身ドス黒く、田も不気味に黒く、ギラギラと輝き、大きなその体には、桁外れな水晶を秘めていた。そのことから、人々はその怪物を黒水晶と呼び、恐れたのだ。

しかし、リストルの民は、実に好戦的な民族で、恐れるだけではなく、戦う道を選んだのだった。

その戦いの歴史は、リストルの民がこの地に移住してきた、千年も昔から続いていた。

人は、聖獣と力を合わせ、たくさんの犠牲を出しながらも生きぬいてきたのだ。

その戦いも、アメジが生まれる少し前、アメジの父オルドや、その弟でありモンドの父の二人が中心となり、黒水晶を絶滅させ、長い黒水晶との戦いの歴史に幕を下ろしたのだった。

（やう、黒水晶つて、とつぐの昔に滅んでんじやん。なのに、こいつらの言つてる事つて…。）

「とつあえず、街に戻つてラルド様に報告しよう。黒水晶がこの辺りに戻つてくるまえに。

さ、聖乙女殿。私と一緒にきてください。詳しくは、向いひでお話します。」

混乱ぎみのアメジに、ジストが優しく手を差し出す。タルはまだ不満げだが。

（よくわかんないけど、こいつが族長ならあたしの夢もまだ、終わっちゃいないよね？

ふふふ、ってかモンドより断然いい男だし。）

怪しい笑みを浮かべるアメジに、タルがピクリと反応する。
アメジは未だ自分が百年先の未来にいる事に気づいてはいなかつた。
そして、この直後に出来つゝ、最悪の出来事にも……。

「聖乙女殿、足元に気をつけてください」

「おおひ、どうも…」

ジストに導かれ、アメジは水晶神殿を出る。そのジストの隣をブツクサと不満気なタルが歩く。

アメジ、この面倒くさがりな女の瞳は希望に満ちていた。

「夢は終わってないぜっ！」

「え、なにか言いました？」

「ねえ、アンタさ、もしかして結婚してる？」

「え、いいえ。まだですが…」

「よっしゃーーっ！」とアメジがガツツボーズをとった瞬間、タルの飛び蹴りがまたも炸裂した。

「いつてーーっ。またやりやがったなー、モチ聖獣ーっ。」

「お前っ、今ジストのことやらちー目で見てたたるよっ。」

「こんの一ーと、もみ合いそうな一人をジストが止める。

神殿を出てからも、アメジとタルは、フーっと睨み合っていた。

土と石だらけの、このリストアルの山道を下りながら、眼下に映るは、リストアルの街。

世界から隔離されたこの地は、百年の歳月を経ようが、大きく変わることはなく、アメジのいたあの頃と、ほぼ同じに見えた。

そり、遠田からば。この時、アメジは違和感を感じる」とはなかつたが……。

その直後、その気持ちは吹き飛ぶことになる。

「……」

その異常に真っ先に気づいたのはジストだった。

「タルフ！」

自分のパートナーを傍へ呼ぶ。その声にタルも状況を理解し、すぐにジストの傍へと駆けた。アメジだけはなにも理解しておらず、え？え？となるだけだった。だが、ただならぬ事態だとすぐにわかった。

まだ日中だというのに、アメジ達の上は真っ黒な影に覆われた。見上げると、そこには巨大な怪物がアメジ達を見据えていた。

「黒水晶……」

「なつ、なんだーつ？！このバケモンはーーっ！！」

慌てふためくアメジとは対照的に、ジストは冷静にそのバケモノを見ていた。

「思つていたより早く戻つてきたな。」

「案外この女の水晶に呼ばれてやつてきたのかもたるよ。」

（もしかして、これが黒水晶？ええっ、でもなんで？急にこんなのが現れんのさつ？ そしてなんでこいつらは冷静なんだよ？まさか、ドッキリなのか？）

黒水晶は三人を確認すると巨大な口をさらに広げて、襲いかかってきた。

うつそーん。と立ち去っていたアメジはジストに抱きかかえられ、

そこから下二メートルへと飛び降りた。タルも同時に続く。

その素早い判断と行動で、少し余裕の時間ができた。あっけにとらわれているアメジにジストが訊ねた。

「聖乙女殿、ドクロ水晶は？」

「は？ ドクロ水晶？」

「ジスト、こいつ持つてないたるよ。」

「え…。」

ジストは、本当に持つてないのか訊ねた。

アメジはなにソレ？ とわけのわからない顔をしていた。本当になにも持つてなかつたのだ。

それを知つたジストはさつきのクールな表情からがっかりした顔になつた。タルは「やつぱり」とため息をついた。

「巫女の力無しでは、黒水晶へ攻撃が届かないからな…」

「こいつ巫女のくせに、ドクロ水晶持つて無いなんて、ニセモンたるよつ。」

（なんのよ、ドクロ水晶つて？

ん…、そういうえば以前、トパーク様がちゃんと修行すればそれの扱い方を教えてくれるつて、見せてもらつたおぼえが…。

そう確か、透明なドクロをかたどつた石で、手のひらに乗るサイズの…。

それに水晶をこめるとかなんとか。）

とアメジがのんびり考えてこるうちに、黒水晶は田の前にまでやつてきた。

「どわわわあーーっ！」 とまたも慌てふためくアメジとは反対に、

ジストとタルはクールでいた。

「しかたない。氣をそらすことくらいしかできないが、タル。私たちだけでいくぞ。」

「わかつたる。」

「いいか、タル。今日は戦いをしにきたのではない。聖乙女殿を無事、ラルド様の元までお連れすることだ。」

そう言うと、ジストはアメジに街のほうまで走るようになつた。半分パニクリながらも、アメジは頷いた。

黒水晶はまたも巨大な口を広げながら襲いかかってきた。

アメジは駆け出し、ジストは自らの水晶を高め、それを右手へと集め、激しく輝きだしたその右手に集まつた水晶を、聖獣タルへと向けて放つ。

水晶使いジストの水晶によつて、さらに大きな水晶をその体に宿したタルは、輝く光の生物兵器と化す。

光の兵器となつたタルは光のごときスピードで、空へと駆ける。

そして直線的な動きで黒水晶へと向かつた。

しかし、黒水晶は、それを簡単にかわした。

ジストもタルもそつなることはわかつていた。

聖獣は水晶使いに水晶を注ぎ込まれることにより、戦いの力を得る。それにより強力な光の兵器となるが、その状態の聖獣は、ほとんどの感覚（視覚、聴覚など）を閉じ、攻撃へとまわすため、自分の進む道すらわからなくなり、直線的な動きしかできないのだ。

その上黒水晶は、直線上の動きに強く、その行動を見切られる可能性が非常に高いのだ。

それをサポートできるのが、リストルでは巫女と呼ばれる、女の水晶使いなのだ。

「ひい、ひい……」

アメジはひたすら駆けていた。

とはいえここは山道下り道。おもわず転がりそうになり、アメジは転ぶ直前、下の道まで飛び降りた。
ダメ人間といわれてきたアメジだったが、運動神経はなぜかよかつた。

ふう。と一息ついたアメジは上のほうにいるジスト達を見た。

「あいつら、大丈夫なのか？黒水晶と戦うなんて、だいたい滅んだんじやなかつたの？ オヤジ達の代で終わつたつて聞いてたのに。」

黒水晶が絶滅した後、対黒水晶の為の職業だった水晶使いと巫女は、祭りが主な仕事となつていたのだつた。

巫女は踊りを舞い、水晶使いは曲を奏でる。

アメジたちが行つていた修行も黒水晶と戦わなければ無意味なもののがほとんどであつたが、それはもう儀式と化していた。

「はあー。とにかく街に戻ないと。トパーズ様ならなにか知つてるかもね。」

アメジは飛び降りながら、山を下り、街をめざしていた。

街を目前にし、あの声が聞こえた。

「聖乙女殿っ。」

ジストとタルが駆けつけた。

あの直後、黒水晶はなにかに呼ばれたよう、「ギヤアアアー」と鳴いたかとおもうと、突然羽ばたき、山脈の向こうへと飛んでいった

のだった。

「では、聖乙女殿。」案内します。」

（案内つて、あたしゃここの生まれなんだけど…。しかし、この男バカ丁寧な奴だな。）

「てゆーか、その聖乙女殿でのやめてよね。あたしは……」

（ほんとに望んでなつたわけじゃないし、ヤケおこしただけだもん。）

「では、なんとお呼びすれば…？」

「アメジ。アメジでいいわよ。アンタは、ジストでいつたつけ？」

「アメジ…」

「そつ…よろしくね、ジスト」

そう言つてジストへと歩み寄るアメジに、「近づくなー」と、タルがどかつとぶつかる。

山道から街へと入る。山岳地帯にあるコスタルは、街も山に沿い、段々状に建物が立ち並ぶ。

ゆえに、街は階段だらけであった。

アメジ達が街へ入ると、たくさんの人が三人を迎えた。しかもえらい歓迎ぶり、「この方があの……？」と皆珍しそうにアメジを見ていた。

ジストには「族長、おかえりなさい。」の声がかかる。アメジにとつては異常な光景だった。

いつもバカにされてばかりだったアメジにとつて、こんな歓迎をうけるのは初めてだったのだ。その時、アメジは少し違和感を感じた。だれ一人として、知った顔がないのだ。あと、街の様子もどこか違う気がした。あとでトパーズ様に会いにいこうなどとアメジが考えていると、人ごみの中からジストの名を呼びながら、アメジと同じ年頃の少女が現れた。彼女はジストの姿を確認すると、うれしそうな表情で彼の傍へと駆け寄った。

「ジスト様っ！」

「サファ」

サファと呼ばれた少女は潤んだ瞳でジストを見上げた。この雰囲気からして、二人は恋仲なのは、とアメジは悟った。確かにいい男がそうそうフリーではない。

「マジ？」

早くもアメジの夢は崩れ去るのだった。

「ジスト様、おかえりなさい。」

「ああ、サファ。ただいま。」

さわやかに挨拶をかわす男女を隣に、アメジは一人落ち込んでいた。

夢は終わった、と。

「それより、まだ動き回らないほうが多いんじゃないかな？ケガも完治しないだろ？」

「ええ、でも心配だつたから…。」

あ、ジスト様、…そちらの方がもしかして…」

とサファはアメジを見た。そしてジストがサファにアメジを紹介する。

「ああ、そなんだ。ラルド様は正しかつたよ。」

彼女が水晶の聖乙女、アメジ殿だ。」

と、ジストがおおげさに紹介すると、サファはもぢりん、周囲の者たちも「おおっ。」と驚いた。

それに気づいたアメジは「んっ」と少し変な顔をしていた。

「おじい様も喜ぶわ。すぐに知らせましょ。」

とサファが後ろを振り返った瞬間、すさまじい声が響きながら、こつちへと近づいてきた。

その声は人ごみを跳ね除けながら、アメジの目の前で止まつた。

「おおおっ。族長、そちらの方が聖乙女殿じゃなあっ。」

その声の主は、つるり、と頭のはげ上がつた、歳は七十を迎えたばかりの男であつた。

「ええ、ラルド様のおっしゃつた通り、水晶神殿に…」

とジストが説明をしてるが、その男はほとんどそれを耳に入れておらず、舐めるような目でアメジをジロジロと見ていた。その目線は顔よりも、胸元そして下半身、特に尻をしつゝに見ていた。

「ちよっとー、」のジジイだれよつ？」

アメジは露骨に嫌な顔をしながら、一歩後ろへ下がった。

そんなアメジの心中も察せず、ラルドは一タ一タしていた。

「アメジ殿。こちらは大神官のラルド様です。」

「大神官？ なに、」のジジイが？」トバーズ様は？ とアメジが問いかける間もなく、ラルドが激しく接近。満面の笑みで迫つた。

「おおつ、アメジ殿つ！ いやー、ワシの理想どつづじや。」

ワシの理想どつづのいい尻じやー。

このラルドとの出会いがアメジに激しい戦いの道をもたらすことになるのだった。

「よーし、祭りじや、祭りじやー。早速始めるぞい。」

ラルドが手を叩きながら言つた。周りの者もわー。と盛り上がつた。

「ちょ、ラルド様。祭りつて…」

族長なのに状況をまったく理解してないジストを無視し、ラルドはアメジの手を掴んだ。

「でつ。なにすんじやいつ、」のエロジジイがつつ。」

アメジの拳がラルドの顔にめり込んだ、がラルドはすぐに復活し、またアメジの手を掴むと一直線に駆け出した。

ぎやーーつ。と叫ぶアメジの姿が遠くなるのを、ジスト達はため息ながらに見送つた。

ラルドに連れられながらアメジはリスターの街を見た。やはり違和感をおぼえた。

ラルドが向かつた先は、水晶使い達の修行を行う場でもあり、大神官の居住地でもある、街の中央にある広場前の寺院であつた。

そこは、百年前とほぼ変わらず、屋根からはこのリスターで信仰されている太陽神と、その神の下僕とされる四の精霊が鮮やかに描かれたタンカが掛けられていた。

寺院からは香がただよつてくる。中はただっぴりい中央に太陽神のどでかい像が座つている。アメジにも見覚えのある場所だ。

ただ、あの人がない……。

「さわー、アメジ殿。中へ……」

「ねえ、トパーズ様はどこよ?」とアメジがキヨロキヨロと見回していた。

「おお、トパーズ殿といえば、アメジ殿の時代の大神官ですね。」

「……。ジイさん。のーみそ大丈夫か?」

「アメジ殿、もしやまだ混乱されどるのかな? ま、無理もないかのう、百年も眠つておつたらの。」

ふいーとため息まじりにラルドが同情した。アメジはまだ気づかない。

「あたし、何日寝てた? 一週間とか? その間にトパーズ様辞めちやつたとか……」

おそるおそるラルドに尋ねた。その問いにラルドは笑顔で答えた。

「アメジ殿、ナイスギャグじゃね。百年ですか。いやー、ワシより
ずっと年上ですわ。」

「…ほんと、大丈夫か、アンタ…」

「アメジ殿、まだ信じられませんかの。ほれ、後ろを！」覗なされ。」

ラルドはアメジの後ろの壁を指す。

そこには、歴代大神官の名が記されていた。一番端の新しい所に、
ラルドの名を確認できた。

じゃあ、このジジイが今の大神官？とアメジも信じざるをえなかつ
た。

そして、トバーズの名を探した。ラルドをずっととかのぼって、そ
の名を見つけた。

（え、どーゆーこと？ なんでこんな前にトバーズ様の名前が？
百年だ？ あたしまつたく老けとらんぞ、あたしが眠つている間な
にがあつたのよ？）

「理解できたかの？ ワシも大神官として、古代の書物やら解読し
ておつてのう。」

アメジ殿のことはこの書に載つておつてのう。」

とラルドが取り出した古びた本をアメジがバツ、と取つた。そこには、水晶の聖乙女のことが記されており、黒水晶からリスタルを救
つてくれる救世主となる、などと無責任なことが書かれていた。
せうにアメジが驚いたのは、その著者だつた。

「オルド…？」

アメジの父オルドの著。

理解不能だった。アメジが巫女になる前に死んだ父が、アメジが聖
乙女になることなどわかるはずもないのに…と。

「何だー、これ、これビーチーでいいやつー?」

「オルド殿はたしか、アメジ殿のお父上ですな。ちゃんと調べてありますぞ。」

そのオルド著の本にはたしかに、アメジの名が記されていた。
水晶の聖乙女になるということも。そして、尻がでかいといつぱい
でもいいことも書かれていた。

「ここはほんとに百年先のリストラル?」

からで、アメジが百年後に目覚め、黒水晶の脅威にさらされているこの時代の救世主となる、などと恐ろしげなことも書かれていた。

「うそだ。オヤジがあたしが聖乙女になるなんてわかるわけないじ
やん。オヤジの名を騙つただれかのいやがらせ?

ちょっと待て、フツーに百年もこのままでしょ? なんて無理でしょ? みんなしてあたしをからかい楽しんでる。

そういうアメジにラルドは彼女の尻を撫でながら答えた。

セウツヤフ、アメジ殿には特別な力がある。

このリストラを救う、
救世主なんじやよ。」

アメジにぶつ飛ばされながらも、ラルフは笑顔でしゃべっていた。
アメジは立ち尽くしながらも冷静に考えてみた。

これが水晶の聖乙女の力？百年の時をも越える、巨大な水晶でも身につけたというのか？

街の姿もあの頃となんだか違う。知った顔か一人としていない。族長も大神官も、モンドとトパーズでなく、ジストとラルド。このじいさんの言うことが真実ならつじつまがある。そこでアメジは気づいた。

「じゃー、ジストはモンドの……」

子孫、であることに。

「おおっ、アメジ殿は族長の先祖と顔見知りじゃつたのか。

「ああ、そうだ。あたしゃーあいつのせいで赤つ恥を——」

忘れかけてた怒りがふつふつとよみがえってきた。

段々と赤くなるアメジの顔もラルドの次の言葉で色がひいた。

「アメジ殿は最後の水晶の聖乙女じゃからの？」

「へ？ 最後？」

「おお。長年続いた聖乙女制度もアメジ殿で終わつとるんじや。ト
パーズ殿が廃止したらしいんじや。」

（トパーズ様が……なんで……？）

その真意は今のアメジにはわからなかつた。

「さて、そんな難しい話は後において、祭りじや、祭り。
アメジ殿を歓迎する祭りを行うんじやよ。」

難しい顔をしたアメジにドカーンとバカ明るくラルドが言つた。ア
メジが来るまでに、祭りの準備は整つていた。

族長がリスター族の長なら、大神官は、水晶使い巫女たちの頂点に
立ち、弟子たちの指導にあたるはもちろん、族長のサポートを務め
たり、水晶の研究や、祭りを仕切るのも重要な仕事である。水晶使
いの長なのだ。

特にこのラルドは、明るい性格も証明するとおり、大の祭り好きな
のだ。おまけにリスターの女好きでもあり、その地位を利用した

セクハラも数少ない。さらに尻フェチで、尻のでかいアメジはラルドにとって理想そのものであった。今後もこのジジイにアメジは振り回されることになりそうである。

「さて、祭りに行きますぞつ。アメジ殿歓迎の大祭りじゃー。」

「祭りつて…え、ちょっと、あたしは救世主なんか…。」

「面倒くさがりアメジ、とても嫌な予感がした…。」

「祭じやーーアメジ殿歓迎の大祭じやーー！」
ラルドの大きな声を合図に人々は集まり、日が落ちる頃には祭りの準備は整っていた。

街の中央に位置する寺院前の広場に、リスター中の人たちが集い、にぎやかな祭り独特の空気が漂っていた。

広場中央の祭りの時のみに設置する台を丸く囲むように、楽器を奏でる男達に、その内側で踊る娘達。その他観衆、樂器の音、人々の声、広場は祭りの音でいっぱいになつた。

祭りだ祭りだとはしゃぐラルドとは対照的に、アメジはがつくりとしていた。

（はあ、なんなんだ、このジジイは……それに救世主ってなんなによ？

はあ？……てかさ、マジでここは百年後なの？

聖乙女の儀式つて……あたしはただムカツキながら眠つていただけなのに。

わけわからんよ、でもたしかに、だれ一人知つたやつがいないし……信じるしかないのか？）

ハナーと深いため息をついて、アメジはめんどくわうな表情でラルドを見た。逆にラルドは満面の笑みで返してきた。

ラルドがアメジをテント下の席に着かせると、二人のもとにジストがやつてきた。

「ラルド様、なにもこんな時期に祭りなど行わなくても……」「なにを言つとるんじや族長。こんな時だからこそ祭りをやってみんなの気持ちを高めてやるんじやろうが。ほれ、アンタもさつさと

そこに座りなされ。」

そつぱつジストをアメジの横の席に着かせた。

「わあ、皆の衆アメジ殿のために祭りをおおこに盛り上げよつべ。わあわあ歌えや飲めや踊れや騒げや、ワハハハハ。」

ラルドの仮団とともにこれらに祭りは盛り上がつた。ラルドは大きな声で笑いながら酒を飲み始めた。

「おい、なにしとる！もつと美味しいものを持つてこんかーさあ、アメジ殿どんじんいつくだされ。」

うんざりしていたアメジも、田の前に差し出される数々の「」駆走を田にするととたんに嬉々とした顔になった。

「うひょー、いいの？おいしゃー。んじやあ、お皿葉にせえていただきます。」

単純アメジ、食事中は悩みなど無れの主義。乙女である」とをされ、飢えた野獸の」とくかつくひつ。

「おおお、こい食いつぶりですなー。れすがアメジ殿、

「こ尻をしどるだけあるわ。」

「ぶふおーーー尻は関係ないわつ」

（なんかわけわかんないけど、すっげ美味しいんですけど、こんな歓迎初めてなんですか？、もしかして族長の妻になれなくても楽できるかも？）

アメジの中に新たな道が見えた気がした。

アメジがメシにかつくらつていてる最中、演奏の曲調が変わり、踊り子達の舞いががらりと変わつた。

観衆の視線があるところに集中した。

「おおつ、始まりますぞ、あやつの舞いが。」

ラルドがそう言つて目線をやつた先にいたのは、神の下僕である精靈の面をつけた、他の踊り子とは違つた衣装を身に纏つた娘だつた。

「…サファ。ケガは大丈夫なのですか？」

その娘がサファだと気付いたジストは心配げにラルドに訊ねた。

「舞いに支障はなからひ、さあ始まりますぞアメジ殿。」

「ふえ？」

ラルドに言われてアメジは初めて広場中央の舞いの場に目をやつた。精靈に扮したサファは曲にあわせてゆつくりと、中央の舞いの台へと登つていつた。

巫女は女の水晶使いでもあり、踊り子の最重要踊り手でもある。

巫女であるサファだけが舞うことを許される精靈の舞いは、かすかに体内の水晶を放ちながら舞う特別な踊り。

その踊りの力は、舞いを見るものの気持ちをさらりと高ぶらせる」とができる。

サファの舞いによつて、広場中の人々の気持ちは一体となり、そこはさらに不思議な空氣につつまれていた。

その踊りを見ていて、アメジの中のある感情も高まつていた。

「ふむふむ、さすがはワシの孫じや。今となつてはあの舞いができるのはあやつだけじやからのひ……」

「ラルド様…」

遠い目をしたラルド、少ししてアメジにこう言つた。

「そうじやー！アメジ殿なら、すばらしい舞いが舞えるに違ひない！アメジ殿、ぜひひとつ舞つてはもらえんかの？」

「えつっ！？」

「ぜひとも頼みますわ、アメジ殿。あやつらにありがたい舞いを見せてやつてくれんかの？！」

「ちよつ・・・ちよつと待つてよ・・・な、なに言い出すんだよ？いきなり・・・」

アメジ焦る、焦るにはわけがある、

つまりアメジは
……。

「まあ、アメジ殿のありがたきまらん舞いを見せてやつてくださいんかのう。」

酒に酔つた赤らんだ顔のまま、ラルドは隣に座るアメジに頬み込む。「ちょ…ちょっと、いきなりなに…」

焦るアメジ。

「おい、聖乙女殿の舞が見られるらしいぞ。」

近くにいたれかがそう言つたのを合図に周りは盛り上がり始める。聖乙女のありがたい舞、だれもが見たい見たいと騒ぎ出した。それそーれと。

ヤバイ、たらりと汗が伝い、さらには焦るアメジ。

「さあさあ、アメジ殿、見せてください。演奏はアメジ殿に合わせますから。」

「あ・・・あの・・・ちょっと・・・今日は調子が・・・腹が・・・悪いにけど少し向ひで休んでくるわ・・・。じや。」

そう言つて、腹をさすりながらアメジは席を立つた。

「な、なんとアメジ殿食べすぎですかな? ややそれは大変じや、ワシが腹をさすつて・・・」

「じゃ、あたしあつちのほうで休んでくるわ、今田はありがとね、ラルドのじいさん。」

アメジはそそくせとその場を去つていった。慌ててアメジの後を追おうとするラルドは、醉いがまわつて席を立とうとすればふらついてしまつた。

「ラルド様、アメジ殿は私が・・・」

ふらつくラルドをジストは席に座らせると、アメジの後を追つた。

「おお、またんか族長、ワシがアメジ殿の尻をさす・・・つひいつく」

アメジが抜けた後も祭りは続き、人々は盛り上がりつづけていた。

「はあ・・・ヤバ・・・踊りなんて、やれるかつての。」

祭りの音から遠ざかつた広場を見下ろせる場の階段の上で、アメジはため息をついた。

「踊りなんて、ぜつて一やらねえ。」

アメジ、踊りを嫌がるにはわけがあつた。

巫女は女の水晶使いでありながら、祭りの大事な踊り手でもある職業。

水晶使いの能力と同様に踊りの能力も巫女には必要不可欠なのだ。

しかしアメジは、踊りがまつたく苦手だつた。

幼い頃、踊りの下手くそっぷりを周りに笑われていたことがトラウマとなり、それ以来、人前ではなにがなんでもぜつたいて踊らないと誓つたのであつた。

そんなアメジがなぜ巫女になれたかというと……、
親のコネというやつである。

父オルドと親交のあつた大神官トパーズは、オルド亡き後はアメジの親代わりと成り、アメジを巫女にしたのだ。

アメジを巫女として鍛えてやるつもりが、アメジのぐうたらっぷりは予想以上で、アメジはほとんど巫女の修行をしなかつたのだ。

当然踊りなど、一度も練習しなかつた。

ゆえにアメジは人前では踊らぬと固く誓つているのだった。

「はあ、でもあのジジイしつこそう、カンベンしてほしいよ。」

ふう、ともう一度深いため息をついた後、自分を呼ぶ声に気付いた。

「アメジ殿！」

階段を駆け上つて、ジストがアメジの前に現れた。

「…う・げ」

「お体は、大丈夫ですか？」

「あ、いや、まあ…でも踊りはきついかな？あはは。」

「すみません、みながムリを言って…・・・」

「ははは、いーつことよ。なんせ聖乙女ですから（ちよつと調子ぶつこいてる？あたし）」

アメジの様子を見て一安心したジストは、祭りの光に包まれている広場を見下ろした。

「いつ黒水晶が襲つてくるかわからない、いつ何時も気を抜いてはいけない状態なんです。

ラルド様の祭り好きも考え方なんですが……。

アメジ殿の歓迎は、黒水晶を倒した後でちゃんと行いたいと思つています。」

「へへへ、そう？ ま歓迎会は大歓迎だけどさ。」

ジストの目線は広場を見下ろした後は、空へと向かつていた。黒水晶を常に警戒していた。

「そういえば、祭りで巫女の舞いはひとりだけだったけど、他の人はどうしたわけ？」

祭りの様子をふと思いつ出して訊ねた。

「・・・巫女は、彼女サファひとりだけなんです。」

「へ？」

「他のものは、みな黒水晶に殺されました。

彼女の姉たちであつた巫女たちも、多くの水晶使いや聖獣も、黒水晶との戦いに敗れて、リスターの民のほとんどが黒水晶に家族を奪われ、深い傷を負つた。……早くやつを倒し、人々を守る。それが族長としての私の使命なんです。」

（黒水晶に、みんな殺された？・・・ずいぶん皆明るいから、そんなかんじ受けなかつたけど、黒水晶つてそんなやばいやつなの？）

「先日唯一の巫女のサファが負傷し、しばらく戦えないと思つていたところ、ラルド様から聖乙女殿のことを聞き、神殿に行つたんです。・・・そして、アメジ殿、あなたは現れた。」

現れたというよりか、正しくはジストによつて起こされたアメジ。

「お願いしますアメジ殿！私たちに力を貸してください。

リスターの人々の希望の光となつていただきたいのです！」

「うえつ？」

アメジに頭を垂れるジストにアメジは少しうまづいた。

それつてつまり、あたしにあの
バケモノと戦えつて言つてるわけ？

黒水晶……。

アメジが幼い頃、父オルドと遺跡を巡つていた頃、土壁に眠る化石
を田にしたことを思い出した。

「うわつ、オヤジ、コレすげーでけーバケモン！」

「ああ、黒水晶だな、こりやいつの時代かな……。しかしこいつも
でけーな。んまあ、俺がやつつけたやつはこの倍だつたけなあ？」
むき出しになつたその化石をさすりながらオルドは言つた。

「ええつ？マジでオヤジこんなバケモノ倒したのか？」

「ああ、マジよ。あのころの俺は、かつこよかつたぜえ。ま今は今
で輝いているがな。

アメジ、お前もめんべくさがつていねーで、
かつこいい生き様つての見せつけるかつこいい人間になるんだな。
俺を見習つて、な。

「は？なに言つてんだよ？バカオヤジのくせによ！」

「は、なにを言つかバカ娘。黒水晶ひとつも倒してねーガキに俺の
かつこいい生き様を否定する権利はないつてのよ。」

「なんだとーーームキー！」

父親とバカみたいな口喧嘩を繰り返しながら、遺跡の中を渡り歩い
ていたあの幼き日々、アメジは思い出し懐かしく、そして……

「くつそー、やつぱオヤジムカツク！」

「へ？」

「ハン、オヤジにやれてあたしにやれないわけないじゃんよー。黒水晶なんて三秒でやれるってのよ。」

アメジは握りこぶしを天へと突き出した。空の人となつた父オルドにむかつての挑戦状。

「本当にですか？アメジ殿！」

「へ？」

ジストの声で回想シーンからリアルへと引き戻されたアメジ。

「ねえ、もちろん黒水晶倒したら、ちゃんと歓迎会してくれるんでしょう？美味いものいっぱいくれるんでしょう？アメジ様万歳でしょ？祭つてくれるんでしょう？アメジ伝説轟くんでしょう？」

「え、ええ…、もちろんですよ。」

興奮気味のアメジに少し引くジスト。

（そつかー、なにも族長の妻にこだわることなかつたんじゃない？
楽して生きる道、見つけた！かも）

アメジの返事に喜び、早速ラルグのもとへ報告に向かおうとするジストをアメジは呼び止めた。

「ねえ、ジスト、あんたさ、年はいくつなの？」

階段を七段ほど下ったさきでジストが振り向いた。

「え？… 22になりますが…」

「年上じやん！ あのさ、そのアメジ殿つていつの止めてくんない？あと敬語も。」

あたしかたつくるしこの苦手なんだよね。」

少ししてからジストが答えた。

「そう、ですか・・・なら遠慮なく。

アメジ、ありがとうよろしく頼む。」

「おう、こっちこそよろしくな、ジスト。」

アメジの中で高まっていた感情・・・それは：

救世主になれば、みんなにちやほやされて、楽できんじやん。うふ

ふ。

しかし、アメジ気付いていなかった。その矛盾に・・・。

祭りから一夜明け、アメジはラルドに呼び出され、寺院に向かった。

「ほれいアメジ殿、ふれぜんとふおーゆーくじや。」

「はひ?」

そう言ってアメジに差し出されたのは、

手のひらに収まるサイズの、ドクロ水晶だつた。

「ドクロ・・・水晶じやん、なに? なんで?」

「族長に聞いたところ、じつやうアメジ殿はドクロ水晶を持つてないそうじやの。」

それを聞いてワシが徹夜で(マシハで) 作ったんじやよ。」

「・・・・・あ。」

アメジ、昨夜のことを思い出した。たしかにジストに置いた。黒水晶と戯つと。

「これがないことには戦えんじや。でアメジ殿のために急いでこしらえたのじや。」

愛情をたっぷりと詰め込んで、な?」

「ははは、ありがと。(愛情はいらんけどな)」

苦笑いしながら、ラルドから(愛情たっぷりの) ドクロ水晶を受け取つた。

「さあ、書は急げといこますや、まこひつかアメジ殿。」

「へ?・・・はい?・・・・・」

わけもわからず、アメジはラルドに連れて行かれた。

街を出て、少し登り、山岳神殿に向かう途中の広い場に出た。

そこからはリスターの街が見渡せ、アメジのいた水晶神殿へと続く道が分かれている。

そこにはすでにジストとタルがいた。

山脈の向こうを見据えていたジストはラルドとアメジの到着に気付くとそのほうへ振り返った。

「族長、様子はどうじゅじや？」

「ラルド様。・・・まだですが、そろそろ、来ると思います。」

「そうたる。この時間はあいつのお昼ご飯の時間たる。」

シリアスな表情の彼らとは反対にアメジは？な表情のまま、状況を理解できずにいた。

「そういうことじや。アメジ殿・・・準備はよろしくかの？」

「へ？」

わけのわからないアメジ、もドクロ水晶へと皿をやつたラルドを見て、なんとなく事を理解した。

「・・・え、ちょ・・・まさか・・・もう？」

汗たらたらアメジ、アメジの不安などわからず「へりと頷く二人と一匹。

まさか、昨日返事で今日かよ？！

いきなり、あのバケモンとヤルつていつの？！

来た！とジストの声で、みな山脈のほうへと目をやった。

アメジたちを覆いつくす黒い影は、あの日、アメジの前に現れた、あの黒水晶だつた。

ドス黒い目でアメジたちを確認すると、ギャアアアアーーーとガラスを爪でこするような声をあげた。

「ぶつひやー、でたよ、やつぱでけーな、おい。」

アメジまばたきも忘れ、黒水晶を見て固まる。

「よし、いくぞタル。」

「おつけーたるよ！」

ジストとタル、慣れているのか、冷静に黒水晶を見て、構える。

「まかせましたぞ、アメジ殿！…」

「はい？」

気付けばラルドは、アメジたちのはるか後方の山陰ひと身を潜めていた。

（おー、なにひとりだけ安全地帯にいるんだよ？…）

「アメジ！道しるべを！」

「へ？はい？なんですか？道しるべって…？」「

アメジ、ジストの言つていることが理解不能だつた。それに対する反応したのがタル。

「やつぱりこいつボケボケたるよ！ジスト！」

う、う、なんだ？

?な表情のアメジ、ラルドの田線のドクロ水晶に気付く。

そうか、これ、ね。

「ラルド！」田で合図を送ると、ラルドは「へへ」と頷いた。

「これのことか…しかし…ビツやつて使つんだ？これ

…みんなの期待の田線にアメジ汗出る…。

ヤバイ、決めないと、かつこいい生き様を…オヤジじゃないけど（恥）

ごくり、アメジ決意。

左手に握り締めたドクロ水晶を天へと掲げた。

と叫んだ。

「はい？」

がうーーん・・・という切ない効果音とともにジスト、ラルド、タルの切ない声がした。

その反応に、アメシまたしても汗

「あれ・・・? なんむけむけうねえ・・・」

「あーつ、やつぱ・・・ダメダメたる。」

はあ、とタルおもいつきりあきれてジストを見た。

しまつたのかのう?」「

??な表情ながらも、アメジにいまだ期待の表情を送つてくるラルドに、申し訳なさそうにアメジは

「いや、ていうかあたし・・・・初心者・・・・なんんですけど。」

がくーんとするジストとラルディに、じつほんとにダメたる。と殺意さえ露わにするタル。

「アメジ殿……アメジですか……の？」

アメジは初心者だった・・・。
ろくに巫女としての修行をつんでおりず、当然どこつか、ドクロ水
晶の使い方もわからなかつたのだ。

「あーもーつかえねーたるつゝ、お前やつぱーせモンたるよー。」

ブチキレで背中の毛がぶわつと逆立つタル。

まさか、という表情のジスト。

すまんすまんとアメジ・・・。

ちーん・・・・さみしい空氣の流れる中、こちらの都合などおかま
いなしに、空中の黒水晶は大きな口を開けたまま、アメジたちへと
迫つて來た。

「アメジ殿！危ないですぞ！」

「うひつ！」

反射的に左方向へと飛び込んで、黒水晶の攻撃をかわしたアメジ。
アメジたちを横切つた後、また空へと高く舞い上がる黒水晶。
やつがこちらへと向き変える間にとラルドが叫んだ。

「むむむ、しかたないのう。

アメジ殿、ワシが使い方を教えますから、その通りにやつてみて
くだされ。」

岩陰から顔をのぞかせながら、ラルドが言つた。

「えつええ・・・・わつわかつた・・・・（ぶつつけ本番かよ？）
すう、と息を吸つて、心を落ち着かせるアメジ。

ええい、やるっきややねーな、やつてやうーじゅん
樂できる人生のために！……

「よしひ、いいよラルじい！」

きりつとラルドに答えるアメジ。

「では、アメジ殿、ドクロ水晶を片手に構えてくだされ。」

「おおつ、こう？」

アメジは右手にドクロ水晶を持った。

「で体内の水晶をそのドクロへと集めるのじや。

大事なのはイメージですぞ。水晶の流れをイメージですわ。水晶をそのドクロへと集めてみなされ。」

「ドクロに水晶を集める？？」

とりあえず目を閉じて、イメージしてみる。

気持ちを右手のドクロにと、力をこめて、集まれと集中してみる。

「むむむむ。」

そんなアメジの様子をあきれながら見てるタル。

「いきなりできるわけないたる。・・・・あいつに期待するだけ損たるよ。」

「タル、いいから準備するぞ。」

ジストはアメジの道しるべが来る」とを信じ、右手に水晶を集め始める。

そしてタルも戦いへと集中を始める。

「タルはジストについていくだけたる。」

集中力。ここぞという時の集中力はアメジはかなりのものだった。ドクロ水晶が輝き始めた。ソレを見て一番驚いたのが本人。

「おおつ、光つていいよドクロ！」

「アメジ殿、そのままを保つんじや、それでもう片方の手で、
ドクロ水晶を触れてみなされ。」

「いじ？」

アメジは左手人差し指をドクロのおでこにあたる場所にしみと触
れてみた。

「ドクロから指を離して、線を描くように水晶の光の線を描くのじ
や。」

ゆつぐりと左手の人差し指をドクロから離すと、
ドクロより流れる光の線が、アメジの左手人差し指にて描かれてい
く。

「わわ、すげー、描けたよ。」

喜ぶアメジ、するとふつと線が途切れ、ドクロの輝きも消えた。

「あれ？」

「アメジ殿、常に集中、水晶を放出し続けるんじやよ、わつ一度。」

「おおつおつけー。」

再び、集中、アメジ、水晶の流れをイメージするのは得意なのが、

それともこれが聖乙女の力なのだろうか。

コツをつかんだアメジはノリノリで光の線を描き出した。

「よし、いいぞ。」

「ふん、それくらい巫女なりできて当たり前だるよ。」

「で、で、どーすんの？」

「アメジ殿、線が途切れぬよう、常に水晶を出し続けることを忘れ
んよ、んじ、」

で、その線が聖獸の大事な道しるべじやからの、

黒水晶へと向かう光の道を描くのじや。

やつは直線の動きには敏感じやから、できるだけ曲線を描くのじや、

螺旋を描くよう」の。」

よしつ、とアメジは答えて、光の線を空に描きながら、走った。

ジストとタルの周囲を走りながら、光の線を描いていく。

「なかなか力強い水晶の道じや、さすがアメジ殿。」

ギヤアアーテー、アメジたちへと向き直つた黒水晶の次の攻撃が来る。

「アメジ殿、その光を黒水晶へ向かうようイメージじや。ボールをやつ田掛けて投げるようイメージするとよ」と思っていますが。」

「おっしゃー、いっけーい。」

左手から、ボールを投げるようなフォームで、光の線を黒水晶へと放つた。

アメジの指より放たれた光の線は、空中で羽ばたく黒水晶へと向かつた。

それと同時に、ジストの手より放たれた水晶を受けたタルは、輝く光の兵器となり、

アメジの描いた線の上を駆けるように、凄まじいスピードで黒水晶へと向かつた。

確実に黒水晶の死角から攻め込むことができた。

光の兵器と化したタルの体当たりによつて悲鳴を上げる黒水晶。タルが黒水晶へと到達したと同時に、アメジが描いた光の線は消滅した。

黒水晶へと一撃を与えたタルはジストのもとへと戻つてきた。ジストは再びタルに水晶を放ち、アメジの道しるべを待つ。

「アメジ殿、また同じ繰り返しですぞ。」

「よし、なんかコツつかんだかも、任せて！」

調子こいてはりきるアメジ、再びドクロより光る水晶の線を描いていく。

大地を蹴りながら、駆ける、跳ぶ、大きく曲線を描きながら、ジストたちの周囲を、土壁を駆け上がり、空高く舞いながら、弧を描いていく。

力強く大地を蹴るアメジの足によつて砂煙が舞い上がつた。

さあ、いっけーい。と指先の水晶を、光の線を、黒水晶へと再び放つた。

同時に光の道を翔る光の生物、アメジ、ジストとタルの連携の繰り返し、

何度も黒水晶に打撃を与え、そのたびに黒水晶は悲鳴にも似たあの

耳に障る声をあげた。

「それにしてもあんな戦い方する巫女初めて見たたるよ。サファとは全然違うたる。」

「ああ、なんて力強い舞なんだ。・・・しかし、水晶の量の調整が気になるな。

あれでは体が持たないんじゃ・・・。」

何度か打撃を与えたが、それでも巨大なバケモノは特に外傷もなく、戦いは長期戦になるかと思われたが、またしても黒水晶はなにかに呼ばれたかのように、ギャアアアーーと鳴くと、山脈の向こうへと飛んで行つた。

黒い影が去つたと同時に、アメジは急ブレーキがかかつたように止まり、その場へと倒れこんだ。

「アメジ殿、大丈夫ですか？！」

安全とわかるとすぐラルドはアメジの元へと駆けてきた。

「▽？・・・」

「おお、もちのろんじやよアメジ殿、▽ですじや。」

やつりー、よつしゃーと叫びたいアメジだったが、立ち上がることができなかつた。

「あ、あれ？なんか体変なんですけど・・・？」

体力には自信のあつたアメジなのだが・・・。

「アメジ殿、水晶の量をコントロールする力が、いまいちのようですか？短期決着方の戦い方でしたぞ？」

「はひ・・・？」

アメジ、ろくに巫女の、水晶使いとしての修行をつんでおらず、当

然の結果かもしれないが、
とりあえず、ぶつけ本番であったアメジの初バトルはなんとか成
功に終わった。

「おお、アメジ殿、なかなかよくなつてきましたぞ。」

「うん、なんかわかつてきたかも、やっぱ、やっぱ天才？あたし」

「いやいやまさにそうですわ、アメジ殿は生まれ持つての強い水晶

の持ち主のようですから。やはり救世主なんじや。」

ラルドはひたすらアメジを褒めまくる。そのたびにアメジはいやー、
当然でしょ。とうれしげに鼻高々。

あの戦いの後、アメジはジストの勧めもあつて、ラルドの元で水晶
コントロールの修行を受けていた。

寺院の中で親切丁寧に教えを受けるアメジ、たまにラルドにケツを
さすられ、そのたびにラルドに飛ぶ鉄拳、
そしてまた修行、を繰り返していた。

「ジジイ、ヨイショしそぎたる。あいつはおだてられるとますます
調子に乗るタイプたるよ。」

「たつた数日であれだけの上達・・・頼もしいな。アメジがいれば、
あの黒水晶も近いうちにきつと倒せる。」

こつそりと様子見にきていたジストとタル。アメジの様子に期待の
表情を見せるジストと対照的に不安げなタル。

「まあ、どんなアホでも強ければ文句ないとたるけど、ジストとタル
の足をひっぱらなければ。」

そう言つてアメジに意味深なウインクをして寺院をあとにした。

その日、ラルドのもとで修行を終えたアメジ。

寺院から出ると空にはもう星空が広がっていた。

寺院を振り返り、アメジの中にふと思い出された顔、それは……。

「トパーズ様……。」

本当ならアメジの師はトパーズであつた。しかし、アメジはろくに修行を行わず、トパーズの言うことを聞かず、いつもモンドと遊んでばかりいた……100年前……。

だが、アメジの記憶の中ではついさっきまでの記憶だつた。

「はは、変なカンジだな。本当ならあたしはトパーズ様に教わるはずだつたのに……。」

ま、ラルじいには感謝だけね。

エロいのは問題だが……。」

ふう、と息をついて空へと目をやつたあと、ふと街中にむけた目に飛び込んできたのは、

夜風になびく白い髪、月夜に照らされたその後姿の人にアメジの目にはあの人があつた。

「トパーズ様?!」

アメジはその人を追つた。

ここは百年先の世界

アメジの知る人は誰一人いないし、いるはずがない

でもまさか、もしかしたら、という思い

もしかしたら幻を見たのかも？

それでも・・・

かすかな望みがアメジを走らせた。

階段を駆け上がり、リスターの街の一番高い場所まで出た。

その影は、街の外へと消えた。

アメジもあとを追つて、外へでた。

真つ暗な山道を登り、最近黒水晶と戦った広い場へと出た。
そこからさらに、アメジのいた水晶神殿へとむかう道の途中、
アメジの耳に入ってきたのは、楽器の音……。

「笛？」

そしてその笛の音に乗せて流れてきた唄い声。
その音の方向へと歩みを進めるアメジ。
そしてアメジの向かう先にいたのは……

笛を吹く白い髪の男と、その傍らで笛に合わせて歌っているタルよ
りも一回り小柄な聖獣だった。

男はトパーズではなく、アメジと年の近そうな若い男だった。

アメジに気付いた聖獣は唄を止め、大きく丸く揺れる瞳で、じっと

アメジを見た。

歌がやんで一秒後、男は演奏を止め、アメジのほうへと向いた。

「だれだ？お前。」

こちらが問い合わせるより先に問い合わせられたアメジ。

月明かりと同じ光を放つ瞳に睨まれ、お前こそだれだよーーとつづこむ事を忘れたまま、しばし立ち尽くしていたのだった。

「ふひー、もうお腹いっぱいなんだけどー。

もう、みんなさあ、アメジ様万歳アメジ様万歳つていいすぎー。
ああ、きらめき憧れのアメジごて・・・・・んじーおつ

「いつまでだらだら寝てるたるか?! ぐうたらアメジー!」

激しいタックルを受け、ベッドから転がり落ちるアメジ。
いつてー、とむくりと起きるアメジにどすんとタルがのつかかった。
「おもっ、ブタ聖獣が、ここに・・・」

「うわー、あ、行くたるよー。」

午前七時に起こされたアメジは、今日もタル、ジストとともに街の外から黒水晶の警戒にあたる。

アメジは住む場所をラルドより与えられていた。寺院すぐ側の一階建ての小さな家で、アメジ的に少し不満だったが……。
そのうち超豪華なアメジ御殿を建ててもうひとつこいつ野望でいっぱいなアメジはとりあえず我慢していた。

樂できる人生のためなら、なんだって我慢できるし、やつてやるわ。
とわけわからんことを思いながらだ。

前回と同じ場所で黒水晶を撃退、今回も同じように喧嘩を引き上げていった黒水晶。

「今日も逃げられちまつたね。ああ、くそ、あと一息つてかんじなのさ。」

アメジもあの戦いからずいぶんとバトル慣れしていた。

ラルドの特訓の成果もあるが、実戦で伸びるタイプであるようだ。

「けどダメージは蓄積されてるはずたる。次こそはいけると思ったるよ。」

「そうだな、それに最近被害が出ていない。」

「そういえばそうたるね。とタルが頷いた。

最近は、黒水晶による死傷者がまったく出ていなかつた。いつもこの場で撃退できていたのだ。

「それってあたしのおかげだつたりしてね。」

「違うたる！タルとジストのコンビネーションたるよーお前はすぐ調子に乗るたるー。」

こないだまでドクロ水晶の使い方もわからなかつたくせに。」

タルはアメジにつつかかるが、タルはアメジの水晶に戦いの中で絶対の安心感を感じるようになつていて。ジストの水晶をうけ光の兵器となつた状態の自分を導いてくれる力強い水晶に、その身をまかせられた。戦いの中で、アメジとタルは信頼関係を築いていた。ジストも、族長として常にみなを引っ張ってきた立場であったが、戦いのとき、気づけばアメジに引っ張られている瞬間があることに気づいた。

そして頼れる背中というのを数年ぶりに意識した。・・・・自分を引っ張つてくれた力強いあの遠き背中を、それは戦いの中に安心感を与えてくれた。

アメジの戦闘での集中力は自分を超えているのではとも感じた。

その分、普段はそーとー一氣が抜けているのだが・・・。

山道を下り、街へと入った三人をサファアが向かえてくれた。

「お疲れ様でした。」

「サファ、出迎えありがとうございます。」

「ええ、私も次からは一緒に戦いますわ。もつケガも癒えたし」
そう言ってサファはジストに元気そうにアピールした。

「さうか、それはよかったです。じゃ、私はこれから会議に向かうから。
・・・

「じゃ、タルはさきに帰つてまつてゐたるね。」

と街についてすぐ解散となつた。

「あ、アメジさん、おじい様から、今日の修行はお休みだそうですよ。」

「へ、そうなの（よつしゃ、帰つたらだらだらだらけられるぜ）」
ジストの背中を見送つたあと、心配げな表情でサファはアメジに訊ねた。

「あの、アメジさん・・・ジスト様の様子どうでしたか？」

「へ？ なにが？」
「疲れていた、とか、ムリしていたかんじとか・・・なかつたですか？」

「へ・・・、別に元気だったけど・・・。」

「そう・・・。」

アメジの返事を聞いても不安な表情のままのサファ。

「なに？ あいつ、どうかしたの？」

「ええ、その、ジスト様すごく族長としての責任感の強い方だから、みんなのためにつていつもムリしたり、なんでも一人で背負い込んでりつてどこがあるから・・・。連續で黒水晶と戦つたり、おじい様のワガママ聞いたり、族長の仕事だつて毎日あるのに、疲れていないほうがどうかしてゐるわ。」

ジストはみんなのためなら、自分の気持ちなど後回しにしてしまつ。

そんな性格だから余計心配なのだと。

「ああ、たしかに、あいつのだらけてゐところなんて一度も見たことがないしね。」

・・・そのうち過労死するんじゃないの？がんばりすぎてなんて・・

「そ
ん
な
」

「あつ、冗談だつてば（汗）いや、あいつ丈夫だし、水晶も強いし、心配することないって。」

ればと思つんですが……」「

「なんで? あいつの他に戦えるやつっていらないの?」

もう亡くなられてしまつて・・・あとは戦えない体になつてしまつたり……。

システム並の水晶使いは、いなくなってしまったんですね。

だから、今まともに戦えるのがジスト様だけで。

システィナの前に立つ

「じゃあ、結局はシスト一人に頑張ってもどうしかなしないじゃん？」
そうアメジに言われてがくーんと俯いて考え込むサファ。

5

早く帰つて『じろじ』のしようと思つて家路に帰るひとすのアメジを、
なにか思い出したサファが呼び止めた。

「心当たりが、ひとつあります。」

帰ろうとしたアメジをサファは駆け寄つて止めた。

「あの、アメジさんにお願いがあるんですが・・・」「はひ?」

「はひ？」

「その人のところにお願いにいってくれませんか？」

（ちょっと、なんであたしが……？）

「お願ひします、アメジさん…」
ジーするー・・・らいらいー・・そんな瞳でアメジに頼み込むサփ
ア。

ラルドに世話をになってくる身のアメジ・・・しぶしぶ引き受け
ことになつたのだった。

サファからジストの代わりに戦える水晶使いを連れてきて欲しいと頼まれたアメジ。

「で、だれなの？その人は。」

「え、あの、実はジスト様の弟である人なんですが・・・」

「へ？ジストの弟？いたことも知らなかつたんだけど。」

「ええ、というのも、その、私ももう十年以上お見かけしてないと
いうか・・・。」

幼い頃、お父様である前族長から水晶使いとして育てられていたはずなんですが、

今はどういう状況なのか、私も、知っている人もほとんどないと
いうか・・・。」

「へ？なにそれ、ジストの弟なんじょ？」

「ええ、そうなんですけど・・・その、

もう十年以上も家に引きこもつて・・・よくわからな
いんです。」

は？・・・十年以上引きこもつて居るジストの弟？なんなんだよ？
そりや・・・。

「ものすごく気難しい人らしくて、だれが訪ねても絶対に会わないと
らしいんですよ、でもきっとアメジさんなら・・・」

「なんであたしなら？」

「水晶の聖乙女・・・ですし、はい、きっと会つてもうりえるんじや
ないかと。」

なんだよ、その理由はわけわかんねー。

「んー、とりあえず行つてみるけど、ダメだったら諦めてよね。」「ほんとうですか？！お願いします。」

めんどくさいのは嫌いだったが、これも来るべきアメジ祭に備えてアメジ信者を増やしておくるのも悪くない、アメジの脳内では黒水晶を倒した後に行われるであるつ祭、アメジ感謝祭を妄想していた。

サファに聞いたとおり、そのジストの弟が住むといわれている場所へと向かう。

中央広場からずつと上、ひたすら階段を登り、街の外に出る一歩手前、左手方向に向かい、住居が立ち並ぶ路地を抜け、行き止まりかと思えた場所からさらに続く細い道、人気のない、なんだか昼間なのに日のほとんど通らない寂しげな場所、その奥に一件だけ立つ古くて寂しげな家屋があつた。

「……か……てマジで人住んでいるのか？」

疑い眼ながらもアメジは戸を叩いた。

「ごめんくさい、みんなの人気者聖乙女のアメジさんですけどー・・・いらっしゃるかしら？」

2、3度戸を叩いたアメジ、しかし、まったく反応がなかつた。

やつぱ、いないのか……諦めて帰ろうかと思つたアメジは、曇つた窓の奥に、動く影を見つけた。

「いるんじゃん？くそ、アメジ様に居留守がつゝくとは……あれ？・・・開いた。」

カギをかけ忘れていたのだろうか、それともカギが壊れていたのだろうか、戸が開いた。

そのままアメジは進入した。

「お邪魔しま・・・おつ。」

入つてすぐアメジが田にしたのは大きな本棚に、ずらーと揃つたたくさんの書物、部屋中にもたくさんの書物が転がつていた。目に映るは本ばかりであったが、古びたテープルの上には小さな袋に入れられたクッキーらしきものが置いてあった。

「ん? これクッキー? ・・・くんくん。」

手にとつて食べられそうなのかと匂いをかいでみた。

「そ、それ・・・マリンのどちら・・・」

「ん?」

アメジの足元から、なにか声がした。

アメジが視線を落とすと、そこには小さな聖獣が、体をふるふると震わせながら、アメジを見ていた。

「はうはう、なに?」のきやわゆい子ははつつく

アメジの田にとつてもふりて「に映つたその聖獣を触りつと、アメジはしゃがみこんだ。

「ん・・・ちみ・・・そういえば・・・」

アメジ、思い出した。アメジはこの以前会つてことがあるよつな気がした。

そうこえは、神殿に向かう途中の道で会つた、月夜の下で寝ついたあの子だ。

「みゅ? ! ・・・あのときの・・・」

そのこもアメジを思い出したらしく、たひこまん丸な瞳をしてアメジを見た。

ああ、なんてかわいいの? ! でも、なんでこのじがこのこるわけ? ・・・あれ? ・・・まさか・・・

まさか・・・アメジがそう思つたとき、

「だれだ？！勝手に人の家に上がりつてなにしているつ？！」

激しく隣の部屋のドアが開いたと同時に、アメジは怒鳴られた。

「あのねー、あたしは何度も呼びかけた・・・・て・・・・あ」

アメジ、その相手と目が合つて気がついた。

「あーお前、あの時の」

相手も気がついた。

あの夜の、アメジがトパーズかもと勘違いした、白い髪の笛吹き男だった。

あの日は月明かりの中だけで、はつきりとはみえなかつたが、この男の姿、他のリストルの男とは違つていた。

アメジとほぼ同じ年頃に見えながら、老人のよつに真つ白な髪。血管が透けて見えそつなほどの白い肌。瞳の色素もとても薄く、黒い瞳、茶色い瞳が当たり前なリストル族には見られない、金色の瞳をしていた。もう片方の目（左目）はさらに色素が薄く見えたが、気にしているのが長く伸ばした髪の毛で隠していた。

健康的なジストの弟とは思えないほど、華奢な男だった。

こいつがジストの弟？・・・というか水晶使い？？

激しく疑いの眼を向けるアメジを、男はクッ、と睨んだ。

不法侵入者め。と敵意を露わにしてくる男を無視して、アメジは小さな聖獣へと向き直つた。

「このクッキー君のなの？好きなの？クッキー」

「みゅ。」

かわいいーーー♪と変態くさい顔で聖獣をなでなでするアメジにさらに男がキレる。

「……お、マロンに触るな……」

「くえ～マロンちゃんつていつのか～♪」

「くつ、なんだこの女。」

明らかにアメジに不快な表情のままの男、それを不安げな顔で見上げる小さな聖獣。

「やつやつ、頼まれ」とだ。アンタがジストの弟？」

「は？ それがどうした？」

「水晶使いなら、一緒に黒水晶と戦つてほしいんだけど。

今ならこの聖乙女」とアメジ様と一緒に戦えるといつありがたいキンペーン中だけど、どうよ？」

イラついた男に対して挑戦的に言つアメジ。

聖乙女……と眉間にしわよせる男、みゅーとなにかを感じ取った表情を見せる小さな聖獣。

しばらくの沈黙が続いた後、男から放たれた言葉は……。

「つるやーでていけ！ クソ女……」

「やせん！」

バン！

アメジ、追い出されてしまった。

「なんだ、あいつは、ムカツクなープリプリ！
くそー、しかもケツ蹴りがつたよ、あんぐくしょー…いたた。」
アメジ、階段を下った踊り場でケツを擦つた。
しかし、ケツデカが幸いか、実は言ひませう痛くはなかつたのだ。

あの無礼男がジストの弟…同じ兄弟でここまで違つのかと呆
れながら

「あいつ将来は絶対に頑固ジジイになるね、なりまくるね。
まったく、それに比べてあのきやわいこけゅ わんわ…
ほんわわわ…アメジ、あの小さな聖獣マリンのかわいを思
い出し、変態くせにんまりとしていた。そしてケツを擦る。

「まつて…ぐだちやい…ちえいおとめ…ちけま…」

アメジのケツを擦る手が止まつた。アメジの背後から聞こえたの
声は…

「あつ、ちみは」

アメジの側まで一生懸命走つてくる、息を切らせながら、アメジを
呼び止めたのは、
さつき出会つたマリンだった。

「マリンちゅ わんvv」

でへでへとアメジはしゃがみこんだ。

変態顔のアメジとは対照的にマジメな顔のままマリンが言つたのは

「あによ…おねがいがあるでちゅ。」

「なあに？なんだい？遠慮なしに言つていいだよ。」

「マリンもくろつこちゅうとたたかうでけゅー」

「え？はい？」

「マリンも黒水晶と戦つ…ですって？！」

「え、ちが、アコンがやんへ。おやが、

あいつに、お前が代わりに戦つて来いくついくつ・・・とかつて命

今これがたの

おのれ あの界 どこまでも廢してやかる

「10' リモコンモード」(無)

「>?

ちつちつ いながらも必死に訴えるマリンにアメジは少し驚いた。

「みんなアケアチャ君の」とかしゃでんてたま、マリンかしゃめられてるときたちゅけでくれたんでもちゅ。あと、いぢゅもやひゅちいですか。これもマリンのためにひゅくつてくれたでひゅ。」

そうでちゅ。とマリンがこくこくと頷いた。マリンの首にかけられていた小さなドクロを模ったストーンアクセサリだった。どうやら

「アカアカが嫌な顔をした。」

ପାତାଲଭାବ ।

だからマリンはぐるりとあやうたおちで、アケアチャマたちぬけた

さよならが叶ひぬまゝ、別れの日、おまかせす。

真ん丸い田をうるうるせながらも、アメジに必死に訴えるマリン

卷之三

こんなマリソちゃんにここまで言わせるあのアクアって男何者なの

۱۰۷

こんな小さな体で、あいつのためにあんなバケモノと戦いたいと言つたマリンちゃんの気持ち、ムダにしたくない。

「マコンちゃん、ありがとう、なんていに子なの? うれしいわ。」

「うつまつてアメジ、マコンをひしつと抱きしめた、直後、

「ああ、マリン! 早くやいつから離れるたるよ。」

アメジのケツにまたしても蹴りがつ! !

「どわづちやー。」

すつころびアメジ、デカイケツがますますでかくなつてしまつ。

「ちょつ、なにすんのよ? ! タル! 」

アメジが振り返ると、ふんぞり返つたタルがいた。

「あ、おねーたん。」

え? おねーちゃん? ? ?

「マリン、こいつに近づくとアホがうつるたるよ。」

「えええつ? ? ? おねーちゃんつて? ? タルがマコンをけんかの妹ちゃん? ? ?

ビビリくつアメジ、ふたりをきみわざわざと覗氏べる。

そうたる。そりでちゅ。

アメジ、まだ混乱中。

「つそだ、こんなふりきゅーなマリンちゃんとモチ顔タルが姉妹なんて、どー考えたつてありえなー? ? ? ? 」

「お前やつぱり失礼たるつ! 」

ぶりぶりするタルだが、いつものことなのでしかたなことアメジを無視して、マリンへと向き直つた。

「マリン、最近どこに行つているたるか? タルが出かけている間はおうちでおとなしく待つていろつて言つたたるよ。」

「みゅ。」

「ウワサではお前があの変なやつのといひに田入りしてこるつて聞いたたるけど、

絶対に行つちやだめたるよ。」

「アクアちゃんまへんなやひじやないでひま? ? ?

アクアちゃんのわるくちゅうおねーたんなんかわらいであります……「泣きながらタルのもとを走り去るマリン。」「ひー、マリン待つたるー！」タルが呼んでも振り返らず去つていった。

「……いつたい、そのアクアってどんな奴なのよ、マリンちゃんのあの反応ただごとじやないでしょ？」

「タルもよく知らないけど、ろくなウワサ聞かないたる。リストルのため命はつているジストとは大違いたるよ。」

どうやら、そのアクアという男、みながらあまりよく思われていないらしい。しかし、マリンだけはある態度、なにがあるのだろうか。

「あー、アメジ、お前もしマリンがあの男に会いにこいつとしていたら止めてやつてほしいたるよ。マリンはタルのたつたひとりの妹たる、なにかあつたら困るたるよ。」

タルはタルでマリンのことを想つてゐるのだった。

どうやら周りからよく思われていい、族長ジストの弟、十年以上引きこもつてゐる、マリンだけは優しいといふ……。

なにかありそうなその男アクア、アメジはなんだか気になつた。

その夜、水晶神殿へと続く山道に向かう影があつた。

ひとつは男の影と、もうひとつは小さな聖獣の影、

アクアとマリンだった。

どうやら彼らにとつて、夜の散歩は習慣であったようだ、いつものルートを進む。

いつもと同じ、静かな夜の時間……のはずだったが、それを遮るものが現れた。

「かわいいあのこと～ラブラブラン♪ト～ブー～～」

「なんだ？この耳障りな唄は？！」

「あ～！」

アクアが睨みつけた先にいた影は・・・

「アメジちゃま！」

「マリンちゅわ～んvv」

マリンに向かつてアメジ投げキッス。

「なんでお前がここに？！」

またしてもアメジに敵意ギンギンに睨むアクアに、またしてもフフンと挑戦的に睨み返すアメジ。

その二人の間でキヨロキヨロとするマリン。

「アンタから我が愛しのマリンたんを奪いに来たのよ。」

「はあ？！」

「みゅ？」

月が見守る中、アメジvsアクアという奇妙な戦いが始まったのだった。

「ああ、マコーンちゃんを渡してもいいわよ。」

「フン、ふざけるな！お前なんかにマコーンは渡さないにアメジを睨みつけるアクア。

「なに？ そんなムキになるなんて……。」

「マリンちゃんはアンタのなんなのさ？え？」

「う、マコーンは……。」

アメジの間にかけに口^レもるアクア、そんなアクアを真っ直ぐな眼

で見つめるマリン。

「マコーンは……マコーンは……俺の……

瞬間、アクアのアメジへの口^レ撃が止んだ。

アメジはアクアの気持ちを確かめるように、口^レ撃を続けた。

「ふつまさか、たつたひとりのお友達なんて言つんじや……。」

「なつ、ちがつ」

「マリンちゃんは聖獣なのよ、水晶使ないと共に戦うのが使命なんじやない？」

「なんだと？！勝手なことを言つた！あんなバケモノとマリンが戦えるわけない！」

「マリンちゃんはちゃんとわかつてんのよ。そしてあたしに言つたのよ、黒水晶と戦いたいってね。」

「なんだと？マリンがそんなこと言つわけないだろ？臆病なマリンがあんなバケモノと戦いたいなどと……。」

「ほんとうにひひひゅ。」

マリンの答えにアクアは驚いた。

「あいつに脅されているのか？」

「マリンの答えが真実だと思えないアクア。

「ちがうでちゅ。マリンがきめたでちゅ。

マリンくろついちゅうたおちゅでちゅ。ちよちよアクトアちやまにおかえちちゅるんでちゅ。」

「お前はあのバケモノがどれだけ恐ろしいか、わかつてないんだろ？だから……？」

マリンの答えに頷こいとしないアクアにアメジがキレた。

「わかつてないのはてめーのほりだつ！」

「ふがつつつ！？」

アメジの助走をつけた鉄拳によつてアクアはぶつとばされた。

「ああっ、ぼうりょくはダメでちゅつ！」

「マリンちゃんはね、アンタのために黒水晶を倒したいって言つてきたのよー！」

こんな小さな子が……アンタを救いたいがためにつて。小さな体でのバカデカイバケモノと戦いたいって……。アンタ、あたしよりこのことわかつてるんじゃないの？なのに、なん……。

マリンちゃんのせいいっぱいの勇気がわからんねーんだよ？！」

「わかつてないのはそっちのほうだ。黒水晶となんて戦えない。マリンは幼すぎる、聖獣としての力なんてないに等しい。

それに、マリンを扱える水晶使いがどこにいるんだ？」
諦めに似た目で答えるアクア。

そんなアクアを真ん丸い目でじつと見るマリン

「アンタじゃないの……？違うの……？」

アメジはアクアに答えを求めた。アメジの欲した答えがもどつてきてほしいと思いながら、アクアの目を見た。

「俺は・・・・・」

「・・・アクアちゃん」

俯いたままのアクアの口から吐た言葉は

「違う。・・・俺は水晶使いじゃない。戦えない。」

アクア自身の口から自分は水晶使いじゃないとでた。

サファの情報では、幼い頃に父親から水晶使いとして育てられたと聞いていたのだが……。

そこにいたのは先ほどまでアメジに敵意むき出しにギラついていた男とは別人のように、静かにうなだれたままのアクアがいた。

おそろしいほどにか弱く映つたその魂に、アメジは再び握つていた拳を下ろした。

「じゃ、しかたないか。ラルじいにでも聞いてみてマリンちゃんのパートナー務まる水晶使い探してみるか。いこ、マリンちゃん。」

アクアのよこを通り過ぎ、マリンを胸に抱いて、アメジは山道を下りだす。アメジに抱えられたまま、アメジの肩から顔をのぞかせ、アクアへと振り返るマリンは小さな声ながら、叫んだ。

「アクアちゃん！マリンじえつたいくろついつよたおちゅでちゅ。
ちゃから、あんちんちて！」

マリンは小さいながら決意を秘めた強い目で、そしてかすかに潤んだ瞳で、遠ざかるアクアの姿を見つめていた。

深まつしていく夜の中、冷たい土の上にアクアはじつと座つたままでいた。

アメジにぶたれた頬がまだ熱く、じんじんと痛んだ。

「なんで・・・・死んだのに・・・・」

その痛みは懐かしくも苦しかつたあの記憶を呼びました。
忘れ去りたい記憶、消してしまいたい過去。

アクアにとつては黒水晶以上の恐怖であつたかも知れない、その存在・・・・

「親父・・・・」

もつこの世にはいないその存在、
だがアクアの中ではまだ消え去ることのない巨大な冷たい壁。

十年前、アクアが引きこもることになつた大きな原因、
なにより逃げたかつたその存在を激しく思い出させてしまった。

「あの女・・・・」

ぎゅっと唇を噛むアクア、じわっと口に広がる血の味。
いきなり自分の前に現れて、マリンを奪つた上、体をまつぶたつに
されたかのような衝撃をアクアに残したアメジ。

そしてアメジとの出会いがアクアの人生を、全てを変えていくので
ある。

「連れてきたよ」

「・・・連れてきたって・・・アメジさん、マリンちゃん?」

「サファの前にアメジはみゅっ。とマリンちゃんを差し出して見せた。

「あいつの代わりにマリンちゃんが戦ってくれるって、ね。

「はいでちゅ。」

ええっ? !、困ったままの表情でサファはため息をついた。ジストの代わりに戦える水晶使いを求めていたのに、

こんな小さな聖獣が代わりだなんて・・・・・(泣)

「聖獣と水晶使いは、水晶の相性が第一だから、マリンちゃんと会う人がいるかどうか調べてみるわね。

マリンちゃん、ちょっと疲れるかもしれないけど、我慢してね。

「はいでちゅ。」

サファに抱きかかえられたマリンは、若手始め、水晶使いたちのひとを回る。

水晶使ひは少しだけ水晶をマリンへと送り込む、そのたびにマリンは静電気がおきたように全身の毛がぶわっと逆立ち、体をぶるぶると震わせ、拒否反応を示した。

サファは思い当たるだけの水晶使いたちのひとを回り、マリンとの相性を確かめた・・・が

「全滅でした・・・。」

「がっくりと肩をおとすサファ、その横で残念そうにしゃべる。」
と鳴いたマリン。

「やっか・・・、水晶使いがいなこと、聖獣だけじゃ、黒水晶と戦うのってムリだよねー。」

やれやれ。と肩をおとすアメジ。

それ以上にさらに小さく縮こまつながらマリン

「マリン・・・たたかえないでちゅか？・・・マリン

アクアちゃんのおやくにたてないでちゅか・・・？

ちゅんなのやでちゅ！』

体をぷるぷると震わせながら、ダッと走り去るマロン、
をアメジは慌てて追いかけた。

「マリンちゃん！』

「ひくひ、ひくひ・・・』

小さな体をぶるぶる震わせながら、マロンは泣いていた。

「マロンなにもできないでちゅ・・・
やべたたじゅだちゅ・・・ひくひ。』

「

アメジがしゃがみこんでその小さな背中に触れると、一瞬びくと
なり、またぽろぽろと泣いた。

「マリンちゃん・・・アンタなんでそこまであいつのことを
「アクアちゃん・・・マリンのおんじんなんですか。」

マロンがチビでなきむちよみわこからつて、ほかのちゅうじゅうた
ひじめられていたのです。

ちよこにアクアちゃんがやつてきて、マリンをこじめてたちえいじゅつたけ、みんなにげでいつたでちゅ。

マリンひとめみて、アクアちゃんにちよこいていじーとおもつたでちゅ。

アクアちゃん、ちよばこいてもいにいつてくれたでちゅ。
ちよびて、いのちもやぢやけくちてくれるでちゅ。

だからマリン、アクアちゃんにおんかえりたいでちゅ。

くろついちよいるから、アクアちゃんまつりんでちゅ。

いつもうなぢやれているんぢゅ・・・くろついちよわるこでちゅ。

だからマリンたおちたいんでちゅ。」

涙でぐしゅぐしゅな顔のまま、アメジを見上げ必死に訴えるマリン。

「マリンちゃん・・・。

一生懸命な、一途なマリンの気持ち、なんとか叶えてやりたこと思
う、アメジだつたが・・・。

相性の合つ水晶使いがいないんぢや・・・。

なんとかマリンを納得させる言葉を考えていたアメジの後方から、
サファの声が

「あつ、アメジさん、こました、あと一人・・・はあはあ・・・
アメジのもとへと駆けてきたサファは

「へ? だれよ?」

「はい、おじい様、ですよー」
ラルじい?!

太陽から逃れるよつとして立っているあのさびしい家に、アクアはいた。

机の上に、置きっぱなしになつたままのマリンのクッキーに目がいつた。

「マリンのやつ、忘れていつてる……。」

小さな袋に入つたままのそのクッキーをてのひらに乗せ、マリンを心に想つた。

一年前、出会つた幼い聖獣は、初めて出会つたその瞬間から、自分をまつすぐな眼で見つめてくれた。

それ以来、自分を慕い、いつもついてきてくれた。

こんな自分を……。

アクアは自分が嫌いだつた、

生まれる前、母の胎内にいた頃、黒水晶の毒をつけ、そのため他のリスタル人とは違う、奇怪な容姿で生まれたのが嫌だつた。

そしてその毒の影響か、体内に宿したバケモノ級のバカデカイ水晶に、それにつりあわない、よわすぎる体。

そしてそれ以上に、弱すぎた心が……。

厳しすぎた父、ついていけない修行、優秀すぎた兄、周囲の自分を見る目・・・・

強くなれない心はどんどん傷ついていった。
一度も褒められたことはなかった。

いつも叱られてばかりだった。

ぶたれてばかりだった。

すべてが恐怖だと感じた幼いアクアの心は、逃げることだけを求めてた。

だれもいない、古びた廃屋へと隠れ、父に見つかぬよつこと、びくびくしながら潜んでいた。

もう、十年も・・・。

やつと年齢が一桁になつたばかりのアクアは、その廃屋に立てこもるようになった。

そこでなにをするわけでもなく、三角座りで、小さくなつた体を抱えるように、父に見つからぬいよつてびくびくしながら、息を潜めていた。

もともと細身だったその体は、この三日なにも口にしてなかつたからなのか、ますます細くなつていた。

アクアのなかでは空腹を満たすことよりも、父から逃れることのほうが重要だった。

いや、いつそのまま死んでもいいとさえ思つていた。

そんな時、ドアの向こうで物音がした。父かもしれない。心臓だけが激しく反応する中、激しい緊張感だけがアクアのリアルだった。

激しい恐怖感が襲つた、が、その物音の正体は幸運にも父ではなかつた。

「アクアぼつちやま、私です、ラズリです。」

「！」

声の主は、父に仕える聖獣ラピスの妻ラズリだった。

側に他のだれかがいるかもしれないと警戒して声を飲み込むアクアにラズリが話しかけた。

「安心してくださいな、私しかいませんから。」

「・・・父さんに言われて、僕を連れ戻しにきたのか？」

震える声でラズリに訊ねるアクア、そんなアクアを不憫に思いながら、優しい口調でラズリは答える。

「いいえ、そうではなくて、お腹を空かしていると思って、食べ物を持ってきたんですよ。

なにも食べてないのではありますか？

ダメですよ、大事な時期なんですから。」

「・・・・・」

ラズリの優しさに喉の奥が震えそうになりながらも、アクアは

「・・・ダメだよ、僕なんかより、子供にあげなきや。

まだ生まれたばかりだし、ラズリのほうこそ大事な時期だろ？

・・・早く、もどってあげなきや。」

「ありがとうございます、アクアぼっちゃんは本当に優しいお方。」

違う、ただの臆病者なんだ。

心の奥で、ラズリの言葉を否定するアクア。

「でも、ちゃんと食べてくださいね。

また、様子を見にきますわ。」

「・・・・・」

ラズリが去った音を確認すると、アクアはそつとドアを開けた。ラズリが持ってきた食べ物を、頬張った。

ラズリの優しさに、お腹だけでなく、心も少し満たされた気がした。

それから毎日、ラズリはアクアのもとを訪れた。いつもドアごしでお互い顔を見ることはなかつたが、それがアクアのせいといった対応であり、ラズリもそれをわかつていた。

アクアは夜中にこつそりと外にでることがあつた。

そしてこつそりと寺院に忍び込み、書庫の古本をいろいろ読み漁つた。

アクアは基本的に体を動かすことより、本を読んだり、字を書いたり、とデスクワークが好きだつた。

書庫で興味深い本を選んでは、内容を書き出し、自分なりにまとめてたくさんの書をこしらえた。

特にアクアが好んだのは、リスターの歴史と遺跡に関する謎など、水晶に関する謎にも興味があつたが、後ろめたい思いがあるのが、水晶使いというワードを目にするとたび、心が痛んだ。

父から、水晶使いの修行から逃げてきたことが悪いことなのだとアクアは後ろめたく思つていたのだ。

だが、それに立ち向かう勇気は、なかつた。

いつものようにドアごしにラズリと語り合つアクア。寺院の書庫で得た知識をうれしそうに話すアクアにラズリがこつ話をした。

「アクアぼつちやま、本を書かれたらどうですか？」

「本？！……でも、だれが見てくれるかな？……僕の書いた本なんて……。」

自分に自信のないアクアは頼りなげに答える。

「私は読んでみたいですね。せっかくの知識をいかさなくてはもつたまいでしよう?」

「きつとアクアアボッチャやまは水晶使いよりも、やつちのほうが向いているんじやないかしら?」

アクアに希望を持たせたいラズリはそつ答える。

「でも・・・水晶使いになれたら・・・どんなにいいだろ?・・・

そしたら少しは父さんも許してくれるだろ?」

力なく、さびしげに言うアクアに、ラズリは優しく答えた。
「許すも何も、族長はアクアアボッチャやまが思つてはいるよつて恐ろしい方ではありませんよ。

ただ、子供の愛し方が不器用なだけなんですよ。」

「そつかな・・・? そんなの気休めでしか・・・」

父は自分を憎んでいるんじやないのか?

・
母親の命を奪つてまで生まれたのが、こんな出来損ないの人間で・・・

アクアはそう思えてならなかつた。

「アクアアボッチャやま、私、もうじき子供が生まれるんですよ。」

「え?」

「私、ここのにはぼっちゃんのような優しい心を持つた子に育つて

欲しいと思つていますの。」

ふふ、と笑いながら言つたラズリに

「ダメだ！こんな臆病者になっちゃう…」

必死で否定するアクア

「ぼっちゃん、臆病なのは悪いこととは思いませんわ。
強い者には持てない優しさを、ぼっちゃんは持っているんですから。
優しい心、だれかを思いやる気持ちは、私なによりの強さだと思つ
ているんですよ。」

ねえ、ぼっちゃん、この子が生まれたら、抱きにきてくれませんか？

お家に戻つて来いといつ意味ではありませんわ。この子に会つて会
てほしいんですの。」

「……ラズリ。」

それが、ラズリとの最後の会話になつた。

一人目の子を生んだ後、黒水晶との戦いにおいて命を落とした。

それから一年後、アクアはそのラズリの子と出会つことになる。
ラズリゆずりの虎毛に、透き通つたスカイブルーの瞳。

疑つことなど知らず、真つ直ぐな瞳は、透明な心を象徴しているか
のような・・・・

それがマリンだつた。

マリンは、母とアクアの関係もやりとりも知らなかつた。

だが、他の聖獣たちが恐れるような、バケモノみたいな水晶に恐れることもなく、自分を慕つてついてきてくれた。

臆病だけど、真っ直ぐで、いつも自分を信じてくれた。

優しい瞳が、アクアの脳裏に焼きついたままだつた。

アメジに連れられて、黒水晶と戦いに行つたマリン。

こんな自分のために、と勇氣をふりしぶつた幼い魂。

あの時のアメジの問いかけに迷いながらも、答えをだそうとしていた。

「マリン……」

今こそ、逃げ出さない勇氣をアクアは手にじみつとしていた。

「マリンちゃん、まだ希望は残っているわ。
おじい様がまだいたわ。」

果たしてそれは希望といえるのだらうか・・・?
アメジとサファとマリンはラルドのもとへと向かつた。

今日もそろそろ黒水晶がやつてくる時間となり、いつもの場所にラルドはジスト、タルとともにいた。

アメジたちが来たときはまだ幸いにも黒水晶は来ていなかつた。

「ココヤ、遅いではないか!巫女がおら」とこは話にならんじやろが、
まったく、ケガで休んでおつたからと、心までたるんではしようがないわ。」

「すみません、少し用事がありまして。」

「そりそり、大事な用事よ。」

開き直つてアメジ答える。

アメジに抱かれたままのマリンもみゅつ。と答える。
マリンに真つ先に気づいたタルが「あつ」と叫んだ。

「ちよつ、なんでマリンを連れてきたるか?!
もつじきあいつがここにやつてくるたるよー。」
ジストの足元で、ギャーギャー叫ぶタル。

「そう、でおじい様、このマリンちゃんとの水晶の相性を調べにきたんですよ。」

「なんじゃと？」のチビつこと・・・ワシが？」

「ええ、おじい様の聖獣はもう数十年前に亡くなつたのを最後に、おじい様はずっとおひとりでしょ。もし、マリンちゃんと相性が合えば、またおじい様だつて。」

「お前、このワシを戦わせるつもりかっ？！」

なにを考えとる。そんなことをすれば・・・

アメジ殿がますますワシに惚れてしまつじゃろうがつー

んなわけないだろ、ジジイ。

「サファ、ラルド様を戦わせるなんて、無茶を言つな。

私とタルがみんなの分まで戦う。

マリンも、下がらせるんだ。」

「ジスト様、あなたこそひとりで無茶しそぎです。

おじい様は年の割りに丈夫だから、少しくらい無茶をせても平氣です。」

サファ、ちょっとラルドに酷い。だが、それもジストを想つからこそその発言であつて、けつしてラルドをどうでもこと無つていい訳ではない。

サファは普段おとなしいわりに、こぎとこう時頑固なところもあり、言い出したらジストであろうと譲らないときがある。ジストもそれを知つているから、半分諦めたようなため息をついた。

タルだけは強く、反対たるーと主張していた。

「マリンちゃん」とラルじいか・・・

アメジはふたりが並んで戦っている姿を想像してみた・・・が。

「ふりてい」とジジイ（Hロ）・・・ああ、なんて絵にならない（泣）マリンちゃんの気持ちを叶えてやりたいと思ったアメジだったが、マリンの初主人となるのがラルドかもしれないと思うと、少し、いやかなり後悔した。

そんなこんなともめているうちに、あの黒く巨大な影が舞つて来た。

「みな、早く構えろ！奴が来た！」

ジストが黒水晶を睨みながら、みなに叫び、体制を整える。タルもすぐジストのもとに走り、戦いの精神に入る。

「アメジさん！」

「よっしゃ、いくよ。」

アメジ、マリンを降ろすとドクロ水晶を取り出し、走り出した。サファもアメジと打ち合わせをしたわけではないが、アメジとは逆方向へ向かい、ドクロ水晶を構え、集中を始めた。

巨大なバケモノを目の前にし、小さな体がガクガクと震えだしたマリンだったが、必死でそれを打ち消そうとし、体を真つ直ぐと伸ばし、振るえを止めようとした。

アクアのために黒水晶を倒したい、その気持ちだけは本当だつたらだ。

アメジは大地を激しく蹴り上げることで、走りながら、力強い光の

線を描いていった。

黒水晶が真っ先に動きの速いアメジヘと目標を定め、襲い掛かる。アメジはフットワークのよさで、巨大な黒水晶の体当たりな攻撃をかわしながら線を描き続けた。

アメジがおとりとなつているおかげで、サファはわりと安全に線を描いていた。

サファは流れるような動きで、舞台で舞つていてるようなステップで光の線を描いていく。

ジストもいつものように水晶をタルに込め、タルの戦闘能力を高めてやる。光の生物となつたタルは一人の巫女が描いた線をつぎつぎと駆けていき、黒水晶へとぶつかつていつた。

ギヤアアアアーーー、耳に障るあのキツイ鳴き声をあげながら、痛みに悶える黒水晶は、激しく暴れながら土壁にとぶつかつた。黒水晶の激しい羽ばたきに、タルははじかれ、土壁にと激しくぶつかつて、大地に叩きつけられた。

「タル！」

すぐさまジストが駆けつけたが、ダメージをかなりうけたタルはしばらく動けなくなつていた。ジストが水晶を注ぎ込むが、回復にはしばらくかかるようだ。

「すまない、一人とも、少し時間をかせいでくれ。十分ほど・・・」「ええっ、ちょっと・・・アンタラが戦えない意味な・・・、おおつと。」

アメジ、黒水晶の体当たりをかわしつつ、そのまま線を描きつけ

た。

サフアはラルドに声をかけながら、田をやつた。

「むむむ、ロシも数十年ぶりで、戦つてこんなことなつかの、せれいく

ふむ、ちと大神官の力でも見せ付けてやるとしようかの、せれいくぞ、チビシ！」

「みゅっ？」

ラルドにひょいと抱き上げられ、マリン一瞬縮こまつた。ラルド、しわしわの手に水晶を集めだし、マリンの体へと注いだ。した。

その直前にマリンは全身の毛をふわっと逆立て、ラルドから飛び降り、逃げ出した。

「ロコヤーなことじやーのチビシ！」

「ダメでちゅーマリンやつぱつダメでちゅーーー！」

半泣きでラルドから逃げ出すマリン、それを追いかけるラルド。

「ちよっ・・・ラルじい？なにやつてんの？ー
マコンちやんをこじめてんじやないわよー！」

アメジとサフアはラルドの様子を気にしながら、水晶を放出して、黒水晶を翻弄する。

ジストは黒水晶から逃れつつ、タルの回復を図るが、まだかかりそうだ。

アメジ、希望をラルドへと向けるが・・・

泣いて逃げるマリソンとそれを追いかけるラルド・・・ダメそう。

「ラルじい——————！」

ちよこまかと逃げ回るマリンを岩陰まで追い詰め、じりとにじり寄り、ついに捕まえたラルドは勝ち誇ったようににやり、といやらしく微笑んだ。その表情にがくがくと震えるマリン。

ラルドの手から放たれた水晶はマリンへと、

「た、たちゅけて……アクアちゃん…………！」

第17話

「……………アキアサヒキーナー」

マリンの悲痛な叫び声が響いた。

マリンの全細胞がラルドを拒絶していたのだ。

「観念するのじゃ、サビック」めが・・・。

その手がマリンに触れた瞬間に、それを離る声がした。

「マリン触てんこマ」

マリンの耳がピンとなつた。

その声はアキアサヒキーナーの手、

ラルドがその声のまゝかゝ振つ返つた瞬間、マリンはその耳へと觸れた。

けで行つた。

「アキアサヒキーナー」

田に涙を浮かべながら觸り合へてアキアサヒキーナー、アキアサヒキーナーのマリンの頭を優しく撫でてさつた。

「なんじや、小僧ー」

ラルド、ムツとした顔でアクアを見る。

「あつ、あいつー！」

「あ、もしかして・・・あの人人が？」

アメジさん、やつぱり連れてきてくれたんですね。」

アクアに気づいたアメジとサファは線を描きつつ、アクアのほうへと皿をやつた。

「！？・・・まさか・・・彼は・・・。」

アクアに気づいたジストも、十年ぶりに皿にする弟にじばらへ皿を奪われた。

「アクアちゃん！」

「マリンは・・・

マリンのまちゅたーは、やつぱりアクアがやまちかいないでちゅ！

マリン・・・アクアちゃんといこちゅに

たたかいたいでちゅーーー！」

さつきまでのおびえた表情と一転、凛とした顔でアクアを見上げた

マリン。

アクアを見つめる真つ直ぐな、スカイブルーの瞳にアクアの心が激しく揺れた。

「マリン・・・あんなバケモノにぶつかっていいの怖くないのか？」

まばたきすら忘れている力強いその瞳を見つめながらアクアは問いかけた。

「アクアちゃんまこっちゃんなら……
マリン……こわくないですかよー。」

太陽にあらつと照られた青空色のその瞳にアクアは勇気をもつた。
もう一度マリンの頭を撫でた後、すぐと立ち上がり

「じゃ、マリン……こべれ。」
アクアの答えにマリンの瞳はまっしづに輝いた。
「はいできゅー。」

アクアは集中する。

激しく暴れそうなビビリもない自分のその水晶を、なんとか上手く流そうと、呼吸を整えながら、集中する。

じつとアクアの水晶を待つマリン、幼いながら戦う獣の目をしていた。

喉の奥が千切れそうになら、なんとか右手へと水晶を集め始めたアクア、あと少し、そう思った瞬間集まつた水晶が逆流を始め、それに耐え切れ弱い体が呻いた。

「アクアちゃんー。」

その場に膝を着いたアクアに、マリンが駆け寄りついたが、アクアはそれを止めた。

「すまないマリン、久々に水晶を使ったから、体がびくびくしただ

けだ。」

ハアハア、途切れそうな息を吐き入れぬよつと、深呼吸し、呼吸を整える。

ムダなドキドキを押さえたい。

ここには、自分を怒鳴りつける父はいない。

マリンが待つている。

落ち着け

少しだけ、水晶を・・・ここに集める！

アクアは手のひらに一握り分の水晶を集めた。

「ー・よし、マリンー」

その水晶をマリンへと向けて放つた。

「はいでちゅ！アクアちゃん。」

アクアの水晶を受けたマリンはタルのよつな輝ける聖獸となり、アメジたちの描いた光の道を駆け出した。
その様子を見ていたラルドはぽかーんとなっていたが、アメジは軽くガツツポーズ

「あいつ、やるじゃないかー。」

タルへと水晶を注ぎ続けるジストは

「・・・やつぱり、アクア・・・なのか？」

まだ半分信じられない目でアクアを見ていた。

小さな体ながら光の生物兵器と化したマリン、光の道を駆けながら

黒水晶へと到達。

激しくぶつかった。

「マリンがぶつかると体をねじらせ、翼を激しく羽ばたかせマリンを
払おうとした黒水晶だったが、一撃」
えたマリンはすぐさまアクア
のもとへと駆けてもどった。

「アクアちゃん！ いけるでちゅよ！」

初めての攻撃が上手くいった喜びで嬉しそうなマリン。

そんなマリンの気持ちに応えられてうれしいアクアだったが、
「なにをしとるか、はよせんか！！ 次がくるぞ！」
気がつけば、いつも安全地帯に避難済みのラルドが岩から顔をの
ぞかせながら叫んだ。

「アクアちゃん、おねがいちまちゅ。」

アクアを信頼しきっているマリン。すぐに、とアクアの水晶を待つ。
アクアはマリンの期待に応えようと、再び水晶を集めだすが

「ギャアアアアアアー————！」

黒水晶のあの声に集中を乱された。

「ー・づづ、くづづーー！」

暴れるように放出されたアクアの水晶は、その手に集まることがなく、
大地の中へと吸収されていった。

肌の奥が燃えるように熱く、軽く火傷を負ったような感触を受け、
地面へとへたり込んだ。また呼吸が乱れる。

「アクアちゃん！ 『ギャアアアアアー————！』

マリンの声が、あの声にかき消される。

ダメだ・・・やつぱり俺は・・・

現実から、遠ざかりそうになるアクアの意識・・・

それを戻したのは

「！？」

地面が離れたのにアクアは驚いた。立ち上がつてはいない。

「なにやつてんの？ほら水晶集めて！
マリンちゃん待つているでしょ！」
自分は抱え起^レされた、アメジに。

「お前・・・」

「あたしが支えてあげるから、アンタは水晶集める^レことに集中して
な、

黒水晶の動きは見ててあげるから。」

アメジ横目でにつ、とマリンに微笑む。

アクアは隣のアメジに呼吸の乱れを悟られまいと、顔を背ける。

「フン、俺はな・・・田で見なぐても、あいつの動きは感じ取れる
んだよ・・・。」

「よく聞^レつよ、足がくがくじやん。」

アメジ、自分の膝でアクアの膝をついた。

うあつ、とおもわずよろけたアクアに、にししと笑つた。

「くっ、なにす・・・」

「いーから、集中始めて!」

キツ、とマジメな顔のアメジに、アクアは黙つて集中を始めた。

アメジがアクアを支えている間、サファアがひとりで光の線を描き続ける。

ジストはアクアたちのほうを気にしながらも、タルの回復を続ける。

そしてラルドはアメジたちの後ろから、

「アメジ殿! ワシ以外の男とそんな密着してはなりませんぞ! ! !

「ラルじいうっさい! ! !

やーやー言つていた。

「くつ」

また水晶を上手く集められず、アクアの水晶はムダに放出された。特にアクアは黒水晶の毒によつて、生まれつきバカデカイ水晶を体内に持つており、それだけに水晶のコントロールが難しかつた。

なかなか思うように手に集まらなかつた。

そのたびに体力を消耗した。元々体力のないアクアの息はかなりあがつていた。

失敗、そのたびに何度も父に叱られた。今もまだ、あのころの幼い傷跡のまま。

きっと刺し殺すよつた視線・・・アクアの弱い心、恐怖心がまたア

クアの口を止めたとした。

「どうしたの？もう限界？」

「へへ、うるせー……お前に俺の辛さ……なんか……」

息きれながらも、隣のアメジを睨む。

「マリンちゃん、あんな小さな体でんなバケモノにぶつかっていいんだよ。アンタにそんな勇氣ある？」

「……ハア……ハア。」

アメジから目を逸らし、息の乱れをコヤシトするようにシバを飲み込むアクア。

そして、マリンへと目をやつた。

真っ直ぐな目で、アクアを待つマリン。

「マリンちゃんは、ほとんとアンタのこと、信じてこるんだね。

だから、あたしも、

少しだけアンタの」と信じてみると。

「あ、あきらめんな、マリンちゃんの気持ちに応えてあげて。

「……お前……」

「今はケツ蹴られたことも忘れてやるから。

「いく。」

震える口元を見られまいと、アメジから顔を背けたアクアは、再び水晶を集めだした。

血管が切れそうなほど赤らんだ体を押さえながら、水晶を手のひらに集めた。

キッと耳を天へと立てたマリンに向けて、集めたそれを放つた。マリンはサファの描いた線に乗つて、黒水晶へと走った。

アクアからの水晶を得たマリンは再び光りながら天を駆け上りていく。

凄まじい速さで黒水晶といつて目標に到達し、激しくぶつかった。

「！？！」

その衝撃に身をよじりながら黒水晶

ジタバタと羽ばたきながら、自分へとぶつかってきたそれを睨むかのような表情で向きかえった。

一撃を与えたマリンは、ぐるりと向きを変えた後、素早くアクアのもとへと戻ってきた。

「アクアちゃんまー！」

「マリン・・・」

「でかしたマリンちゃんー！」

アメジたちがマリンを褒める間もなく、黒水晶がこちらへと襲い掛かってきた。

「マリンー！」

反射的にアクアはマリンを胸元へと抱き寄せ、アメジはそのアクアを脇に抱えたまま、横飛びして、黒水晶の体当たりをかわした。

地面すれすれまで顔を近づけた黒水晶は攻撃をかわされたことを気にする様子もなく、地面をガツと蹴り上げ、砂煙を上げながら、再び舞い上がった、そして再びギャアアと鳴いた。

「いくでちゅ！」

戦いのリズムが刻まれてきたマリンは再び黒水晶へと向かうチャンスを待っていた。

耳をぴんと立て、アクアの指示を待っていた。アクアもまたそれを感じ取っていた。お互い目で合図が送れるほどに、お互いを感じあつていた。

アメジはアクアの横で小さく「もう一度。」と言つた。

アクアはそれにこくりと小さく頷くと、水晶を集めマリンへと放つ。

ジストの膝上で氣を失っていたタルの体がかすかに動いた。

「ん・・」

「！タル・・気づいたか？」
パートナーの目覚めに気づいたジストは水晶を送るのを止め、タルの右頬を親指でそつと撫でた。

「ジスト、もう大丈夫たる・・・！？」

アレは・・・誰たるか？！」

タルは黒水晶へと向かっていくその聖獸を目に見て、目が点になつた。まさか・・・

「マリン？」

信じられないといった表情でその姿を見ていた。

戦っている妹の姿を見てふるふると体を震わせながら、ジストに

「ジスト行くたる！」

マリンにばかり危険なめに合わせられないたる！」

ジストの膝からぴょんと飛び降りると、全足をぴんと立ち上げ、ジストを呼んだタルは戦士のオーラを放っていた。

「ああ。」

タルのその姿に共感し、ジストも再び戦闘モードに突入する。

サファアが描いた光の線を駆ける「一体の聖獣」。

マリンが駆ける後を、タルが駆ける。

はげしくぶつかる二つの光に、ドンと吹き飛ばされ、

強いダメージをその体に刻まれた黒水晶。

またギヤアアと千切れそうな鳴き声を上げた後、山脈の向こうへと消えていった。

大地には黒水晶が落とした血痕が点々と残った。

一仕事終えたサファアはふうーと息をつきながらその場へと座り込んだ。

タルはすぐさまマリンのもとへと走った

妹のことが心配だったし、いろいろ言いたいことがあつたし、しかつてやりたかったのだが・・・

「ひりひりひりひり！」

マリンは真っ直ぐにアクアのもとへと走って行つた。

無茶して姉の気持ちも知らないでとぶりぶりするタル、自分より真

つ先にアクアのもとへと向かわれた。嫉妬心が混じったような複雑な気持ちでその後姿にふりふりしていた。

そのタルの隣で、十年ぶりに田にする弟を不思議な気持ちで見つめていたジストがいた。

ジストは弟にかける第一声をずっと考えていた。

先ほどの戦いぶりを褒めてやるのが先か、

今までなにもしてやれなかつたことを謝るのが先か……と。

「アクアちゃんまーやつたでちゅよー！
マリンたち、くわつこちよつけぱはうつたでちゅー！」

まん丸な瞳でうれしさが零れそつたマリンがアクアに話しかける。
そんなマリンを「よくやつた。」と褒めて撫でてやりたかったアクアだつたが、
体がそれすらも許してくれないほど疲労していた。
自分を抱えるアメジに体を預ける様に、アクアは田を閉じた。

「ーーアクアちゃんまー？」

心配するマリンに安心するようアメジが言つた。

「大丈夫よ、疲れているだけだから。」
アメジにこくと頷いたマリンは一言

「おつかれちゃ までちゅ。」

と言つてふりふりと自分を見ているタルへと向き直つた。
もつ自分は一人前だから心配いらない、といつ態度をタルへと見せた。

「マリンー、やつぱりお前は戦いなんてダメたるよー。今回成功したからって調子に乗っちゃダメたるー。」
ふりふりするタルを落ち着かすようジストが言った。

「まあ落ち着けタル。

今回マリンと・・・アクアのおかげで助けられたんだ。

な。

「・・・せうたるナビ。」

認めてやりたい、でもしたくないそれを邪魔する姉心であった。

アメジはアクアを抱えたまま、その場へと座り込んだ。
そして口を閉じたまままだ少し息が乱れたままのアクアへと口をや
つた。

「アンタもなかなかやるじやん。少し見直したよ。」

アクアをムカツクかわいくない奴だと思つていたアメジだったが、
この戦いの中でアクアに対する想いが少し変わつた。

ひねくれものでやな奴だけど、マリンちゃんへの想いは絶対なんだ
な。

「ん? なに・・・

アメジの膝の上でかすかな声が発した一言

「・・・あり・・・がとう。」

そつそつぶやいた後、アクアの意識は遠のいていった。

アメジの後ろから

「アメジ殿——、ワシにも膝枕をを——」

といつラルドの声がしていたが無視した。

アメジはなんだこいつーと言いながらアクアの頭をぐしゃぐしゃしていた。

アクアの中に発生したある感情に気づくはずもなく、アメジは黒水晶を倒した後のアメジ感謝祭に胸を躍らせていたのだった。

星達がまばたきする下、アメジは片手に小さな袋に詰めたクッキーを掌で遊ばせながら歩いていた。

「マリンたん♪」

そう愛しいあの子を思いながら、アメジが向かっていた先にはその存在があった。

軽くスキップするアメジの目の先にある人物の姿があった。

「ジスト！」

アメジの声に振り向いたジストにアメジは階段を駆け上りながら追いついた。

「アンタこんな時間まで仕事？」

「いや、少し私用で・・・

アメジこそなにを？

まさか、ラルド様にムリを言われて・・・？」

ラルドのわがままぶりをよく知るジスト、アメジが迷惑をかけられているのではないかと心配げに訊ねる。

「ははは、そうじゃないって・・・

まあ、私用で・・・うんまあ、いわゆるデートってやつ？♪

「マリンたんとvvv

氣色悪く笑いを浮かべるアメジに苦笑いで応えるジスト。

ふわりと夜風に吹かれながら、ふたりは階段を登つていき、リストルの街の一番高い場所にとついた。

「あれ？方角同じね？」

「あ、ああ、私はこの先なのだが……」「

と街の外へと向かおうとするジスト

「あ、あたしもやつち方面なんだけど……」「

え、まさかジストの用事つて……

「まあか……アメジのトートの相手とは……アクアなのか?」「はい?」

「アクアを連れてきたのは君だと聞いたのだが、アクアとは親しいのか?」「

ジストの間に違つ違つと激しく首を横に振るアメジ
「あたしが会いにいくのはマリンややんよ!」

もしかしてジストの用事つて……」「

アクアとマリンの並ぶ散歩道を同じく並んで歩いていきジストとアメジ

その一人の先から届いた声は

「あ、アメジちやま!」

とてとてと坂道を走つてへるマリンだった。

「マリンちやーんvv

むきゅーーと変な顔をさりに変顔にしながらマリンを抱き上げ頬摺りするアメジ。

「おい、マリンに触るな!」

坂の上から攻撃的なこの声は

「アクアちやま。」「

そのほうへうれしそうに振り返るマリン

「アクア・・・」

複雑な表情で見上げるジスト

「あのね、あたしはマコンドリーテーでござったのです、ね、さうござんね。」

「せこでりゅ。アコノとトクヲかや モヒアメジカヤ モでなかよへぬ
のめだりゅ。

無邪気につくるりとアメジに微笑むマリン

「え・・・マリンちゃん・・・」

ひどいわマリンちゃん
騙したのね！
今夜一緒に遊ぼうって約束したのに

「いつも一緒になんて聞いてないでしょ！ふりふり

アクアはジストたちの存在に気づいていたが、ちらりと田にした後、その存在を気にする様子もなく、空へと田をやつた。

アケア!

シストが名を呼んだ。かアケアは応えることもなく、空を見たままだった。

その時間音が途絶え、かすかな風の音だけが流れた。
沈黙の時間、気まずい空気。

兄弟なんだよな? こいつら、とふたりを交互に見るアメジ
同じようにマリンも見た。

「元氣そつで安心した。もう十年も会つてなかつたからな。

父上が亡くなつて、今は私が族長をしている。

すまなかつた、今までお前に会つことができなくて、日々黒水晶を倒すことだけを考えて生きていた、お前に会つのも、黒水晶を倒してからだと、そう思つて生きてきた。

そして氣づけば十年もたつてしまつていた・・・」

それまで空を見上げたまま、反応しなかつたアクアが口を開いた。
「なにを謝るんだ？」

俺は別に、会いたくなかった。」

ジストのほうを振り向かずにアクアは答えた。

「アクア・・・」

そして再び流れる、氣まづい空氣。

なんなんだ？この氣まづい兄弟は

「今日は助かつた。アクアとマリンのおかげで黒水晶を無事追い払

うことができた。

お前が来てくれて本当につれしかつた・・・

ありがとう。」

「勘違ひしないでくれ、

俺はリスタルの民がどうなるうがどうでもいい。

俺は、マリンのために戦つただけだ。」

無愛想に答えるアクアに、ジストはかすかに笑つて答えた。

「それでもいいんだ。それも立派に戦う理由になる。

ありがとアクラ、私は一言礼が言いたかったんだ。
私も、マリンのためにも一刻も早く黒水晶を倒すよ。

今夜はゆっくり休んでくれ。・・・じゃ。」

そう言つてアクラに頭を垂れた後、ジストは坂道を下り街へと帰つていった。

アクラは横田で見送つた後、アメジで臂を向けて曰く歩こへこつた。

「なんなんだよ、あいつら、ねマリンちゃん。」

マリンはまん丸な目でアメジを見ながら

「アメジちやま、アクラちやまとなかよべへべだちやい。」

「え？」

訴えるような目でアメジを見つめるマリン

「アメジちやまならわつとアクラちやまのいとわかつててくれるつてマリンおもうでちゅ。

だからアメジちやまにアクラちやまとなかよべへべだりこたこでちゅ。」

「」

「マリンちゃん・・・」

「アクラちやまはアメジちやまとなかよべへたいておもつてこるでわよ。」

わいわいと輝く目で田代ひづのマリン

「は？あいつが・・・マリンちゃん、それはないだろ。
あいつはマリンちゃんこしかキョーミない人なんだから。」

「そんなことなこでちゅー。」

「アクラアチャマアメジアチャマの」とひびいてたでひま。

は？あたしのこと調べていたって・・・スチーカーか？いや、まさか殴ったこと根に持つて・・・ありそりあいつ、めつちや根にもつて・・・ネクラだし。

「アクラアチャマとおともだちになつてくだけやいね、アメジアチャマ。

「きりきりの皿で見つめられて、ははほと苦笑にする複雑アメジだつた。

「ちよれじや、またでちゅ。」

そう言つてマリンはアメジから離れるとトテトテとアクラの後を追つていつた。アメジはマリンに渡すはずだつたクッキーを渡し損ねてしまつたが、まいつか、またにしようと坂道を下つていつた。

「ジストー。」

街に入ったところでその姿を見かけ、アメジは声をかけた。

「アメジ、もう用事は終わつたのか・・・？」

「あ、ああ、まあまた後日かなつて。」

「そりが、アメジも早く戻つて休まないと、疲れているだろ。」

ジストに家の近くまで送つてもらつたアメジ

お互いおやすみを告げて別れる前にアメジはジストを呼び止めた。

「ジスト、アンタさ他人のことばつか気づかっているけど
アンタこそ大丈夫？」

「え？」

「サファも心配していたよ。アンタいつも無茶ばっかしてるので。
族長の使命だかしないけど。少しほうにまかせるとかしたら？」
「いや、私なら大丈夫だ。」

そう言うジストにアメジははあー。と息をはいた。

「アンタ一度くらいだれたことあるの？」

「え？」

「たまにはだれてみたらいいんじやない？
そんなんじや早死にするよ。」

そう言うアメジにしばし呆然となつたジストだつたが、

「ははは、私はこのリスターのために死せるなら本望だよ。」

「え？（こいつマジ？）」

「とはいっても、死ねはしない。

私は族長としてこのリスターを守り、導いていく使命があるからな。
死にはしない。」

ジストは笑いながらも力強い目でアメジを見たあと、空を仰いだ。

楽したくないのか？」こいつは・・・

不思議な想いでアメジはジストを見ていた
どこまでも自分とは正反対な人間なのだとしみじみ感じていたのだった。

「それにアメジ、君がいてくれる。
水晶の聖乙女のアメジがいるから」しかし、
私は希望をもつて戦えるんだ。」

ギャアアアアア――――

いつもとは違う、異常な羽ばたき方で暴れ狂う黒いバケモノ
アメジが黒水晶と戦うこと数回、ついにこのバケモノは最期の時を
むかえることとなつた・・・。

リスターの街を出て、坂道を登り、水晶神殿へ向かう道へ続くその
いつもの広場にて、
鬼気迫る黒水晶は死にもの狂いで羽ばたいていた。

それを見守るは

アメジ、ジスト、タル、ラルド、サファにアクアとマリン。

大地を駆けながら力強い水晶の道を描くアメジに
アメジより薄い水晶ながらも確実な道を描いていくサファ
その二人の描いた道しるべを連続して辿るタル
それをサポートする形のマリン

タル、そしてマリンがぶつかるたび、この世のものとは思えないほ
どの金切り声を上げ、激しく暴れた黒水晶。
傷口から溢れ落ちる血液が、大地を汚し始めた。

「アメジー、血に氣をつける、黒水晶の血には強い毒が有る。」

ジストの声が走っていたアメジに届く。

おととつ

以前のところを述べた。

黒水晶の血液からは強い刺激臭がした

アスジは思わず「ふふ」と呟き聲を洩らした

「アメジ殿！上ですじゃ！！」

いつもの暗闇からラルドの声が響く。

羽ばたいて黒光體の血液が降り注いで来た。

「うーーーうう。」

素早く駆け、それをかわした。

また死ねなし

た。

『政治小説、其の二』

黒水晶に背を向け走っていたアメジだつたが、

ぐねうと黒水晶へと色をを変え、手に持った玉口水晶から光の線を放ちながら、黒水晶へと走り出しだ。

腕を大きく振りながら、曲線を描いていく

黒水晶の直前まで走つていくと

待ち構えた黒水晶の大きな口がガバッと開いた。

アメジを一口で噛み千切るつと・・・

「アンタなんかに食われりやしないよ

」のアメジ様はつゝ…

アメジ黒水晶の口ばしを蹴り上げ、したの口ばしを足蹴にしながら、空へと舞つた。

黒い瞳がぎらりと自分の上へと舞い上がつたアメジへと向けられる間アメジは光の線を叩き込むように黒水晶へとつないだ。

「タルーーー！マリンちゃん…！」

アメジが叫ぶと同時に

ジストの水晶を得たタルと

アクアの水晶を得たマリンが次々と黒水晶へと上空よりぶつかつて
いった。

「これで終わりにするたるよ———

「やつつけるでちゅ…！」

一匹の光の生物がのめり込むように黒水晶へとぶつかつた。

一匹と入れ替わるように、アメジは黒水晶の上から飛び降り、その様子を見守つた。

まるで害虫を追い払おうとするかのように左右にと激しく体を振る黒水晶、そのたびに傷口が開き、血が飛び散つた。

タルとマリン、一撃を『え、それぞれのマスターのもとへと走つて

もどる。

「手ごたえあつたる。」
ジストを見上げ、満足げに頷くタル。

水晶と体力の消費で息が上がっていたアクアだったが、息を整えながら「よくやつた」とマリンを褒めてやつた。

しばらく動かなくなつた黒水晶

「・・・死んだ?」

「ぐく、と息を呑みながらじつと見つめるアメジ。
すぐにでも水晶を使えるようひと口水晶に指を当てたまま、様子を見守つていた。

「グググ・・・・」

黒水晶重い頭をぐぐつと起じ上げ、ぎるりとアメジたちを睨んだ後

「ギャアアアアアアアア――――――

あの耳の奥を貫くような声を上げ
大空へと舞い上がつた。

次の攻撃へと身構えるアメジたち、だつたが

「一。」

水晶に敏感なアクアが真つ先にその異常に気づいた。

「黒水晶・・・終わりだ・・・」

黒水晶は最期の力を振り絞っていた。

また山脈のほうを見、激しく声を上げた。

その先に、なにがあるのか、

黒水晶も必死だった。死ねない何かがあるよ!」

だが・・・

ふつと途切れたように、黒水晶は羽ばたきを止めた。
大きすぎる巨体はそのまま落下
大地へと叩きつけられ、そのまま
動かなくなつた。

「なに・・・?死んだの?今度こそ・・・」

にじりにじりと黒水晶へと近づき、それを確認しようとするアメジ

「ああ、黒水晶は死んだ・・・

終わつたんだ。」

自分の心を癒すかのように、アクアは言った。

「やつたでちゅ。アクアちやまのおかげでちゅよ。」

アクアの隣でうれしそうにマコン

「やつと、最後の黒水晶を倒したんだな。」

「そつたる。こいつが一番しぶとかつた上に、
こいつがタルのパパたちを殺した憎い仇だつた。

やつとすべてが終わつたるね。ジスト。」

「・・・ああ。やつと、すべてが・・・。」

幼い頃から黒水晶と戦い続けてきたジスト、二十年近くにも及ぶその黒水晶との戦いの歴史も今日で終わつたのだ。

黒水晶によつて命を落とした父に母、タルの母でありジストのかつてのパートナーでもあつたラズリ、その夫ラピス。その他者、ジストが守れなかつた人たち・・・・・これで皆も安らかに眠れるであつ・・・・やつ心に思つた。

「ジスト様！やつと終わつたんですね。」

ジストの側にうれしそうに駆けて来るサファ

「黒水晶・・・あのバケモノ倒しちやつたのか・・・。」

百年の時を越え、水晶の聖乙女として現代リスタルで黒水晶と戦うことになつたアメジ

楽して生きるがモットー

族長の妻になつて楽な人生を歩むのが夢だつたが、
その夢にやぶれ、そして新たに見つけた

黒水晶を倒して聖乙女アメジをまとめてみなに祭られ、崇められ、
楽して生きること。

それが新たなアメジの生きる道。

これで・・・アメジ様感謝祭かー・・・・

にやりにやりと妄想でよだれが垂れそつたアメジ

黒水晶は滅んだ、リストアルの民に平穏が訪れた。

祭だ祭だと嬉々とするアメジ

しかし、喜びはつかの間
アメジの楽して生きる道は、またまた遠ざかることになるとは
この時は、知るはずもなかつたのだった・・・。

黒水晶は滅びた。

それを我が目で確認しようと、大事な家族を奪つた憎んでも足りないその存在をこの目に焼き付けようと

黒水晶の亡骸を見学にリストアル中の人々が集まつた。

死体といえどもまだ毒を宿したその体に直接触れる者はなく、少し離れた場から伺う者、へん黒水晶めがつ、と石を投げつける者、その存在を間じかで確認する者、亡き人を想い涙する者や喜びはしやぐ者、

反応はさまざまだったが、皆同じなのは

黒水晶への勝利の喜びであつた。

その日から、みなは嬉しげに忙しそうであつた。

ラルドから集合がかかり、男達は祭の準備へと走り出す。街の通りを歩くアメジの横を忙しそうに駆けて行く人たちを見てアメジはにたにたとしていた。

そうか、いよいよアメジ感謝祭でみんな忙しそうなんだな、くふふ頼むよ諸君。このアメジさまのために大いに祭を盛り上げてくれろ

よ

にたりにたりとしながら、アメジストはここに漂つてゐる店の前に立ち止まつた。

「んー、ここの…おこしなや。」

アメジストはいた店主が

「おお、アナタさまは

聖乙女さまではないですか…！」

黒水晶を倒してくれたそ�で、こやほんとにありがたい。

「わわ、わの菓子でよしにされま、びいわ。」

「おまつ、ここの、おつかさん、サンキュー。」

これよこれ、聖乙女さまをまでしょ。

「わせさんアメジストは遠慮なく菓子を受け取る。

「こけの…ぐだぢやこじがく…。」

アメジスト元から聞き覚えのある声がした。

「あー、マコソウさんー。」

「アメジスト。」おひでりある。

「アメジスト。」おひでりある。

「わ、マコソウさんこりゃー、ここにいのやつは。マコソウさんほひの常連だからね。ひとつサービスしこいたよ。」

「ありがとうでりゅー！」

マコソウのオヤジから菓子を受け取り、袋の先を口へくわえた。

店のすぐ近くのベンチとアメジとマリンは腰掛けた。

「あそこがマリンちゃんお気に入りのお店か。
どうりで、すいべいしおうだなって思ったのよ。」

「はいだら。」

マリンおじいちゃんがうなづいたが、こちもあつよじでへつまーかう
でちゅ。」

アメジが菓子を頬張りながら、マリンもまたクッキーを食べようとしていた。
小さな口と前足で袋を開けようとしていた。

その時だった

「どうがしゃーーん！――！」

がんつ

アメジ、後頭部と尻に地面による打撃。

痛い、それに重たい・・・

なんだ？なにが起こったんだ？

アメジ氣づくと自分の上には知らない男が覆いかぶさっていた。

「あ、いてて・・・あ、どうも、すみません。」

「どうも

「ほぐうつ

男がアメジの上から起き上がりとした瞬間、男の腹部にアメジの膝蹴りがめり込んだ。

「てめえ、この聖乙女さまになに失礼ぶちかましてんだ？

「ハハハ――（怒）」

ふらふらしている男の後ろで心配げなマリンに氣づいた。

「あ、マリンちゃんは大丈夫だった？」

幸いマリンはこの男の落下事故?に巻き込まれることなく無事だった……が

「でも……」

ひぬひぬマコンの視線の先は、男の足

「え……?」

おやおやおやおやの男が足をどけるとやけにこは

無惨な姿になつた、マコンのクッキーがあつた。

ふるふるとしながらじつと耐えた様子のマコン

「ああ――――――!

マコンちやこのクッキーが粉々に――!

「ハハハ――てめーわッハ

「ばぐうつひ

アメジの怒りの鉄拳が再び男の腹部へとめり込んだ。

「アメジちやま、こいんでひゅ。

ガーネだつてわざとじやなかつたでちゅから……ちかたない……
でちゅ。」

「い、いめん

マリンのクッキー台無しにして、ほんとこいめんよ。
ダメージを受けつつも、マリンに謝り慰めに行く男。

「く・・・?

」の失礼野郎、マリンちゃんの知り合い?」

思わずきよとんとなるアメジ

「はいぢぢゅ。

ガーネはマリンのともだちのチールのまぢゅたーなんぢぢゅよ。」

「・・・はあ・・・」

マリンとその男ガーネは顔なじみだった。

「ほんとマジですんません。

まさか下に聖乙女さまがいたなんて思わなかつたから・・・
ラルド様に頼まれてて急いでいたもので。

あの・・・ほんと大丈夫ですか?

どこかがぶつけてケガしたとか・・・」

「あ、ああまあ、ね。」

「おおっ、たすが聖乙女さま!

あの黒水晶と無傷で戦つたらしいじゃないつすか。
そうそうオレの突撃なんかでケガなんてしないすよね。
うそうん。」

自分のしたことでもおき、勝手に感心するガーネ。

「マリンほんとにごめんよ。」

あとで新しいやつ買つて返すからわ、

「ごめん急がないと、ラルド様うるさいし、それじゃ失礼するつす。」
たつと駆け出すガーネにアメジが声をかける

「少年よ、アメジ感謝祭の準備、がんばってね
それに「え？」といった表情で振り返るガーネは

「やだな、聖乙女さま。

祭の準備って、族長とサファさんの結婚式のに決まってるじゃない
すかー。

ははは、さすが聖乙女さま、ジョークも最高ですね。
んじや、後ほど」

そう言つてくるつと向き直つて再び階段を飛び越えるよつて走り出
したガーネ。

そんな軽快に走つていく彼とは対照的に、アメジは

「え・・・？」

ジストとサファの結婚式? なにそれ・・・?

え・・・みんなのしてこる準備つてアメジさま感謝祭じゃないの?」

信じられないアメジ

アメジの夢、楽して生きる人生は・・・

やつぱりまだ遠かったのだった。

「コレツ、族長、アンタビに行くんじゃ？！」

「え、どこで？・・・

いつまでも黒水晶をあのまま晒しておくわけにもいかないでしょ。みんなも黒水晶の死を確認したのだし、そろそろ処理しておこうかと。

ジストの住む族長館を訪れたラルドが、自分と入れ替わるように出かけようとするジストを呼び止めた。

「そんなこと他のもんにまかせたらええ。

族長、アンタは式の準備にとつとと入るんじゃ。」

「え？ 式とは・・・？」

ラルドの「式」とがいまいち理解できなかつたジスト

「は？

なに言つとんじや？

アンタとサファの結婚式にきまつとるーが！」

「ええつ？！」

「まったくすつとぼけおつて。

本当なら二年前にうちのサファと結婚する約束をしておつたといふのに、

アンタは父親の死だの、黒水晶だのを言い訳にしあつて先延ばしこして・・・

黒水晶を倒した後、だとそつこつ話になつた。

黒水晶も先日ついに最後の生き残りも死んだ。
もうなんの障害もなくなつた今、約束をはたしてもらわんとの。」

「・・・ラルド様。」

ジストとサファアは婚約していた間柄であった。
幼い頃から、ずっとジストを想い続けてきたサファア。
祖父であるラルドの後押しもあって、サファアは15を迎えるその日にジストと結婚する約束を交わしていた。

しかし、その日を迎える直前に、ジストの父である前族長が亡くなつたり、サファアの姉たちが次々となくなるという不幸に襲われ、急遽族長となつたジストはさらに多忙な身となり、黒水晶を倒してひと段落してからと、約束を先延ばしにしたのだった。

「そーゆーわけじゃから、黒水晶の処分は他の者にやらせるから、
アンタはサファアとの式の準備をするんじゃ、いいな。」

そう言つてラルドはそそくと出て行つた。出たそばで男達に指示
を出す声が響いていた。

「あつ、ラルド様・・・はあ・・・」

「ジスト、ほんとに結婚するたるか?」

ラルドと入れ替わりに、部屋の奥からタルが出てきた。

「・・・ああ、そうだな。」

黒水晶は滅んだ、私はサファと約束していたからな・・・
「なにも急いですることもないたる。

ジストもつと休んでから、がいいたるよ。」

「そういうわけにもいかないわ。

今までラルド様にうるさく言われてきたからな。

三年も待たせてしまつたんだ。

タル、お前ももう戦わなくてよくなつたんだ。
お前もゆつくり休んでこれからは自分のしたいことをこつぱいした
らいじ。

今まで私につくしてくれてありがとう。感謝している。」

「タルは、タルはずつとジストの聖獣たるよ。

でも黒水晶死んだらもうタルは側にいちゃだめたるか?」

「タル、落ち着け。

黒水晶がいなくなつたからといってタルを追い出したりしない。
お前さえよければずっと私のそばにいてかまわない。

私はタルを戦いのパートナーだけとは思っていない。

家族のよつて思つてゐる。だから、離れる必要はないんだ。」

「ほんとうたるか?」

涙と鼻水を垂らしながら、しゃくりあげながらタルはジストを見上げた。

それに優しく頷くジスト

「・・・タルも、みんなと一緒に準備手伝ってくれるたる。

主役はジストたるからね。」

涙をぬぐつてそう言つとタルは外へとかけていった。

「ありがとうタル・・・。

やつと、戦いが終わつたんだな。

・・・なんだかまだ信じられない、不思議な感じだ。」

ずっと物心ついたころから戦いの日々だつたジストにとつて、黒水晶との戦いがなくなつたこそ非日常であり、まだ実感がわからなかつた。

喜ぶべきことだ、なのに素直に喜ぶことができない。

よくわからぬもやもやとしたものがジストの中に残つていた。

通りを駆けるタル、周りのうれしそうな賑やかな笑い声、同じよつにタルも笑つていた、

笑つてゐるはずだった、

「あれ・・・？」

なんで涙が出てくるたるか？」

黒水晶を倒してほつとした？嬉し涙なのか？いや違う

「タルはジストの聖獣たる。これからもずっと一緒にいられるたる。なのに・・・」

タルは幸せだった。父と母を幼くして亡くし、いつものように他の者から自分のぶかつこうな容姿をバカにされながらも、妹マリンを守るために強がって生きてきた。

強がりながらもタルはどこかで甘えられる存在を求めていた。

自分を必要だとしてくれる存在を求めていた。
そんな中母のラズリの主人であったジストに認めてもらえた。
自分の新たなパートナーになってくれないか。とジストに言われた
その一言がタルにとつて生きるすべてとなつた。

ジストに相応しいパートナーになりたい、

気持ちに応えたい、そんな想いでタルは黒水晶と戦つてきた。

ジストと戦うこと、それがタルにとつての人生ともいえたのだった。ジストと共にもう戦えない、それはタルにとつて虚しさを感じる事実だった。

「・・・はあ・・・なんでこんな切ないたるか。」

「おい、邪魔だよブツサイク。祭の準備の邪魔になるだろ。」タルをどかりと蹴るものがいた。タルははつとなり、その者を見ると、きつとつりあがつた目をその者へと向けた。

「なにするたるか？！バカチール！！」

それはタルと同じ年頃のオスの聖獣だった。
ふりふりとするタルにファンバークといじわるに返すチール。

「あーあ、黒水晶倒したんだってな。」

「そうたるよ。タルとジストのおかげたるよ。
お前も感謝するたる。」

「ふーん、けどオイラとガーネが戦ついたらもつと早く倒せたん
だろーになあ。」

ラルドのじいさんガーネにいじわるばっかすんだもんなあ。
あーあ、残念、オイラの活躍マリンに見せられなくて。」

「ばつつかじやないたるか？！お前自信過剰たるよ。
お前なんかいてもタルとジストの足ひっぱるだけたる。
お前がいなかつたから、倒せたたるよー。」

「お前ほんと可愛くないよな。マリンとは大違い。

「なつ。」

チールはひらりとタルを飛び越え、人ごみの中へと消えていった

「なつ。」

あつ、オイラ忙しいから、お前なんかの相手してひマニアになつてよ。

「むかつくやつたる。まつたぐ・・・

タルの切なさは・・・きっと誰もわかつてくれないと。

タルはジストに主人以上の想いを抱いていた。
タルにとつてジストはすべてであり、それを初恋といつひとじで
はすませたくなかつた。

黒水晶のことは考えなくともよくなつた今、タルの中にはその想い
が強くのしかかつてきただのだつた。

「よつ、モチ聖獣。なーにぶつさいくな顔してんのよ。」

再びタルにいじわるな声がかかる。

「んな！バカ巫女アメジ！－！」

タルの前に現れたのはアメジだった。

今度はタルとアメジがバークバークと低脳なケンカをおっぱじめる。

「たく、お前はのんきたるね。暇人たるか。」

「何言つてんのよ、あたしなんてね、黒水晶倒した聖乙女として毎
日のようにみんなからありがたられているのよ。

もつ毎日毎日みんなに祟められて、もつ大変なんだかひ。

ばかたる。と呆れてため息つくタル。

「お前ののんきぱつが今はひりやましこたるよ。」

タルなんて切なくて、なんだか胸が苦しいたるよ。」

「なに食いすぎ？胸焼け？」

「ほんと、お前はのんきたるね。」

タルなんて・・・ジストのこと考へると・・・・・

も「ひ」はんなんて通らなくなるくらい切ないたるよ。」
はあーとため息タル

「ナウ・ナウよ、ジストーー！」

あいつが結婚するひでじひこひーとよーー！
ね、おかしくない？！」

「え、アメジ、もしかして・・・・・

タルの気持ちわかって？・・・・
ジストの結婚に怒つて・・・・」

「おかしいでしょ？！順序逆でしょ？！

アメジ感謝祭が先でしょ？！まつたく

「は？！」

「たく、ジストもあたしに約束したくせに、
ラルじいもよ、後で抗議しにいかないとね。」

「お前ほんとバカたるつつ！..」

タルアメジに大いに呆れながらその場を去つたのだった。

「は？ なに怒つてたのよ、あいつ。」

祭の準備がいたるところで行われる中、アメジはジストを探していた。

文句を言つてやる。

アメジ感謝祭を忘れていることを。

そうそれこそアメジにとって重要なことであった。

「あつ……」

アメジ、自分の向かう階段上にジストの姿を発見した。

「ジスト……」

鼻息荒くジストに近づくアメジ

「あつ、アメジ、ちよつじよかつた、君を探していたんだ。
少しつきあつてもいいえるか?」

「く?」

言つより先にジストのほうに声かけられ、アメジとまる。

ジストと共に向かつた先は、アメジが覚えあつた場所だった。

「え、この先つて……アクアの……」「ああ、実は初めて行くんだ。

アメジはアクアの家に行つたことがあるのだろう?」

アクアの家?・・・なにしに?」

アメジたちが向かう先は、アメジが以前一度訪ねたことがあるアクアの住むあの場所だつた。

「長いこと会つてなかつたせいか、距離を置かれている気がしてね。あいつは私と話をするのも避けているみたいだし・・・

だが、アメジ、君にはあいつも心を開いてくれてるようだ・・・」

「はいはい? なにそれ、マリンちゃんといい、えらい勘違いじゃない?」

「アメジが一緒に来てくれれば心強いんだ。」

私の式がアクアにとつていいくつかけにいなればと思つてね。それに私自身、アクアに参加してもらいたいんだ。いろいろ誤解をうけているみたいだし、みなにちゃんと紹介してやりたい。」「・・・まあ別にいいけど、けどあいつそういうの嫌がりそつだけ

どね。」

アクアの家の戸を叩いたジスト。

「アクア、私が・・・こののか？」

「おーい、アクア。また畠畠守ぶつここんのかー？」

やはり返事はなく、しばらくかねの回りからりととととつ
足音とともにあの瓶がした。

「こひらちやこでちゅ。・・・じつじよでちゅ。」

ジストが戸に手をかかると開いた。その向こうにまちよと座つた
マリンがいた。

「マコンちやーん♪

「マリン、アクアはいるのか？呼んでほしこのだが。」

「はこでちゅ、いまアクアちやめおち」とひたるでちゅ。」

「仕事？あいつが？」

「はいでちゅ。アクアちやめいせんをかいていんじでちゅよ。
もひかねぐかんちえじちゅるでちゅ。

マコンよんじくねじり。

アクアちやまーー。」

とととととマリンは奥の部屋へと向かつた。

じじがアクアの家かー、と物珍しそうにジストは部屋を見渡した。

兄弟でありますながらジストはアクアのことによく知らなかつた。アク
アが書物に興味があるところとも、じじに来て初めて知つた。

待つこと数分、マリンとともにアクアが奥から現れた。

アメジとジストの顔をちらりと確認するとアクアは無愛想に言つた。

「・・・いつたいなんのようだ？」

「おー、まずはいらっしゃいだろ？まったく、『ヒュニケーション』のとりかたよくわかつてないんだから。」

「アクア、忙しいとこ悪かつた。」

実は頼みがあつてきたんだ。

私はサファと結婚することになった。今皆がその準備を進めてくれているとこなんだが、

祭の準備が整い次第、式を行う予定なんだが・・・

「・・・・・」

ジストの話にあまり興味がない様子のアクアだつたが、おとなしくジストの話を聞いていた

。 「それにお前も参加してほしいんだ。

みんなにちゃんとお前のことを見せてほしい。黒水晶を倒せたのもお前の力があつたから、正式な場でそのことも皆に知らせたいじゃないか。」

「

「・・・イヤだ。」

「アクア？！」

アクア一言返事でジストの頼みを断つた。

「俺を人前に晒して、恥かきたいのか？」

「な、なにを言うんだ？恥とはなんだ？」

私は、お前を誇りたいのに・・・

なにもみんなの前で挨拶をしようと言わない、ただ顔を出しててくれる
だけでいいんだ……。アクア。」

「……帰ってくれ、俺には関係ない行事だろ。」

そう言って不機嫌に奥の部屋へと戻ったアクア。

ダメか……ため息をついてジストはアクアの家をでた。

「たく、可愛げないなあいつは、顔出すだけでいいんでしょう？」

ならあたしがなんとかあいつを引っ張つてついくよ。」「アメジ、そうかありがとう。

アクアのことを任せていいか？

私は、準備を始めねばならないので、後は頼む。」「

「おつけ、んじや。」

ジストはアメジの返事に安心し、その場を去った。

「あれ？」

あ、あたしジストに感謝祭のこと言つつもりだったのに……！

むきい、あーもー忘れちゃつたじやない！」「
こーなつたらなにがなんでもアクア連れてって、たっぷりと恩売つ
とかなきやね、にせり。

邪にくくくと笑うアメジの横でマリンが無邪気に

「ハツコニセリヤ、ハツルムンデリキ。」

「えつ、ああマコンセキ。」

「マコンもたのちみでちゅ。」

「・・・あのね、他人の結婚式のどこが樂しこのよ。」

「ビリキでも自分絶対主義アメジですか」

「アメジセキまもアクアセキモトハツコニセリタケルニ。」

「アメジセキまもアクアセキモトハツコニセリタケルニ。」

「は？・・・あたしとアクアが？」

「はいぢりゅ。」

「ありえなー・・・マジありえなーからマコンセキ。」

「なんでぢりゅか？」

もちかひて・・・アメジセキまアクアセキモトハツコニセリタケルニ。」

「うねつると悲しげな顔になるマコンに慌てて

「違うつてそーじやなくつて」

「じゅぢゅぱりぢゅきなんでぢりゅね」

「ハツコニセリヤ、ハツルムンデリキ。」

「・・・あのね、マリンセキ。」

好きだの惚れただのなんて単純な感情で結婚はしないの。」

「くへけがつんぢりゅか？」

「あよとーんとマコン

「アコニセキ。結婚で最も重要なのは好きだの戀だのよつも

どれだけ楽できるかビリカなのよーー。(力説)

「みゅ？！」

「大人は大変なのよ、いつかマリンちゃんにもわかる日がくるわ。アメジ拳をさゆつ。と子供に自分の考えを熱く語るのだった。マリンは？なままだつたが。

アクアは仕事を言い訳にし、あれから部屋にこもつたまま出て来なかつた。

アメジは諦め、その場を後にした。

「アクアちゃん。」

部屋の前でマリンが呼びかけると、スッ、と扉が開き、マリンは部屋の中へと入つた。

「アメジちゃんまかえつたでぢゅ。」

「そつか、静かになつてよかつた。」

机に向かつたままアクアが答える。

「マリン、ずいぶんとあいつと仲良くなつてゐみたいだな。

いじめられてないだるーな。マリンは氣が弱いとこがあるから。」「そんなことないでぢゅよ。アメジちゃんおもひっこり、やけりやうーでぢゅよ。

「マリン、アメジちゃんのじとけあきでぢゅ。」

アクアは机に向かつたままそうかとつぶやきながら、ペンを走らせる。

「アクアちゃん まもアメジちゃん まひる もひる。」

「じきゅ。

アクアの握っていたペンが変な音を立てて折れた。

「みゅ？」

「マリン…変なことを言つたな…」

「でもアクアちゃん まもアメジちゃん まのことでひりべてたでひる。」「水晶神殿のことについて調べていたんだ。それで聖ひ女のことも・

・
だいたいあんなムチャクチャなやつは・・・
ムキになるアクアだつたが

殴られたことも、自分からマロンを引き離さつとしたことも
思い出せばムカツクことだらけだ。
でもアメジは自分を認めてくれた。

水晶使いとして戦つきかけを訴えてくれたのもアメジとの出会い
があつたからだ。

あの事件以来、アクアの中の亡き父親といつも大な壁は克服できた。
まだ未熟であるとは自覚しつつも、あのじゅりかは、水晶使いと
して自信を持てるようになった。

気づけばアクアはアメジのことばかり考えるようになつていた。
自分でそれを自覚せぬよつとしていたが、いつも自分を見てくれて
いるマリンには誤魔化せなかつた。

「アクアちゃん、アメジちゃんに『ぶらぼーすらたらい』ですか。」

「ぶつ、マリン、バカなことを言つな。」

「きっと、アメジちゃんもよろこぶでちゅよ。」

マリンやつぱりアメジの考え方（結婚論、人生論）を理解してなかつた。

「そんなわけないだろ。」

新しいペンを手にし、再び作業を再開するアクア

「ちよんなことあるでちゅよ。マリンがアメジちゃんまだつたらわれちーでちゅ。」

「・・・そつか？」

マリンの言葉にかすかな望みをつなぎながら、アクアはふと我に返りペンを走らせた。

アメジがアクアの家を後にし、街を歩いているとジストを探してい る男を見かけた。

「ややつ、聖乙女さま。」

「じつしたの、ジストならやつ今まで一緒にだつたけど。」

「いや実は祭で使うお面の出来具合を見ていただこうと思つて、それで族長を探しているんですけど。」

男は片手に面を抱えていた。

その面は巫女が祭で使つもので、神の下僕である精靈を模つた物。リストルでは水晶使いと巫女のカップルが結婚する時のみ、夫になる水晶使いの手より、妻となる巫女に手渡されるという儀式があつた。

「面の仕上げは族長自身がしたいと言つていたので・・・」「え、お面つて全部面職人がやるものでしょ？ふつー。」「まあ、いつもはそうなんすけど、族長がどうしてもと言つていたんで・・・ま、一応俺の仕事はここまでなんすけどね。」「・・・ふーん。

あ、あたし持つていってあげよつか？」

「ええつ、聖乙女さま血らい？

いや、助かりますよ、他の仕事もおしごとんで、

んじや頼みます。」

面職人の男から面をアメジは預かつた。

面をまじまじと見ながら、アメジは少し懐かしい気分になつた。

「なんか、母さんのこと思い出してしちゃつたよ。」

アメジがなんだか過去を思い出し、懐かしさに浸つてゐるその時、また別の男がジストを探していた。

街の外から慌てて走ってきた男は血相変えてジストを呼んでいたのだった。

それはこの後起じる恐ろしい事件の予告であった。

「ジストー、いるー？」

預かつた面を片手にアメジはジスト宅を訪れた。

「ム、なんかたかりに来たたるね。

お前なんかに出すものはなにもないたるよー。」

それをお迎えたのはふりふりとするタル

「あのねー、あたしは頼まれてやつてきたのよ。
アンタは邪魔だからビィてよ、しつし。」

玄関口でムダに睨み合ひアメジとタル

「あ、アメジ。私に用なのか？」

タルの後ろからアメジに気づいたジストがひょいと現れた。

「そうそう、これ預かつて持つてきたのよ。」

アメジはそう言つてジストに面を手渡した。

「あ、出来上がったのか。アメジありがとう。助かつた、そろそろ
様子見にいこうとしてたところだつたんだ。」

ジストはアメジから受け取つた面をすぐに机の上に置くと、棚の上
から道具を下ろすと面と同じ机の上に置き、なにやら準備を始めた。
タルはひょいとジストの隣に座り、その様子を見守る。

「そりいえば職人の人が仕上げはアンタがするとかつて言つてたけど・・・

ジストって族長兼面職人なわけ？」

不思議そうに訊ねるアメジにジストは道具を取り出しながら答えた。

「いや、そうじやなくて、趣味でね。」

「趣味？面作りが？」

「ああ、といつてもなかなか時間がなくて、する暇がなかつたんだがな。

黒水晶もいなくなつたし、以前よりかは時間が取れるようになつたからな。少しずつでもやつていきたいと思つてはじめたんだが。それにせつかくの結婚式だから、私の手で作りたいと思つたんだ。

三年も待たせて、私はサファになにもしてやれなかつたから、せめてこれくらいはしてやりたいと思つて・・・ね。」

「ふーん・・・」

小型ナイフで面の表面を削りながら、ジストは面の形を整えていく。その作業の様子を楽しそうに横で見ているタルとアメジ。

カリカリと面を削る音だけが響く中、暫く静かな時間が流れていた。ジストの作業を眺めながらアメジはなんだか懐かしくなり、ぽつりとつぶやいた。

「なんか、母さん思い出すなあ・・・。」

「ん？ なに言つてゐたるか？」「

「母さんつて・・・？」

アメジのつぶやきにジストとタルが反応する。

「あつ、うん、あたしの母さんつて面職人だつたのよ。それで懐かしいなと思つてさ。」

「アメジの母上は職人だつたのか？ 巫女じゃなくて？」

少し驚いた様子でジストが問いかけた。

「あ、やっぱこの時代でも珍しいのか。

あたしの時代でも水晶使いと職人のカツプルつて異色だつたからね。」

「せうだな・・・そいいえばあまり聞いたことがないな。

水晶使いの妻は巫女、というのが当たり前みたいになつてゐるからな。」

「でしょー。」

アメジと話しながらも作業を続けるジスト、ジストはアメジの話題に興味深げに問いかける。

「そ、うか、アメジの母上は面職人だつたのか。ならアメジも面作りについて詳しいのか？」

「え、あたしはまったくの素人よ。母さんが作業しているのを隣で見ていたことがあつたくらいで。

母さんあたしがほんと子供の頃に死んじやつたからね。あたしもかすかに記憶にある程度かな。」

「そ、うか・・・残念だな。知つてゐるなりいろいろ教えてもらおつと思つてゐたのだが・・・。」

幼い頃のかすかな記憶でしかなかつたが、たしかに覚えていふ」とは、アメジは母が好きだったことだ。

アメジと話している間も休むことなく動かされるその手に、アメジは亡き母を重ね懐かしんでいた。

「けど、少し驚いたわ。ジストにもちゃんとそーゆー趣味があつたなんてや。

てつきりアンタの趣味はリスタルを守ることだけかと思っていたからやー。」

「ははは。それは趣味というより、私の・・・族長としての義務だからな。」

趣味とは言いながら、ジストの作業は細かく正確であり、素人目にも職人の作った物と見劣りしなかつた。
少しずつ形が整つていくソレは、巫女が祭りで使う精霊の顔へと現れていった。

「はあ・・・男前で水晶使いとしても一流で、族長^{ポイント}で、なんでもできるつて・・・存在そのものが罪としか思えない・・・

サファは人生の成功者かー・・・あーくそいなー・・・

あたしだつて、族長の妻に・・・ぶつぶつ

ジストを眺めながらアメジ、ふうーとため息をつきつづぼやいていた。

「こいつなに言つてゐたるか?」

「族長の妻で思い出した!!

ちょっとジスト、アンタ大事なこと忘れてない？！」

いきなり叫んだアメジにジスト一瞬ビクッとなり、手元が狂いそうになった。

「つるさい！バカアメジ静かにしてるたる！ジストの氣を散らすなたる！！」

「へぶつつ」

ぶちきれたタルのとび蹴りがアメジの顔へと飛んだ。そのまま後ろへぶつ倒れるアメジ。

「いりつ、止めないかタル。

アメジ、一体なんだ？私が忘れている大事なことは。

突然バトルモードに入ったアメジとタルを引き剥がしながら、ジストが訊ねた。

「約束してくれたでしょ？

忘れたなんて言わせないわよ。

このアメジ様の感謝祭。」

一瞬きよとんとしながらもジストは

「ああ、そのことか。」

「そのことつて。（なにどうでもいいレベルみたいな言い方わつ）」

「それならラルド様に任せてあるから、ラルド様に訊ねてもうえるか？祭りを仕切っているのは大神官のラルド様だから。」

「ラルじい？」

「やつたる。ジジイのとこに行くたる！」

お前のそんなくだらないことに付き合つてているほどジストもタルもヒマじやないたるよ！..！」

ラルじいか・・・やつぱりラルじいに文句言つてやらないとね。

たく、いつも人のケツ触りやがつて、それでアメジ感謝祭で大いに祭つてくれなきや、マジブツコロだな。

「よし、ラルじいのとこ行つてくるよ。

じゃ、ジストがんばつてね。タル、バーカ。」

「むきつ待つたる。バカアメジーーー！」

ふりふりするタルを無視してアメジはラルドを探しに街に出た。

愛楽器であるオカリナを手で遊ばせながらガーネは中央広場を見下ろせる通りをふらふらとしていた。

広場にはたくさんの若手水晶使いたちが集まっているのがそこからはよく見えた。たまにガーネの後ろを忙しそうに通り過ぎていく人たちがいたが、そんな人たちとは対照的になにを思うかガーネはぼーっと広場を見下ろしていた。

「あつ、ガーネ君！いたいた。」

ガーネにとつては馴染みの声が彼の後方からした。

「よつ、ガラス。」

その声の主に気がついたガーネはノ一 天気に手を振りながらその人を呼んだ。

「もう、よつ、じゃないよ、ガーネ君……はあはあ。」

ガラスと呼ばれたのはガーネと同じ年頃の男だつた。

ただガーネと違つてかなり肥えた丸い体型の男だつた。太つてているためか、散々ガーネを探して走り回つていたためなのかかなり息が乱れ、汗だくで、苦しそうにしていた。

「なにしているのさ。若手のみんなは広場に集まつて祭りの演奏の音合わせするつて聞いているでしょ？」

また怒られちやうよ、大神官さまに！」

息をムリして整えながら、心配げにガラスは言つた。

そんなガラスとは対照的にガーネはのほほんとしていた。

「だーいじょうぶつて。

ラルド様、しばらく広場に戻つてこないつてさ。みんなもラルド様いないとこではけつこつ手抜いているし。心配しそぎなんだよガラスは。」

「で、でもガーネ君……。」

「それに祭りつて、オレはいまいち盛り上がりがないんだよな。

黒水晶と一度も戦えなかつたんだぜ？若手ナンバーワンのこのオレをラルド様は使つてくれなかつたんだぜ？

はーあー、なんのために修業してたのかわからなくなるだろ？なんか燃える前に終わつちやつてたてゆーの？もうなんかさ、切なくつてさ。」

ガーネのため息のわけはそれだつた。その発言に冷や汗ガラス慌てて

「なに言つてるんだよ。黒水晶いなくなつて平和を喜ばなきやだめでしょ？！」

「はあー、それにさー、オレ祭りの演奏つてあんま好きじゃないんだよね。

楽器は好きなんだけどさ、

祭りつて好きに演奏できねーじやん。」

手に持つたオカリナを愛しそうに見つめながら、はあとため息をつくガーネ。

おろおろとするガラスの後ろから声がした。

「ガラスー、あのバカ見つかつたー？」

「あつ、パールちゃん！」

ガラスの側に駆け寄つてきたのはパールと呼ばれた少女だった。

「よつ、パール。」

ガラスのときと同じノー天気な様子のガーネに半ギレながらパールが「よつ、じゃないわよこのバカ！！」

「あはは、ガラスと同じこと言つてら。」

ノー天気けらけらと笑うガーネにふたりは呆れて、お互いの顔を見てはあ、と深いため息をついた。

「族長のための祭りで手を抜くなんて絶対許さないからねつ！（怒）

「安心しろつて、オレは手を抜いてもナンバー一ワンですかー、

若手ナンバー一ワンですかー！あつはつは。」

「そう、バカナンバー一ワンつて自覚あるわけね、もういいわ、ガラス。そんなバカほつといいていきましょう。」

大神官さまに言いつけてあげるから。」

「お、おいちよつと待てよ。パール、そ、それだけは
カンベンしてよ。

オレただでさえ居候の身で肩身狭いんだからさ。
それにラルド様、やたらオレに厳しいし。」

「そんなの知らないわよーー！」

「あつ」

怒りっぱなしのままパールはガーネたちの前から去つていった。

「もう、ガーネ君、いくよ。」

「はあ・・・練習・・・だるいな、のらねえ」

「ラルド様に怒られちゃうよ。」

「うーん、後でエメラに頼んでなんとかしてもらつかな。
ラルド様、エメラには弱いもんな。

「うん、大丈夫だつて。」

再びノー天気なガーネに

「エメラちゃんだつて、広場にいるんじゃないかな？」

今日は踊り子の子も一緒になつてやるつて聞いたし。」

その一言にガーネの目の色が変わつた。

「本当か？ それ。
なら、行こうぜ。」

ぴょんと飛び跳ねながら、広場へと向かう階段へと走るガーネに慌

て後追うガラス

「もう、ガーネ君てば、ほんと踊りが好きなんだね。」

「やうだ、今日は聖乙女さまの踊り見られるかな？
ほら、前の祭りの時は、なんか調子悪かつたらしくて見られなかつたじゃん。

へへへ、今回はずひ踊つてもらいたいよな。」

その聖乙女ことアメジは、ガーネが向かつ広場にいた。
広場に集まつた楽器を抱えた水晶使い、踊り子の娘達の中、アメジ
はラルドの姿を探していた。

「ラルジー・・どいよ？

しかし、この雰囲気は・・・」

アメジの周囲で鳴り響くれめめめな楽器の音。舞の練習をしている
娘達。

「・・・・あたしはゼッテー・・・・踊らないからな。」

アメジの決意は固かつた。

「やつど、到着つと。」

あれから数分もたたぬ間に、ガーネは中央広場へと到着した。

広場にはたくさんの若者達が集まり、混雑していた。

そんな中、カリネは手の中で不カリナをぐるぐると遊はせながら、キヨロキヨロとしながら歩いた。

「ほんとだ、踊り子もみんな集まっているな。」

どーせなら巫女のありがたい舞が見たいけど、サファさんは花嫁だから今回は踊らなハんだよなー。残念。

あれ？ そういういえばガラスのやつがまだ来てない。

がら元来た道を辿りだすと

「うおっ！」

「あたた、ワリイ、だいじょぶわあ——！」「どかつと勢いよくだれかとぶつかつてしまつた。

卷之三

「こ」のアメジ様にぶつかる不屈き者……は……あ、

「アンタは……」

「あっ、聖乙女様じやないっすか！！」

ガーネがぶつかった相手とはアメジだった。そしてまたしても聞髪いれずアメジから暴行を受けたついてないガーネ。

「アンタ、あたしにぶつかるの趣味かああーん？」

再び暴行を受けそうな雰囲気になる。

アメジに胸倉をつかまれながら、必死で謝るガーネ。

そんな中、やっと広場へと到着したガラスが

「ああっ、ガーネ君が女の子から暴行受けてる……！
一体なにがあつたの？！」

ただならぬその様子に離れた場所からガクガクブルブルと恐怖に震えていた。

「いやー、またこつして聖乙女さまに会えるなんて、これもなにかの縁ですかね？」
こうして何度もぶたれたのも、かなりありがたいことかもしないですね。」

広場隅のベンチに腰掛けたアメジとガーネはさきほどまでの険悪な雰囲気とはうつて変わって、フレンドリーな空気が流れていった。

「そりでしょそりでしょ。

このアメジ様に殴られるなんて、そりそりあるじとじやないわよ。
もつとありがたりなさい。」

おだてられるのに弱いアメジとおだてるのが上手いガーネ。
お互い単純者同士、気があつたのかもしない。

「それに聖乙女様つて、近くで見ると、マジで美しいつすね。」

「えつ、おいおい、んなこと言つてもケツは触らせねーぞ、こらへ
いやいや、マジで俺驚いたつすよ。

だつて全然見えないつすよ。

とても百歳越えていのよには見えないつすよーー。
うーん、これも水晶の力なんすかね？」

「あたしはまだピチピチの十八歳だつてのよーー。」

「いきやぶつつ

どかかつ

またしてもアメジに殴られ、ベンチからひっくり返るガーネ。
そんな様子を十メートルほど離れた距離から見守っているガラス。

「おい、ガラス、お前もせつかくだから、こいつこいつて。」

ガーネが手招きしても首を振るガラス

「そんな・・・聖乙女様のお近くなんて、僕なんかが・・
恐れ多くてムリだよ。」

「はつはつは、くるしゅーないちじーよれ。」

ガーネにおだてられてすっかり調子に乗っていたアメジだった。

そんなアメジの様子を見ても、ガラスは近づこうとはしなかった。

「なんだ？あいつは・・・アンタの友達？」

「あ、はい、ガラスつていうんすけど、オレと同じ水晶使い。あ、でも気にしないでくださいよ。

あいつ、女の子と話すの苦手な奴なんで・・・。」

「ふーん。

そういえば・・・アンタ、よつとく見ると誰かに似てない？」「へ？だれにすか？」

「うーん・・・なんか、だれかに似ている気がするんだよね～。」アメジそう言つてガーネの顔をマジマジと見たが、だれに似ているのか思い出せなかつた。

「せうそう、聖乙女様も今回の祭りでは踊り披露してくれるんですね？」

「へ！？」

「オレすごい楽しみなんすよ。

聖乙女様の舞！・・・」

おいおい、ふざけんなよ。

なに期待の眼差し向けてんだよ？！

「あー、あのねー・・・」

「あ、もしかして聖乙女様もここで練習するんですか？ヤタ一ならオレ見学してもいいですか？！」

キラキラ期待の眼差しにアメジ滝汗。

「あのね、あたしのありがたい舞をこんなところで見せられやしないわよ。」

「え、そんなんすか・・・じゃ本番までお楽しみつてことすね！」

あれ、じゃこんなところでなにしてんすか？」
その一言にアメジ、肝心なことを思い出す。

「そうだ、ねえ、ラルじいじにいるか知らな・・・」
アメジがガーネに訊ねようとした時、広場の中央あたりから男達のざわめきによつて遮られた。

「んー、なんだよ？ あつこいつるさいなー。」

不機嫌にその原因を探るつとざわめくあたりを睨むアメジ

「あ、エメラちゃんだ・・・」

ガラスがつぶやいた。

アメジよく見ると、その人じみの中に、騒ぐ男達に手を振る少女を見つけた。

「エメラちゃん。」

その周辺にいた男達から中心に「エメラ、エメラ」と拍手とコールがおこる。

そんな中、少女はみなに手を振りながら、広場中央に置かれている台の上へと登つていった。

なに？ なに？ あの娘何者？

この聖乙女様を差し置いて、なんでやいのやいの言われてんのよ？

「あれ？ 聖乙女様、ご存知じゃなかつたですか？
あの子はエメラ。

ラルド様の孫娘なんすよ。オレの幼馴染なんすけど・・・

あいつ、なにやるつもりなんだ?」

ガーネはアメジにその少女を紹介しながらも、そのHメラがなにをしたいのか、わからず、?な顔をしながら注目していた。

「みなさん、こんにちはです。Hメラです。」

台の上で両手を大きく振りながら、Hメラは挨拶を始めた。

「こんにちはー、Hメラちゃんーー！」

今日もかわいいな~。」

Hメラに応えるように手を振る男達。それに再び手を振りながら応えるHメラ

「ありがとうございます~」

「なんだ? あいや。なんであの子はあんなちやほやされてんのよ? なにまさかあの子の祭りでもすんのか?」

ぶーぶー不機嫌になるアメジ

「今日は族長とサファ姉さまの結婚が決まって、とってもおめでたいです~」

「なに? あの」サファの妹なの? ラルジーの孫ってことは。」

「えと、Hメラはサファさんの従妹なんすよ。」

「ふーん。」

「けど、Hメラのやつもけっこひショック受けてるのかもしねーなあ。あいつノーハイ気な性格してるけど、族長のこと好きだったもんないなあ。毎日のよつこ

族長はかっこいいだの、ステキだの、うるさかったもんないなあ。」

「じこまで本気だったのかはわかんねーけど
そつそつぶやきながら、台の上のエメラを見守っていた。

「エメラ、本当に一人のこと祝福するです。
サファ姉さまには幸せになつてもらいたいです。

だからみんなもお祭りが最高のものになるように協力してくれたら、
エメラサイコーにうれしいです。

踊りも演奏も最高の物を一人に届けるです。ね
「もちろんだ、なあ、みんな！」

一人の男がそう言つと、周りの男達ももちろんだと、わあと答えた。
その返事につれしそうに頷きながら、エメラは続けた。

「それで、こうしてみんなが集まつたいい機会なので、
エメラもみんなに伝えておきたいことがひとつあるです。

実は、エメラ、今好きな人がいるです。
その人のことをここで宣言しておきたいです。」

「ええっ、誰なんだよ？！それは！！？」
エメラのその一言に不安げにざわめく広場。

「あの子、こんな大勢の前で、なに言つてもつなんだよ？」
いまいちエメラが理解できないアメジ

「エメラの好きな人って族長だろ？」

あいつ、みんなの前でそのこと言つてきつと同情をそつ氣なんだよ。
まったく。

「へえー、 そうなの。 なにあの子、 変な子ね。
そつそつちょっと変な奴なんすよ。」

とガーネとアメジがエメラの話題で囁きあつていると

「エメラの好きな人は・・・・・

若手水晶使いナンバー・ワンのガーネです！！vv

「え？！」

「ん、 ガーネって・・・たしかアンタのことよね？」
アメジ、 指差して、 くるりと隣のガーネへと向いた。

「え・・・・なに？ そんな

エメラのやつ、 なに考えているんだ――――――――――――――

自分の想像外のエメラ発言にわけがわからなくなつたままガーネは
叫んだ。

「なんだよ？ ガーネ？

エメラちゃんの好きなやつが、 あのガーネだと？」

みなガーネのほうへと視線を向けると、 さらにざわざわと騒がしく
なつた。 男達の強くてウザイ嫉妬心の混じつた視線がガーネへと刺
さつた。

自分の発言に満足したかんじのエメラは、 すぐに台から降りると、

踊りの練習へと戻つた。

満足げに鼻歌歌いながら、舞の練習にとに入るエメラとは対照的に、混乱気味のガーネは、次第に事がわかると、段々とガーネの顔から血が引いていった。

「な、なんてこと言つてくれたんだよ。エメラのやつ。

「このことどがラルド様に知られたら・・・

オレ、殺されるじゃないか――――――！」

うぎや――――。

叫びパニくるガーネ
「ガーネ君・・・

エメラちゃん・・・」

不安げに、離れた位置からガーネを見守るガラス。

この時、ガーネにひときわ強い憎しみの視線が向けられていたことを、ガーネは知らなかつた。

「そうだ、ちょっとーー、ラルじいはどこにいるのよ？！
あたしはラルじいを探しに来たんだから！！」
アメジの声も、パニク最高潮のガーネには届かなかつた。

「サファのほうも準備はちやくちやくと整つておりますぞ。アメジが探すラルドはアメジと入れ違いで、ジスト宅にいた。ラルドはあちこちで祭りの準備の様子を見て回つていたのだ。

「そうですか・・・。」

面を削りながら、ジストは答える。

ジジイ邪魔たる。あつちいけたる。とタルはラルドを邪魔そうに睨んだ。

「そういえば、アメジがラルド様を探しに行きましたが、お会いしましたか？」

「む？アメジ殿がワシを探してじやと？！」

おおっ、アメジ殿。このワシを

ワシの愛を求めて、ワシを探しておるとな？！」

「だれもやこまで言つてないたる。アメジもい迷惑たるよ。」

ジスト苦笑いしながら、作業を続ける。

「準備が終わるのももづききじやのづ。

サファのやつがその日をどれだけ心待ちしててきたか・・・

族長・・・サファを幸せにしてやつとくれ。

あやつが幼き頃から巫女としてあのバケモノと戦つてこられたんも、アンタの存在があつたからじゃ。

「これからもあやつをよろしく頼むわ。」

「ラルド様……」

ラルドのその言葉に、ジストが手を休めたその時だった。

「族長……大変です……」

息切らしながら、男がジスト宅へと駆け込んできた。

「どうした？！」

「なんじや、慌しい。なに事じや？！」

男はジスト達の前に立つと、息を整えよろと焦っていた。

「たしか、お前さん、黒水晶を片付けにいったはずじゃな。なにかあつたんか？」

「そ、そのことなんですが……」

その男はラルドに命じられて、そのままにされていた黒水晶の死骸を片付けにいった者の一人だった。

「黒水晶が……消えていたんですね……」

「？！？」

「な、なんじやと？！」

「そんなバカなことがあるか？！」

黒水晶はたしかに死んだ。飛んでざつかに消えたわけはあるまい

「もしかして、だれかが持つていつたたるよ。」

タルが口を挟む。

「だれがそんなことをするんじゃ！！

死骸とはいえ、あの体には大量の毒が残つておる。

そのことを知らんやつはおらんはずじゃ。

そんなバカなことをする奴は、おらんじゃろーが。」

「本当に、なにも残つていなかつたのか？」

男にジストが訊ねる。

「はい・・・血の跡は残つていましたけど、
どこかに運んだような、引きずったような痕跡はなかつたし・・・

まさか、生き返つた・・・とかないですよね？」

男は青ざめた顔でラルドたちに尋ねる。

「死んだ黒水晶が生き返つた話なんぞ聞いたことがないわーー

まったく、だれかが勝手に移動させたんじゃろ。
おい、もう一度よく周辺を調べてくるんじや。」

「はつ、はい！！」

ラルドに言われて男は急いで館を出て行つた。

「・・・・今の本当たるか？

黒水晶・・・生き返つたかもたる。」

不安げにジストを見上げるタル。

「そんな話はないと言つとるーがー！」

族長、さつきのことは他の連中に調べさせたから、
アンタは式の準備に集中しなされ、いいなーー
ジストに強く言い聞かせるように、ラルドはそう言つてジスト宅か

ら出て行つた。

「黒水晶が・・・消えた・・・まさか・・・な。」

自分の中のもやもやとしたものをかき消すように、ジストは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

不安げなタルに気づき、それを払いのけるように、タルの頭を撫でながら、そんなことはない、大丈夫だ。と言つた。

消えた黒水晶・・・その不安はやがて形となる。

「ラルじいいるー？！」

再びアメジは族長館へとやつてきた。ラルドを探して

「またきたたるか？…この暇人！」

ジジイならもういなしたるよ。

お前ホントにタイミング悪いたるね～。」

イジワルにアメジを迎えたのはタルだった。

「んがー、またしても、なんで会えないのよ。会いたくない普段はウザイほど会うのにセー、ケツも触られるのに、ムカツク」ラルドにとりあえずプリプリした後、部屋の奥にいるジストへと田をやつた。

「ジストー？」

アメジが呼びかけるとそれに気づいたジストはアメジへと向き直つた。

「あ、ああアメジか…？」

「ん？どうしたのよ、なんか顔色悪くない？」

「いや…・・・なんでもない。」

ジストはあれからずっと氣になつたままだった。

消えた黒水晶…・

そんなはずはない、と自分に言い聞かせながらも、その不安を拭えないでいた。その気持ちが顔にも表れていたのだろう。アメジに言われ、心配かけまいと慌てて否定した。

「ラルド様と行き違ひになつたのか？」

「そうなのよー、ラルじいを探しに広場に行つたらラルじいはいな
いし、エメラとかつて変な女の子のせいでガーネつて野郎はぶつ壊
れていたし・・・もう・・・

あたしの野望が・・・・・。

「

「そうか、祭りの準備で飛び回つてゐるからな。

だがもうじき準備も終わるだらうし、ラルド様もじきに寺院に戻る
だらう。」「

「はあ・・・・・そうか・・・・。

お面のほうももうじき完成しそうね。」「

アメジ、ジストの手元の面を覗き込む。

「ああ・・・・・。

そういうえば・・・・アメジ、アクアには頼んでくれたのか？」

「えつ・・・・」

アメジ思い出した。ジストの結婚式にアクアを連れて行くと約束し
たこと・・・・

「ああ・・・・うん、じゃ、あたし失礼するわ。」「

アメジ慌ててジスト宅から出て行つた。

「あいつ絶対忘れていたたるよ。」「

タル、いつものように呆れながらその後姿を見送つた。

「アコントリーティーでもたのちみでぢゅ。」

皿分の側でわしゃうひてマコントリーティーをアコトは見下した。

「祭り…か?」

「はいですか。」

おまひをつでおかひのねがたとおがちこつぱこみつこひをねてこつてたでぢゅ。

マコントリーベたのみでぢゅ。」

アコトは本當にわしゃうひて笑うマコントリーティーがれて普段はだれにも見せる」とのなに笑顔をマコントリーティー見せた。

「わづか、よかつたな。」

マコントリーティー下げていた小わな巾着袋かい、菓子を取り出した。つい先ほどまで外出して帰つてきたばかりだった。

「それを買つてきたのか?」

「あ、ちがうでぢゅ。これは…アメジチやまこもひつたでぢゅ。つこれつきあつたでぢゅ。」

「え、あこつに…?」

「ちよれでアメジチやまからドボン」とひだり。こんばん、おかぢやたんのまえにれてまけこつて。

「だこじなおはなしがあるつてこつてたでぢゅよ。」

「…なにか企んでるのかもな…?」

「わよんなことないでぢゅ。」

アメジチやまからドボンとアコトはもとなかよひになりたこでぢゅよ。」

「バカな・・・」

キラキラとうれしそうな目でアクアを見上げるマリンにアクアも
「原稿を届けるついでだ・・・かまわないだろ。」

人目を避けたいアクアにとつて夜は出歩くことができる時間帯だつた。白い髪も白い肌もあまり目立たなくなる。人と会うこともほとんどない。それがアクアにとつてのかすかな自由だつた。だから夜は少し勇気をくれるのかもしれない。

逃げてばかりだつた自分を一番許せなかつたのは自分だつた。

黒水晶と戦い、水晶使いとして目覚めたことが

長年自分を追い詰めてきた亡き父という存在の壁を乗り越えるきっかけになつた。

それはアクアにとつては大きな変化だつた。

アクアの中に光が差し込んだ。その光の先にはアメジがいた。あの時無意識に素直な気持ちが吐けた。

その時発した感謝の言葉がアメジに届いていたのかいなかつたのかわからなかつたが、そんなことはどうでもよくてただ眩しい気持ちがあつたことを覚えていた。

アクアは本の原稿を印刷所のポストに放り込むと、アメジに指定された場所へと向かつた。

街の中に点々と灯る街灯を辿りながら、その場を目指した。

「おつ来た来た。」

自分に近づいてくる人影がアクアだとわかつたアメジは手招きしながらアクアを呼んだ。

「・・・聖乙女・・・」

「アメジ様よ。」

「・・・アメジ。」

「ふふ、やつぱりね。マリンちゃんの頼みなら来てくれると思つていたのよ。」

「別に、用事のついでに来てやつただけだ。」

人とめつたに話さないアクアは、つい無愛想に答えてしまつ。「ま、来なかつたら、マリンちゃん人質にしてでも言つこときかせるつもりだつたけどねー。」

「なつ、・・・こいつ」

アメジ、聖乙女らしからぬ思考だつた。

「なんの・・用だ?」

アメジから田を逸らしてアクアは訊ねる。アクアの脳内はマリンの言葉がずっとぐるぐると回つていた。

「そつそつ大事なことなのよ。

「アンタが、結婚のことよ」

「なつつ? !」

「いきなり? !

アメジの発言が予想外だつたアクアの頭は真つ白になり、ガンガン音がしていた。

「そんなんに興味ないの?
むしろキレイなわけ?」

「そつ、そんなんことは・・な・・」

アクアは頭に響く音がうるさく自分の声さえ聞き取れない気がして
いた。体中の血が頭に逆流していんじやないかとさえ思えた。
パニック状態だ。

「は?」

たくハツキリしないんだから。

もう、アンタはあたしについてくりやいいの。黒水晶と戦つた男で
しょ? もつと胸張つていいんだつてば。顔見られたくないなら変装

でもなんでもすりやいいんだしさ。

ちらりとだけでも参加してやつてよ。

一度ぐらい、弟らしいことしてやつたらいいじゃん。ね。

「え？・・・・・

ちょっとまで・・・なんの話だ？」

「は？なにして・・・だから

ジストの結婚式に、来てくれるか？てことを言つて・・・

「・・・・その、ことだつたのか・・・」

アメジの言つていることが自分の思つていたこととまったく違つて
いた事実に、アクアは脱力して膝をついた。

「ちょっと、そのことつてなによ。

なにアンタ落ち込んでんの？」

おーい？大丈夫かー？アクア

アメジがアクアを現実に引き戻そつと呼びかけていると
アメジの頭上になにかうるさいものが降つてきた。

「おふうつ

それはアメジの頭でバウンドすると、アメジの突き出た尻にしがみ
ついた。

「な、なに？」

アメジがそれを確かめようと触ると、もわもわした毛がアメジの指に
絡まつた。

なにかの生物か？？！

アメジがそれを確かめる間もなく、それは大きな声を出してわめき
だした。

「わーん、なんで帰つてこないんだよー、ガーネ！
お前がいないとオイラ、寂しくつて眠れないよー！ー

「は? な? ? ?

それはアメジの尻にしがみついたまま、なお泣き喚いた。

「あとなんで最近腕枕してくれなくなつたんだよ――――――

「ふうつ、なんだつーのー?」

アメジ、必死に腰を振りて戸にしかみへぐソレを振り落とそ二とす
うぞ落うむいつ一。

卷之三

「ん・・・うわっ？！」

いきなり田の前に突き出されたアメ

ていたのを曰にして、アクアの心臓は一瞬止まりかけた。が、よく見るとそれは聖獣だった。

「二
八

パクる

「えつ？・・・・わつ、違う！ガーネじやない！！」

アメジの尻というワードに自分がしがみついていたものがアメジの尻だと気づいた聖獣は、ぱっとアメジから離れた。

「な、なにすんじや、わざわざ聖獣……」

聖乙女さまの神聖な尻に傷をつけやがつて……

「ひいこ……。」

アメジ、怒りのあまり、その聖獣の両ひげを持つて首を絞めかけた。

「せ、聖乙女つて……まさかあの……？」

「フフン、このリストアルでアメジ様を知らないやつはこなじでしょ？」

聖乙女様は慈悲深いのよ、と聖獣のヒゲから手を離すと、ドスンとそのまま聖獣は落卜した。

「バカ巫女アメジ？！？」

「ああん？！なんだとこらー！？」

再び殺意を感じた聖獣は慌てて否定した。

「違うよ、オイオイじやなくつてタルのやつがそいつってたんだ。」「タル？・・・むあのモチ聖獣め・・・。

まさかアンタ、タルのボーカフレンドってやつ？」

アメジ、タルの顔を思い出しながら、こじしと笑った。

「ち、違つて！あんなモチ顔聖獣じょーだんじやないつて……

オイラはマリンが好きなんだ。マリンはほんとーにかわいいよなあ

▽▽

「そりゃー、マリンかわいマジでかわいいのよ。ゲへへへ

「ゲへへへへ」

アメジとふたりマリンを想い氣色悪く笑いを浮かべる、その様子にマリンの主人であるアクアは

こいつら絶対マリンを近づけさせないと強く誓つのだつた。

「そうだ、オイラ、ガーネを探してたんだ！
聖乙女士さん、ガーネを見かけなかつた？！」
ハツとしてアメジに問い合わせる聖獸。

「え、見てないけど・・・

アンタ、ガーネの聖獸なの？」

「あ、うん、そうだよ！」

オイラはチール。若手水晶使いナンバーワンのガーネのステキな相
棒さ」

「あつっつっそ。」

アメジ呆れてどうでもいい返事をする。

「お願いだよ、早く、ガーネを探さないと・・・

聖乙女士も手伝つてよ！」

早くしないと・・・ガーネが殺されちゃうよ！」

「ええっつ、マジで？」

そななんだよ大変なんだよと慌てるチールにアメジは強く頷いた。

「よし、わかつた。急いでガーネを探そう。いくよ、アクア！」

「！？・・・ちょ・・・なんで俺まで・・・」

アメジに強引に腕をつかまれ、チールに付き合わされるアクア。
ぶすぶすと文句を言つたところで、アメジには届かなかつた。

「ガーネ君、大変だよ、あのウワサずいぶん広まっているみたいだよ。

このことがラルド様の耳に届いたら・・・大変だよ。」

心配そうに言うガラスとは対照的にガーネはのほほんとしていた。
「そのことなら大丈夫だつて。

その後エメラを説得して、ラルド様にはあのウワサはでたらめなんだ。つて言つてくれるつて約束したからな。

ラルド様、オレの話は聞いてくれないけど、エメラの言つことなら信じるからな。

ほんと溺愛しちゃつてるし。」

彼らの言つ「ウワサ」とは中央広場にて、エメラがみんなの前で、自分が好きな人はガーネ。と言つた事だつた。

あれだけの人が集まつた場所で、しかもリスターのアイドル的存在のエメラの発した事、すぐにそのことは若者を中心広まつてしまつたのだつた。

エメラを溺愛するラルドにそのことが知られたらガーネはただではすまない。そのことがわかつてゐるガーネは慌ててエメラを説得したのだつた。

「そう、なんだ。

じゃ、家に戻つても大丈夫なんじゃない?
こんな時間までうろついていたら、チールが寂しがつて騒いでいるかもしれないよ?」

「あいつ極度のさみしがりなんだよな。
昔はそこがかわいいとも思つたけど、最近正直ウザイ」とあるんだよ。

男なのにさ・・・。」

「もしかしてチールがウザいから帰らないの?」

それに笑いながら首を振るガーネ

「なわけないじゃん。」

ちょっと氣になつてわ。パールのやつどうじでる?」

「え・・・パールちゃん?」

さつきまで、向こうでひとりで踊りの練習してたみたいだけど・・・

「そつか、あいつも強がつても落ち込んでいるのかもな。
ずっと族長に憧れていたし、いつちょ慰めてくるか。」

「ガーネ君・・・それって余計なお世話・・・て、ああつ

もう行つちゃつた・・・もうガーネ君は・・・

僕には・・・」

すぐに自分の視界から消えたガーネを確認しながら、ガラスは力なくつぶやいた。

小さな街灯の下で踊る少女の姿を見つけたガーネは声をかけながら駆けて行つた。

「パール、こんな時間までがんばつてるんだな。」
少女はその声の主がガーネだと気づくと、踊りを止めた

「アンタとは違つて、いつでも真剣ですから。」
イヤミつぽく言われるのをまったく気にせず、ガーネは頷く
「オレは本番はバツチリ決めるタイプだからな。」

問題ナツシング」

陽気にケラケラ笑いながらブイサインかますガーネに呆れてため息
をつくパール

「なにしに来たの？」

また大神官さまに怒られるんじゃないの？居候の身なんだつてこと
もつと自覚しなさいよ。」

「そんなことわかってるつて。

パールのこと心配して探してたんだよ。
お前ずっと族長に憧れていたじやん。

オレらのいないとこで泣いてやしないかと思つてさ。」

「なにそれ、余計なお世話よ…。」

「だつてパールが巫女を田指して踊り子になつたのは、その族長への想いからだ。つて以前言つてただろ？」

「そう・・だつた・・・？」

「別にどうでもいいでしょ？！」

「オレ踊り子見るの好きなんだよ。」

あ、いやらしい意味じゃなくってわ。

なんか母さん思い出すんだよな。オレの母さんもパールやエメラみ
たいに巫女を目指していた踊り子で……

だからかな、応援したいんだよ。パールのこと。「
別にもう目指してなんかないわよ。

ムリに決まっているじゃない。あたしは水晶のなによ。
生まれつき水晶のない人間は、どんなに修業しても水晶使いにはな
れない。って

みんな知っていることでしょ？！

「なんでパールはそう自虐的なんだよ？

エメラみたいにノーラ天氣になられても困るけど、もつ少し艾いつみ
たいな前向きさがあれば……」

「止めてよー！そーやつてエメラを基準にして人を見るとこがムカツ
クのよ！」

そーゆーとこが無神経なバカなんだってとつとと氣づけばっ？！

「なつつ、お、おい待てよパール？！」

アメジたち（アクアはムリヤリつき合わされているのだが）はガーネの聖獣チールと共に、そのガーネを探して街中を走り回っていた。チールがうるさく叫ぶので、近所迷惑になる。と苦情が来る前に、（アメジのイメージダウンにも繋がるので）チールを恐怖で黙らせ、静かに捜索するのだった。

「で・・・モサリーノ、なんでアンタは人の頭にのっかってるんだ?
?ああ?」の聖乙女様の御頭に・・・無礼者が。」

「モサリーノってオイラのこと?」

だつてさ、ここがオイラの定位置なんだもん
そんなん知るか!とアメジが引き摺り下ろそうと引っ張るが
アメジの帽子に爪を立て、必死でしがみついた。
後ろから見るとアメジの頭もさもさ状態だ。

「はあー、たくよ。

で、ガーネの野郎が殺されるつてどうじよ?」

そついえ、誰になんで殺されるのか、アメジ知らなかつた。

「ラルドのじいさんだよ!..!」

「へ? ラルじいに?」

「そうだよ。ガーネは幼い頃に両親を亡くしてからは、ラルドのじ
いさんのとこで育てられたつて、そういう話なんだ。」

「ラルじいが、育ての親つてわけ?」

幼くして親を亡くして、大神官が育ての親・・・アメジと同じだつ
た。

「それで今もラルドのじいさんのとこで世話になつてるんだけど

じいさんのとこ女ばつかの家なんだよ。だからか
ガーネもオイラもじいさんから虐められててさ。

なにがあるたびにすぐ怒るわ、なにかとガーネのせいにするわ、で
さ。自分の孫はめちゃめちゃ躊躇して、もうガーネの扱いが酷いん
だよ。もう一人前として認めてくれてもいいはずなのに、
未だに水晶使いとしてまだまだだつて、認めてくれなくて

それでオイラたち、黒水晶と戦えなかつたんだ。

オイラたちが戦えたら、マリンだつて危険な目に合わずにはすんだはずなのにさ。」

水晶使いとして黒水晶と戦つには、大神官であるラルドの許可が必要だったのだ。

水晶使いたちのトップである大神官の命は絶対だつたのだ。彼ら若手が戦わせてもらえたかったのは、ラルドなりに考えがつてのことだったのか、それはラルド本人に聞かねばわからなかつた。

「ふん、バカバカしい……そんなことに付き合つ必要は……」

「あつ……」

アクアのぼやきはかき消された。

「こ下からガーネの匂いがする！」

チールがうるさく反応した。

アメジの頭でうるさくゆれるので、ひるむことチールを押さえつけながら、アメジはチールが反応した先を確認する。

アメジたちのいる通りから、外壁に手をかけながらその下を見下ろすとガーネの姿を確認した。

ガーネがパールともめているのをアメジは確認すると、今にも飛び出しそうなチールを抑えながら身を屈めた。

「なんだなんだ？ 女と密会かー？ くつふふふ。」

アメジおもしろげに笑いを浮かべると、暴れるチールを自分の帽子ごとはずし、下に押さえつけながら、自分の股に挟みこんで自由を奪つた。

「ちょっとなにす・・むぎゅーー。」

アメジのケツ圧に押しつぶされそうなチールは、それに負け、モップのような姿になつていた。

呆然としているアクアに気づくと、アメジはアクアの腕を引っ張り

ながらしゃがませた。

「おー、なにす・・・」

「いいから、し・・・・ん?」

アメジ、自分のすぐ隣にしゃがませたアクアの顔を見て、ひとつ氣づいた。

「あ・・・・そつか

ガーネのやつ誰かに似ている氣がしたら、

アクアに似てるんだ。」

「な、おい・・・ちょ」

動搖するアクアには氣づかず、アメジはせりに顔を近づけて、アク

アの顔をマジマジと見ながら確認する。

「ぱつと見は全然違うんだけどさー。

あいつは色黒で、アンタは超色白だし・・・

でもよつとく見ると、なんか似てる氣がするんだよね。

「田元とかさー・・・・・。」

「なつつ、・・・・・」

アメジを意識するあまり、肌の色が赤く染まりだした頃
下のほうでさらりともめているガーネとパールの前に駆けてくる影が
あつた。

「ガーネ!—」ヒにいたですか?—

「エメラ!—?」

肩まで伸ばした黒髪を揺らしながら、ガーネの側まで駆けて来た。

「あ、あのこたしか広場での・・・Hメラとかつて「じやない。やたらとみんなにちやほやされたた。」

アメジ、ぐつと身を乗り出しながら、その様子を見守る。

「あ、パールさん！

もしかして、ガーネ、パールさんの練習に付き合つてたですか？」

「あ、うん、まあね。」

ガーネが気まずそうに頷く。

「そ、それよりHメラ、こんな時間に出歩いていたら、ラルド様心配するだろ？」

Hメラはなぜか下を俯き、ふるふると体を震わせながら、ガーネへと抱きついた。

「わっ、お、おい？！なんだよ？！」

「おじい様なんて大嫌いです！――！」

もつHメラお家には帰らないです！――！」

「えつええつ？？！？」

ガーネに抱きつきながら、わんわん泣き叫ぶHメラにガーネは呆然とする。パールもなに「じとか？」とその場に固まる。

「な、なにがあつたんだよ？家に帰らないなんてなにバカなこと言つて・・・」

「だつて、おじい様つたら酷いです。

Hメラの言つことわかつてくれないです。ぐすん。」

「え、まさか・・・
ラルド様、あのウワサがウソだつてわかつてくれなかつたつてこと
か？」

上手くいくと思っていたのに・・・予想外のことにガーネ、変な汗
がじわじわときた。

「違うです・・・

エメラ、ちゃんと言つたです。

エメラはガーネが好きだつて・・・

そしたら、おじい様、絶対許さんつて・・・ガーネのことぶつ殺す
あの恩知らずの小憎めつつて

エメラの言つことわかつてくれなかつたです！――

「はい？？！――

なんだよ、それエメラ話が違うじゃないか！！

そのことがウソだつてラルド様に話す約束だつたろ？！

な、なんてことしてくれたんだよ？！

オレマジでラルド様に殺されるじゃないか！！

だいたいなんあんなこと言つたんだよ？！

さらに変な汗が噴出す。

「だつて、エメラ・・・ガーネのことほんとに好きです・・・

「ふざけんなつて、そうだ、エメラもう一度みんなの前で
あれば冗談だつたつて、発表してくれよ。なつ！」
必死でエメラに頼み込むその発言にアメジはぱちつときた。

「 そ う だ ． ． ． あ い つ 、 誰 か に 似 て る と 思 つ た ら ． ． ． 」

（怒）アーティジナル・ラボ（アーティジナル・ラボ）

トウツという掛け声が聞こえたかと思うと、ガーネの頭上に影を感じた瞬間

「……!? ？ ！」 あ、 う、 ？ ？ ！ ？」

ドギャグシャ

およそ三メートルの高さからのアメジのとび蹴り、ガーネに炸裂し、ガーネは激しく吹っ飛んだ。

「...の女がお出で」

「自分の命懽しさに女の子に恥をかかせる」とをやせよつなんて、死んでも許せん！

ましてや公共の場で、結婚すると誓つておきながら、実は他の女と結婚するなどとぬかしたりなんてことない——（怒）

ー あ、あなたは隠し女をも?ー

アメジの脳内にモンドとガーネが重なり、熱くなってしまったのだ。

「な・・なんでここでアナタが乱入してくるんすかー？」
もうわけがわからないガーネ

「わーん、ガーネ！！探したぞーバカー！！」

アメジに繰りて飛ひ隠りてきたのかチリ川
の頭二ハダトのまゝののゝ立一

「あとなんで最近腕枕してくんないんだよ」

「それは・・最近お前デブつて腕がしひれるんだよ。

うあ――――

とたばこ

再びアスカの鎌拳がカーネーと破裂し
モードカーネーは、泣き声に泣き声にならなくなつてた。

「汝等皆是汝等；汝等皆是汝等。」

「うるさいやつめー、

あたしのケツがデカイとかつて言つたーー普通サイズじゃーー

大地の底から呪うぞこら！！」

アラビア語

葬くから生子に簡単に上手にがんばる

その様子は呆れたハーリーは「ハッカじゃないの」と背を向けてその場を去つていった。

「あっ、そうだ、あたしアクアのやつに頼み……」
一通り暴行を終えてすつきりしたアメジは、大事なことに気づいた。

アクア？！

アメジ見上げたら、アクアの姿はなかつた。

アメジはジストの頼みでアクアを説得するはずだったのだが・・・

本来の目的を忘れてしまったダメダメアメジだった。

「サファ姉さま、本当におめでとうです　↙↙」
エメラはじゃれつゝよう、後ろからサファに抱きつきながら、祝
いの言葉をかける。

「ふふ、ありがとうエメラ。」

数人の女性たちによつて、丁寧に衣装を着せられていくサファは、
幸せそうに微笑んだ。

そんなサファを見ながら、エメラはうれしそうに飛び跳ねた。

「はあ・・・・サファ姉さま、ほんとうに幸せそうです。

なんだか、エメラも早く、結婚したいです。」
うらやましげにそう叫ぶエメラ

「エメラつたら、そんなこと言つてはおじい様が寂しがるわ。」
「おじい様なんていいです!!」

エメラは、ずっと巫女になりたかったです。

エメラもお姉さまたちと一緒に戦いたかったです。

でもおじい様は、エメラを巫女として認めてくれなかつたです！

おじい様はいつもエメラのことが一番大事だつて言つですけど、
全然違うです！

エメラの気持ちちちともわかつてくれないです。

おじい様なんて・・・エメラ、もう知らないです。」
ラルドの話題で少し不機嫌にそっぽを向くエメラにサファは

「おじい様はエメラが大事だから、そう言つてしまつたよ。

姉さまたちが皆亡くなつて、私とエメラだけになつたでしょ。
だからおじい様はもう失いたくないのよ。

たしかに過保護すぎるところもあるけど、それもエメラのことを想つ
てのことだから、わかつてあげなさい。」

と優しく言つた。

「・・・でも・・・」

「ほら、エメラいつまでもこんなところにいいで、
もうすぐ祭りが始まるんでしょ？」

サファに言われて、エメラが外へ出ようとした時に彼女の前に現れ
た人影は・・・

「入るぞ、サファ・・・どれどれ準備の程は・・・？」

「こりゃエメラ・・・」

「・・・おじい様！！」

「エメラ！お前昨夜はどこに行つとつたんじや？？？」

「エメラがだれとどこにいよーと勝手です。」

おじい様には関係ないですーー。」

ふーと膨れながらエメラ反抗的になる。

「な、まさかガーネの小僧か？！」

おのれ、あやつめ、今までの恩を仇で返すつもりか？！

ワシは許さんぞ！Hメラーー！」

「なんでガーネがダメですか？！」

サファ姉さまは結婚するのに、Hメラはダメなんて酷いです。

おじい様はなんでもダメって酷いです。Hメラも巫女として、黒水晶と戦いたかったです。

死んでいったお姉さまたちの分も・・・Hメラ戦いたかったです！

おじい様は、Hメラの夢も願いも・・・恋も邪魔するですーーー！」

「簡単に戦いたいなど言つでないわ。

Hメラ・・・ワシはお前が一番大事なんじやよ。

ワシにとつての最後の宝なんじやよ。

それを、ガーネなんぞにやつてたまるもんか。

わあ、Hメラ・・・昔みた人にワシの胸の中に飛び込んでくるんじや。甘えるんじや・・・。」

Hメラを想つあまりの恵比須顔ラルドに・・・Hメラは

「もつおじい様邪魔です。そじじくですーーー！」

「ぬあおつ、い、いりや Hメラーー！」

Hメラはラルドを体当たりでどかすと、そのまま外へと出で行つた。

ついに祭り当日を向かえ、街中の人たちが中央広場へと向かつていった。

広場へ続く通りには、出店が立ち並び、菓子やら酒の甘い香から、寺院近くでは祭り独特の香の匂いが漂っていた。

その通りを行く人々の中には、楽器を抱えた水晶使い達と、祭りの衣装を身に纏つた踊り子の娘達がいた。その中をガーネとガラスも歩いていた。

「うーん、マジで楽しみだな。

聖乙女さまの踊り！」

「ガーネ君てば・・・今日はサファさんのためのお祭りだよ。

それに、聖乙女さまってほんとに踊るのかな？」

「何言つてんだよ。踊るにきまつてるつて！」

目をキラキラと輝かせ期待に震えるガーネだったが、アメジは踊るわけがない・・・無駄な期待だった。

人ごみの中を走る少女は、前方にガーネの姿を見るとうれしそうに駆けて行った。

声をかけようとした瞬間、彼女を呼び止める声があった。

「ヒメラーー！」

「！？」

ヒメラは呼び止められたのに気がつき、立ち止まるとそのまゝへと振り向いた。

「あ、こんにちはです……」

男は振り向いたエメラに笑顔で手を振りながら、近づいた。エメラ、少しして思い出したようにその男の名前を呼んだ。

「プロンさん!」

一人の男を引き連れたその男はプロンといつ若手水晶使いだった。

「エメラ、あのウワサはウソだよな。」

「あのウワサ?」

エメラが首をかしげる

「ガーネの野郎が好きだとかいつ……」

「ああ!

本当です。エメラ、ガーネが好きです。
プロンさんまでご存知でしたか。」

うれしげに笑うエメラに、プロンの田元はぴくぴくとなつた。

「あつ、ガーネ行つちやうです。

じゃ、今日のお祭りがんばるです。」

ガーネの姿が遠ざかるのに慌てて、エメラは後を追つていった。

そのエメラの後姿を見送るプロンの口元からギリギリと変な音が聞こえてきた。

「なんでガーネなんだよ……くそ、忌々しい野郎だ。

自分で若手ナンバーワンとか名乗りながら……俺様のエメラにべたべたしやがつて……

調子こきやがって、今に見ていろ、ナンバーワンの座も、エメラも俺様が手にする。くつくつくつく……」

不気味に笑いながら、憎々しくガーネを睨むブロンだつた。

祭りの音を感じながら、広場のほうを見下ろしていたのは

「おおつ、皿集まつているな。

ほらつ、行くよ、マリンちゃん、アクア！」

アメジは後方のマリンとアクアを呼んだ。

「わあ。はやくいってちゅ。アクアちやま。」

ノリノリなマリンとは対照的に、やはり人前に出ることに抵抗があるアクアの足取りは重かった。

結局アメジは祭り当日に、マリンの協力も得て、アクアを引っ張り出したのだった。

「たく、顔見られるのがイヤならコレでも被つてろつて！」

アメジは自分の帽子をアクアにムリヤリかぶせた。

「おい！」

しかし、あまりにも似合わなかった上、顔も隠せなかつたのでやっぱり戻した。

「ふむ、困つたなー……

あ、あのモサリーノならどうだ？あのモサモサぶりなら十分隠せるかも？！」

アメジがナイスアイデアと思いついたのは、モサリーノ（アメジが

つけたあだ名）ことチールをアクアの頭に乗つけよう作戦だつたが、さすがにアクアが半ギレになつたのでやめた。アメジに変なアイデアを出される前に、とそのまままで行くことに決めた。

水晶使いたちが所定の位置につき、祭りの演奏を始めた。

演奏が始まり、十分後、寺院に向かう通りより、花嫁であるサファが静々と現れた。

寺院前の巨大なテントの下に花婿であるジストと、その側にはそれを見守るラルドの姿があつた。

サファがゆつくりとその方へと歩みを進めると、踊り子達がゆつくりと舞いながら、広場中央を囲む輪となり、緩やかに舞つていた。踊り子、その周囲の水晶使いたちをぐるりと囲むように人々は集まつた。演奏にあわせて、人々の拍手がジストとサファに送られたのだ。

みなに祝福されているという実感がサファを涙ぐませた。

そしてテントの後ろのほうからジストを見守るタルも涙ぐんできた。サファとは少し違う理由で涙ぐんでいた。

「喜ばなきやいけないことなのに・・・やつぱりタルはなんだかせつないたるよ。」

ぐすり。でも大好きなジストのため、タルは今日は笑顔で祝つてあげようと決めていた。そしてジストの膝上にある面を愛しげに見つめた。

「むむ、そういうえば、アメジ殿の姿が見当たらんが?」

ラルド、周囲を見渡したがアメジの姿が見えないのを気にしていた。「来ないのですか?・・・アクアと一緒に来ると聞いていたのですが・・・人が多すぎて、ここまでこられなかつたのかもしねい。

ラルドと一緒に不安げにアメジを探すジストに後ろのタルが
「アメジのバカならこの先の通りで見かけたたる。

あいつ出店の菓子にたかっていただけたるよ。まったく恥ずかしい
バカたる。

マリンとアクアも一緒にいたる。

「やうか・・・アクアも来ててくれたのか・・・。」

タルの言葉に少し安心を覚えたジストはうれしげに手を細めた。

「うんうん、これもマジで上手いよ、マリンちゃんはー。」
タルの言つたとおり、アメジは通りの出店で食いまくつていた。

聖乙女である特権をいかしてタダで食べまくつていたのだった。

「うひを氣に入つていただけるのはありがたいのですが・・・

それより行かなくてよろしいんですか？聖乙女様。
もう式は始まつているんぢやないんですか？

アメジのすさまじさに苦笑いしつつ発した店の主人の言葉にアメジ
はつとなつた。

「ヤバ！ジストに約束したんだ。とりあえず行かないと。
行くよアクア、マリンちゃん。」

アメジ急いで広場に向かおうとしたが・・・

「うおっ・・・ちゅ・・・・」

「アメジちゅま、まえにちゅちゅめないでちひ。」

あまりの人の多さに、広場への道は混雑を極めていた。

人に踏み潰されないようになると、アクアはマリンを胸元に抱え、避難させた。

「これじゃ、行けないな。」

諦め100%なアクアの発言にアメジ

「いや、こっちの道からなら行けるかも！」

アメジくるりと向きを変え、元来た道を進みだした。
階段を駆け上り、人のいない路地へと出た。

「ちょっと狭いけど、こっちを通れば寺院の裏側に出るはずなのよ。」

「乗り気でないアクアを呼びつつ、アメジはその通路へと向かう。
「ちょっと足場が悪いんだけど、なんとか行ける……」

「アクア、なにしてんの？後ついてきな……？アクア？」
アメジが振り返ると、自分の後をついてこないアクアに気づき、すぐに戻った。

狭い路地へ入る道の前で、うずくまつて震えるアクアがいた。
アクアの異常な様子にアメジも不安に思い側に駆け寄る。

「アクア、あんたどうしたのよ？」

「アクアの前でしゃがみこみ様子を伺うアメジ

「アクアちゃん？ だいじょうぶでちゅか？」

アクアから降り、心配げに顔を見上げるマリン

「アクア……！」

アメジが覗き込んだアクアの表情は、白い肌をさらに青くさせ、恐怖に震える顔だった。

「アクア、アンタだい・・・」

「・・・来る・・・奴・・・が・・・」
かすかに聞き取れるほど声で、アクアが漏らした言葉の意味をアメジは理解できなかつたが。

震えるアクアを抱き起こそうとした瞬間、アメジの体中の水晶が激しく反応するかのように、ぞわぞわと不気味な物を感じた。
それはアメジが今までに感じたことの無い、不気味な感覚だつた。
危険感知能力・・・そうなのかも知れない。
そのことにアメジが気づくのはその直後だつた。

ざわわわ、

全身鳥肌が立つると同時に、アメジたちの上空を横切つた巨大な黒い影・・・

「・・・? ?

そんな・・・なんで・・・」

アメジやアクアが感じたソレは、たしかに滅んだはずの
あのバケモノだつた。

いや、あのバケモノよりも・・・はるかに巨大で残忍で恐ろしい存

在であると、アメジは本能的に察知した。

「黒水晶・・・・・！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310z/>

アメジスト

2012年1月8日23時46分発行